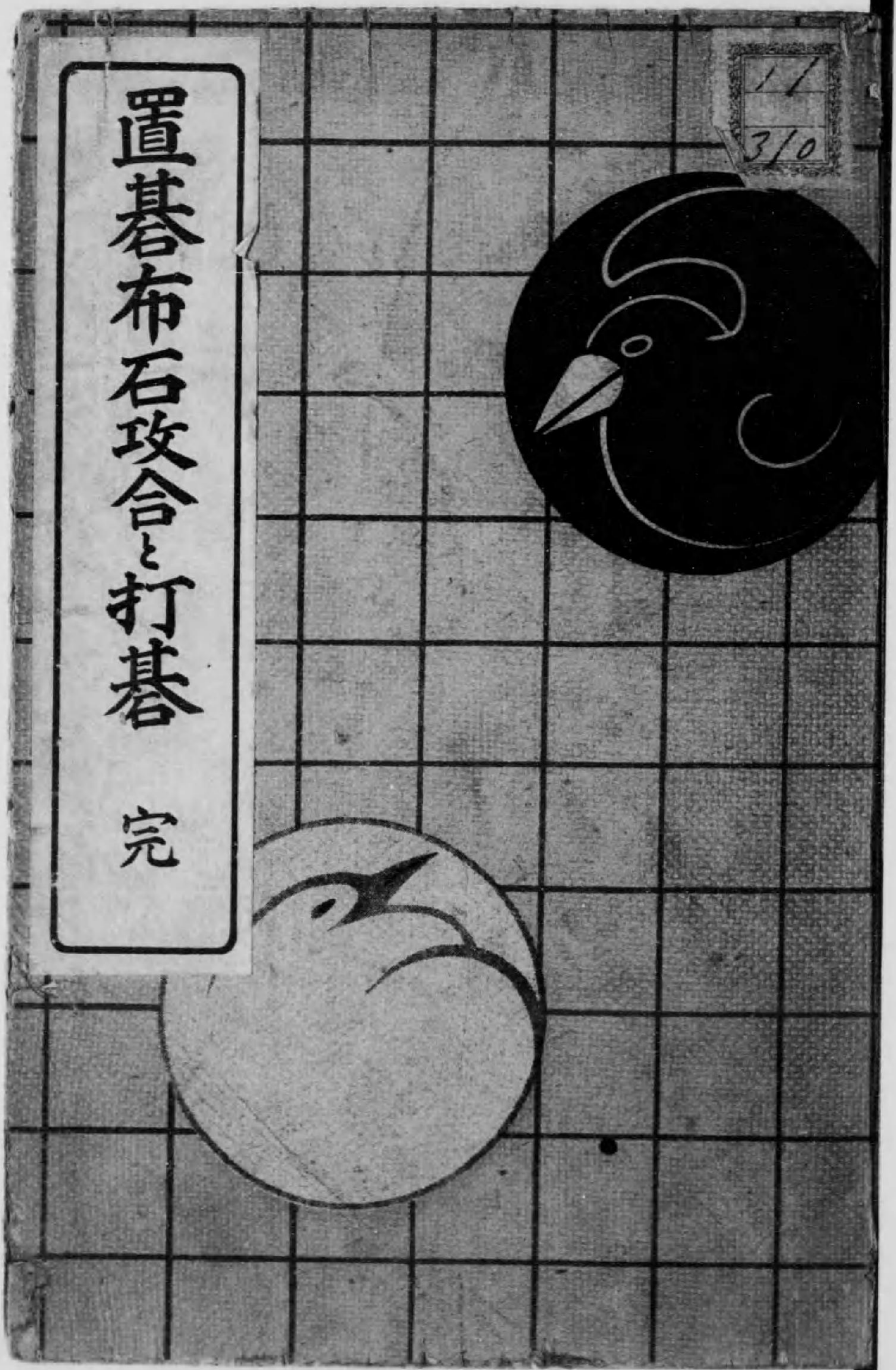


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



置碁布石攻合と打碁
完

3/0

本因坊六段中根鳳次郎
本因坊初段宇野積雄 共著

置碁布石攻合と打碁

博多成象堂發兌

序

從來斯道の名人上手と呼ばれたる人は大抵有益なる著書を後昆に残せり予等是れに依りて益を得たること夥し予哉不敏なりと雖も多年烏鷺を手にせるが故に後進を裨益すべき新研究尠ならず因て是れを世に出さんと欲せしも心身共に多忙にして其機を得ず然るに今回理想的の助手宇野積雄氏を得たるを以て共同事に従ひ整理し得たる原稿より續々發刊せんとす世人よ乞ふ一讀予の苦心の存す

本因坊六段中根鳳次郎
本因坊初段宇野積雄 共著

置碁布石攻合と打碁

博多成象堂發兌

序

從來斯道の名人上手と呼ばれたる人は大抵有益なる著書を後昆に残せり予等是れに依りて益を得たること夥し予哉不敏なりと雖も多年烏鷺を手にしるが故に後進を裨益すべき新研究尠ならず因て是れを世に出さんと欲せしも心身共に多忙にして其機を得ず然るに今回理想的の助手宇野積雄氏を得たるを以て共同事に従ひ整理し得たる原稿より續々發刊せんとす世人よ乞ふ一讀予の苦心の存す

序

る所を諒ぜられんことを。

大正七年の初秋

中根鳳次郎識

置碁布石攻合と打碁

置碁布石攻合法

目次

第一局	第二局	第三局	第四局	第五局	第六局	第七局	第八局	第九局	第十局	第十一局	第十二局	第十三局
二	四	六	九	一一	一三	一五	一七	一八	二〇	二三	二四	二六

第十四局	第十五局	第十六局	第十七局	第十八局	第十九局	第二十局	第二十一局	第二十二局	第二十三局	第二十四局	第二十五局	第二十六局	第二十七局	第二十八局
二八	三〇	三三	三四	三五	三七	三八	四〇	四二	四四	四六	四八	四九	五一	五三



目

次

一



置碁布石攻合と打碁

本因坊六段 中根鳳次郎 共著
 同 初段 宇野積雄

目次

第二十九局	………	五
第三十局	………	六
第三十一局	………	七
第三十二局	………	八
第三十三局	………	九
第三十四局	………	一〇
第三十五局	………	一一
第三十六局	………	一二
第三十七局	………	一三
第三十八局	………	一四
第三十九局	………	一五
第四十局	………	一六
打碁	………	一七
第一局	………	一八
第二局	………	一九
第三局	………	二〇
第四局	………	二一
第五局	………	二二

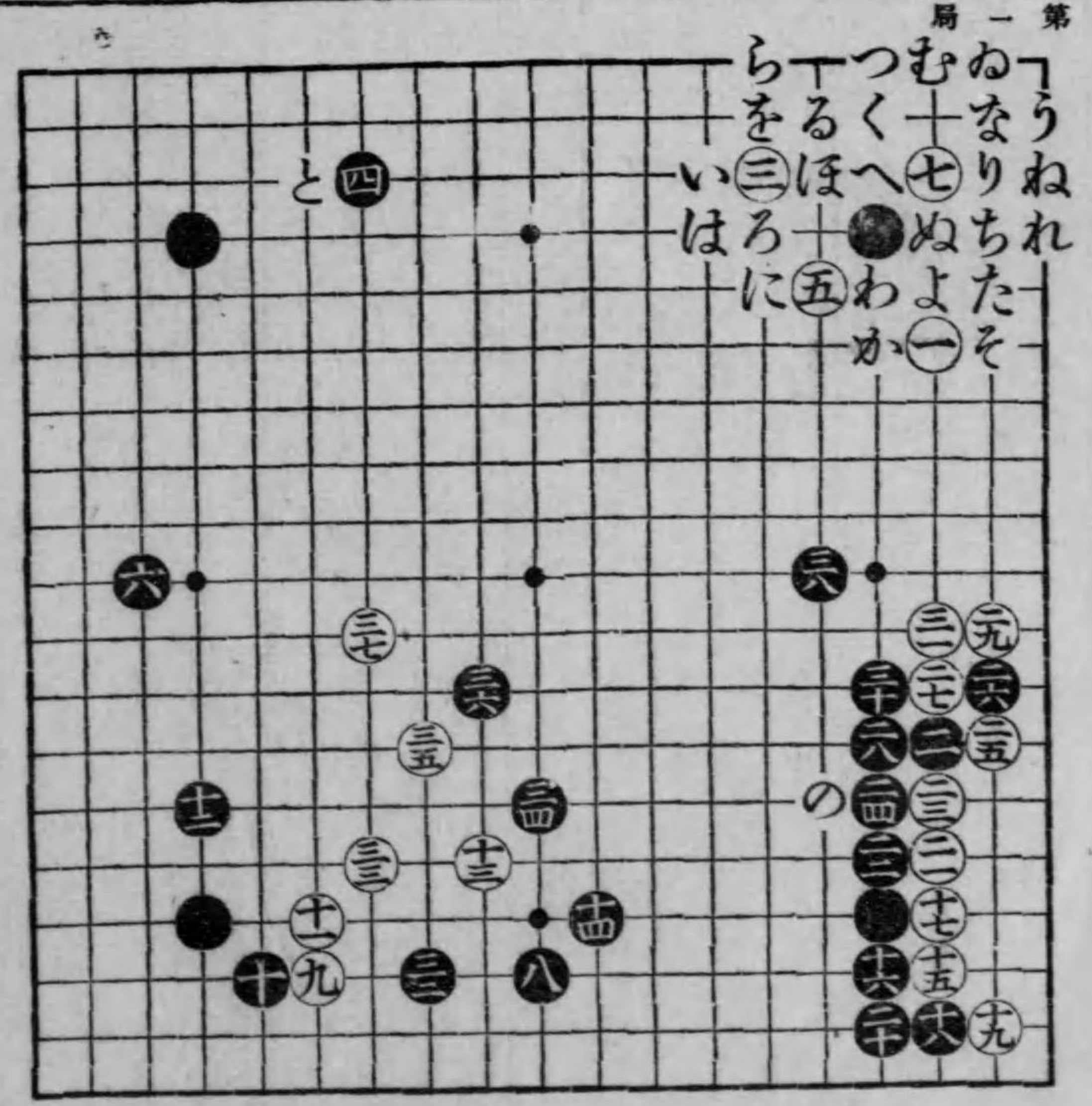
目次(終)

第六局	………	二七
第七局	………	二八
第八局	………	二九
第九局	………	三〇
第十局	………	三一
第十一局	………	三二
第十二局	………	三三
第十三局	………	三四
第十四局	………	三五
第十五局	………	三六
第十六局	………	三七
第十七局	………	三八
第十八局	………	三九
第十九局	………	四〇

二

置碁布石攻合法

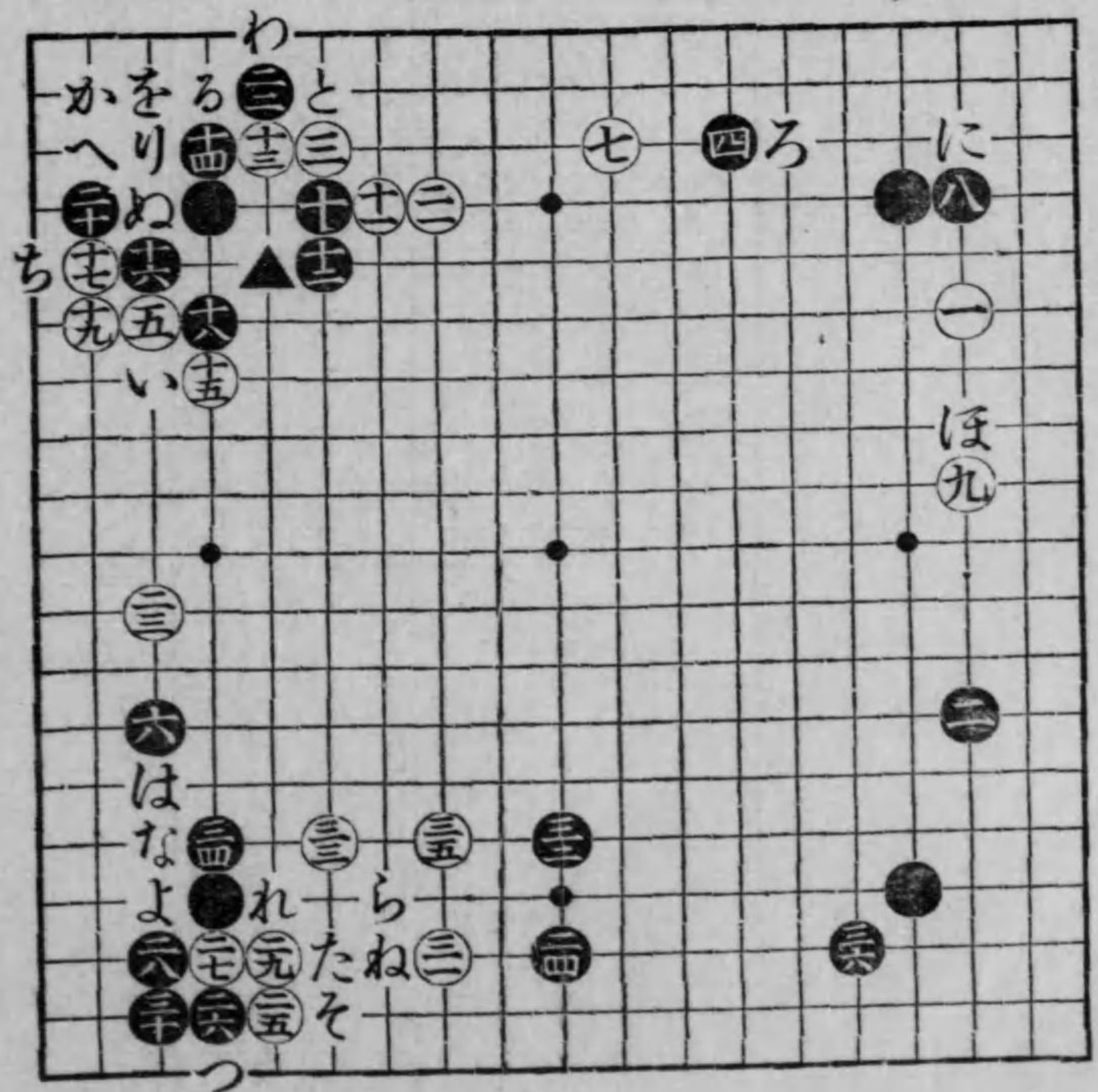
(第一局) 白一の小桂馬掛りに對し黒(い)と應ずるのが普通であるが然る時は白から二三の點に掛かれて右側中邊に大模様を張られることになる。さうなると碁が大變打ち難くなるから黒二と打つて白の二三の掛りを妨げたのである。白三の兩掛りに對して黒(ろ)と頂け白(は)と列ね黒(に)と行び白(は)と行び黒(へ)と約へるのが定石であるがさうすると次に白から(と)と掛かれて矢張大模様を構へられることになる。因て黒は右上の置石を捨てる覺悟で四と拓い



たのである。今度黒に(ろ)と頂けられては大變であるから白五と打つたので黒六は此場合に於ける大場である。白七の手を打たずに他方面に着手して居ると黒は時機を見て七の點に尖んで活きて仕舞ふ。其次第は黒七白(ち)黒(り)白(ぬ)黒(る)白(は)黒(へ)白(を)黒(わ)白(か)黒(よ)白(た)黒(れ)白(そ)黒(つ)白(ね)黒(な)白(ら)黒(む)となる併し白が(ね)と打つた時黒(な)と引かずして(う)と白の一子を取らんか忽ち白に(ゐ)と打たれ黒(な)白(ら)黒(む)の時白から(く)と打込まれて殺されて仕舞ふ。故に白(ね)の時黒(な)と引くことを忘れては不可。右の次第で白が一、三、五と封鎖した以上は七の點にと、目を刺すか至當である。黒八は六と同様大場である。白九は普通の着點である。黒十と尖み頂け白を十一に立たせて十二と備へたのは既に右方目下に黒八が打つてあるから。白は勢ひ十三の點に走路を取らなければならぬ。白十三は單に自己を凌いだと云ふ丈の意味に解釋するとあてが違ふ。今度黒が手を抜けば十四の點に浴せかけて黒を底地に壓迫しやうと云ふ白の魂膽で詰り逃げがけの駄賃を取らうと云ふ意味も含まれて居るのであるから黒は十四に尖んで之を防がねばならぬ。白十五は此場合往々用ひらるゝ着手で別に説明する程のこともない。黒十八は無論全局の形勢に依るべきものであるが此場合では至極良い。黒二二の手で(の)の點へ兩斜走に掛けることもあるが此場合では斯く打つ方が良い。黒二六は二七の點へ行びるのが普通であるが此處は先手を取らん爲め斯く打つたのである。黒三二、三四、三六は黒が十四に尖んだ時からの豫定の行動で白は三三、三五、三七の手を抜く譯に行かない。黒三八は黒白何れよりするも最要點で所謂天王山である。

(第二局) 白一と掛つて来たの
に對し黒二と他隅を打つたのは
第一局説明の通りである。
白三の掛りに對し黒普通の如く
(い)と應ずると次に白から(ろ)
と掛られる手順になるから黒
四と拆いて白の(ろ)の掛りを妨
げたのである。
白五と掛つた時黒十以下二二と
運んでも敢て悪いと云ふことは
ないが次に白から(は)と掛から
れるのが厭であるから斯く六と
打つたのである。
白七を▲印に打つと黒は左上隅
の置石を捨て、八の點へ締め、白
に九と拓かせて二四の方面に着
手するに極つて居る。

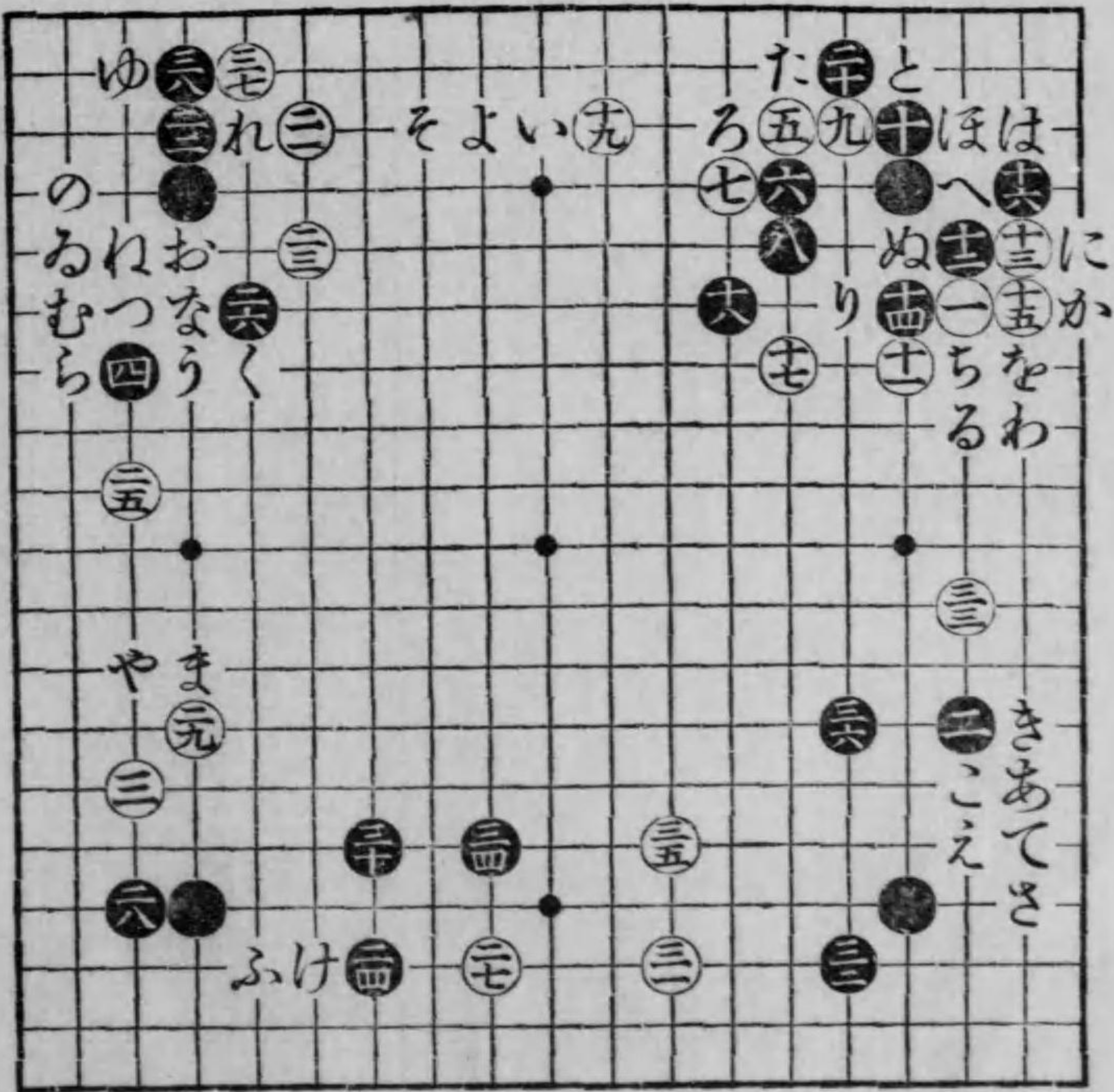
局二第



それでは碁が極つて仕舞うて面白くないから白七と變化を試みたのである。此時黒八の手を抜くと
白に(に)と打込まれて隅で活きられて仕舞ふ。さうなると白七の詰めある丈それ丈隅を窘められな
ければならないことになるから黒は八の手を抜く譯に行かぬ。此時白九と拓いたのは黒から(は)又
は九の點に夾撃されるのが辛いからである。黒十以下二十までは古來の定石で隅に根據を占めて外
部に發展しやうと云ふ意である。白二一は自己を固めつゝ(へ)の頂を狙つたので黒は二二に刎ねて
防備を施さなければならぬ。此時白(と)杯に約へんか黒は最早隅を侵略される氣遣ひはないから手
を抜いて他を打つに極つて居る。次に白(へ)と來ても黒(ち)白(り)黒(ぬ)白(る)黒(を)白(わ)黒(か)
と活きて仕舞ふ白は迂濶に(と)杯に應じて居れぬ故二三の點に陣地の擴張を計つたのである。黒二
四と大場を占め白二五と陣中深く斬り込んだ時黒二七の點に並んでゐても悪くはないが二六の點に
肉薄するも亦定石である。黒二八の手で二九と切り白二八と行ひ黒(よ)と約へ白(た)と刎ね黒(れ)
と粘ぎ白三十の點に約へ黒(そ)と切り白(つ)と取つた時黒(ね)と抱へて外勢を張る手段もあるがこ
れは白に征の當りを利かされる俟があるから浮つかり打てぬ手である。黒三二は今度白が手を抜け
ば(れ)の點に押して厳しく攻め立てやうと云ふ意であるから白は三三に備へて之を防ぐと同時に三
四の頂を狙ふが良い。白から三四に頂げられると黒(な)白(れ)黒(よ)となつて白に形を整へられる
ことになるから黒三四に並んで之を防ぎつゝ(ら)の急所を狙ふが得策である。而して白三五と備へ
た時黒は三六に尖んで隅を確實に護るのである。黒軍の優勢なることは固より論を俟たぬのである。

第三局

(第三局) 黒二、四は俱に前局の説明の通りである。
 白五は兩掛りに打つた時黒右上の置石を捨てる意で(い)と詰める趣向もあるが譜の如く六以下十六までの定石に運んでも良い黒十八は白十七に對する當然の應手で(ろ)の點に切りを含んで居るのであるから白十九と打つて之に備へるが定法である。
 此時黒二十の手を抜くと白から(は)の點に頂けられて面白くないと云ふことを前局に於て述べたが、今其次第を詳述せんに白(は)の時黒(に)と勿ね白(ほ)と覗き黒(へ)と粘ぎ白(と)と盤り黒(ち)と切り白(り)と當て、黒



(ぬ)と粘ぎ白(る)と約へ黒(を)と行び白(む)と約へた時黒(か)と三子を捕へることが出来るが其代り隅を悉皆白に取られることになるから其損失は黒の方が大きいのである。そこで此く二十と勿ねて其防禦線を張つたのであるが又、一面には若し白が手援することもあらば黒(よ)と詰めて、白に(た)と打たしめ次に(れ)と締らうと云ふ意味も含まれて居るのである。さればこそ白二一に拆いて之を妨げたので黒二二と締つて三々の打込を防ぎ白二三に立つて黒の(そ)の夾撃に備へるのが普通である。

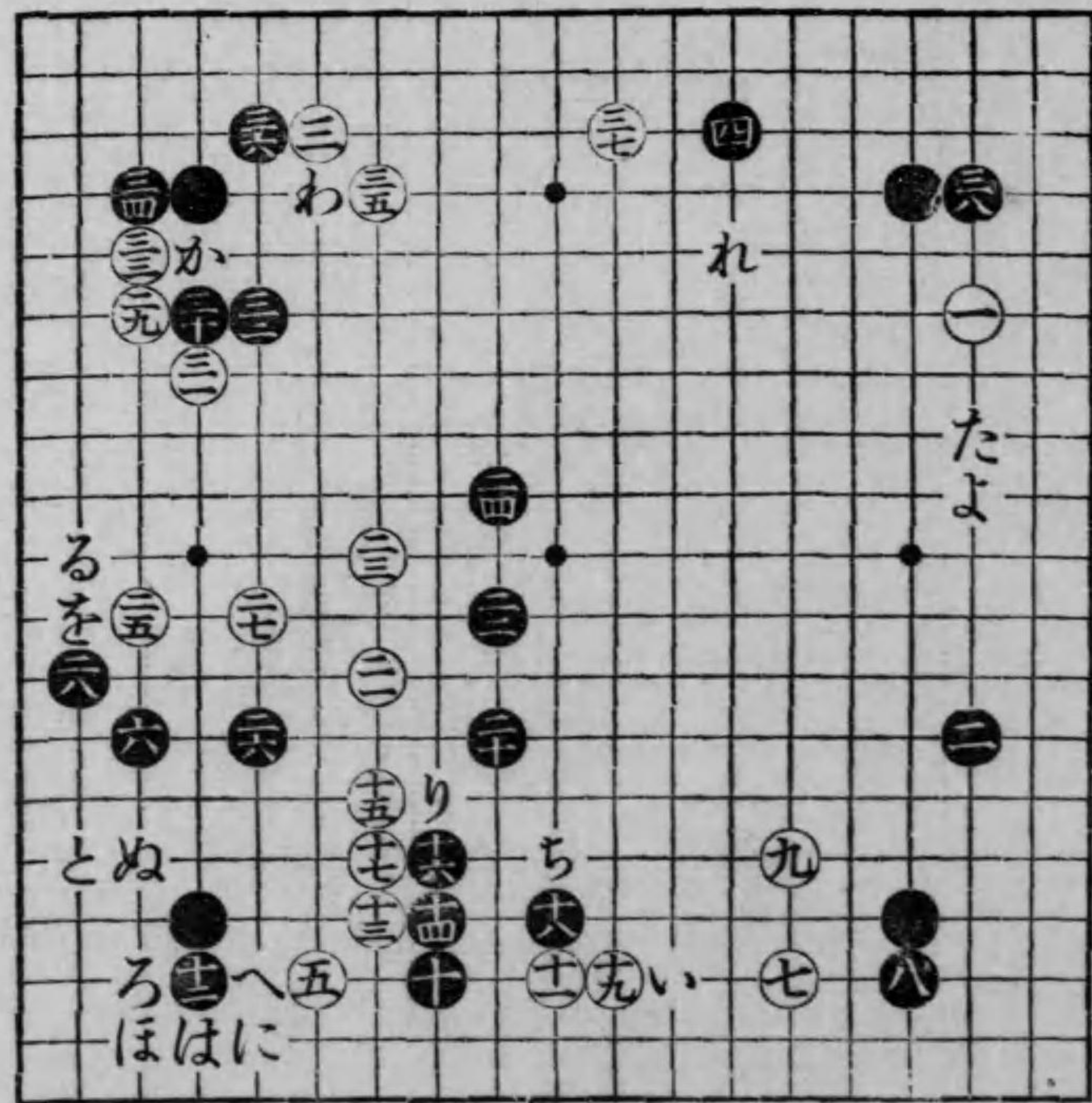
黒二四は左下隅の置石を擁護したので此場合に於ける唯一の好點である。
 白二五は陣地を擴張しつゝ(つ)及び(ね)の打込を狙つたのである。白から(つ)に打込まれる結果は黒(な)白(ら)黒(ね)白(む)黒(う)白(ろ)黒(の)白三七黒三八となる。又(ね)の點に打込まれる結果は黒(お)白(つ)黒(な)白(ら)黒(う)白(ろ)黒(の)白三七黒三八となる。何れにしても黒は隅に萎縮して仕舞つて面白くない。因て黒二六に備へたので此手を(く)の點に單關するも亦定石である。
 白二七と夾み黒二八と締つた時白二九と尖んだのは黒の(や)の夾撃を防いだので此手を(ま)の點に打つこともある。

黒三十に單關したのは左上隅に就て詳説した如く白の(け)(ふ)の打込を防いだのである。
 白三一に拓いて根據を据えた時黒三二と尖んだのは無論左側の敵を攻撃する意味も備へて居るが又一面には隅の侵入を防禦したことにもなるのである。
 此時白三三と搦手に攻め掛つたのは(こ)(え)(て)の何れかに侵撃の意である。白から(こ)(え)の點

に打込まれる結果は既に左上隅に於て説明したが白から(て)の點に打込まれる結果は黒(え)白(あ)
 黒(こ)白(き)となつて隅を縮められることになる。
 そこで黒先づ三四に冠せて二七、三一の白をおびやかして白三五と逃げた時黒三六と立つて隅の打込
 を防ぐがよい。
 白三七は黒の(そ)の打込を防ぐと同時に(ゆ)の飛込を狙つたので黒は手を抜いて他を打つこともあ
 るが先づ三八の點に約へて置くが無難である。

(第四局) 白五と掛つた時黒十
 一の點に夾む手段もあるがそれ
 は追て述べることにしよう。
 白七及び黒八は前局説明の通り
 である。
 白九は十九の點に拆いて、黒の
 (い)の夾撃を防ぐのが普通であ
 るが四子も置かせた碁であるか
 ら斯く變化を試みたのである。
 黒十の手で(い)の點に打つ手段
 もある。
 白十一に詰めた時黒十二に縮ら
 ずして十三の點に尖むものある
 は往々見受くる處であるが之は
 甚だ宜しくない。何故なれば此
 時白(ろ)と打ち黒十二へ約へ白
 (は)と刎ね黒(に)と約へ白(ほ)

局四第



置碁布石攻合と打碁

と粘り黒(へ)と粘りだ時、白に(こ)と飛ばれて肝腎の根據地を滅茶々に荒されることになるからである。故に黒は先づ十二と打つて隅を固め白に十三に尖ませて黒十四に押し出し白十五に飛出した時黒十六に覗いて白を十七に粘がしめ黒十八に頂け白十九に引いた時黒二十と一足先へ飛出すがよい。黒十八の手で直に二十の點に飛出すと白に(ち)と覗かれ黒(り)とつながつた時白に二一に飛ばれて黒の形が悪くなるから黒は先づ十八に頂けることを忽にしては不可。

白二一より黒二四までは双方正當の應接で則ち動順相應と云ふ棋定に従つたものである。

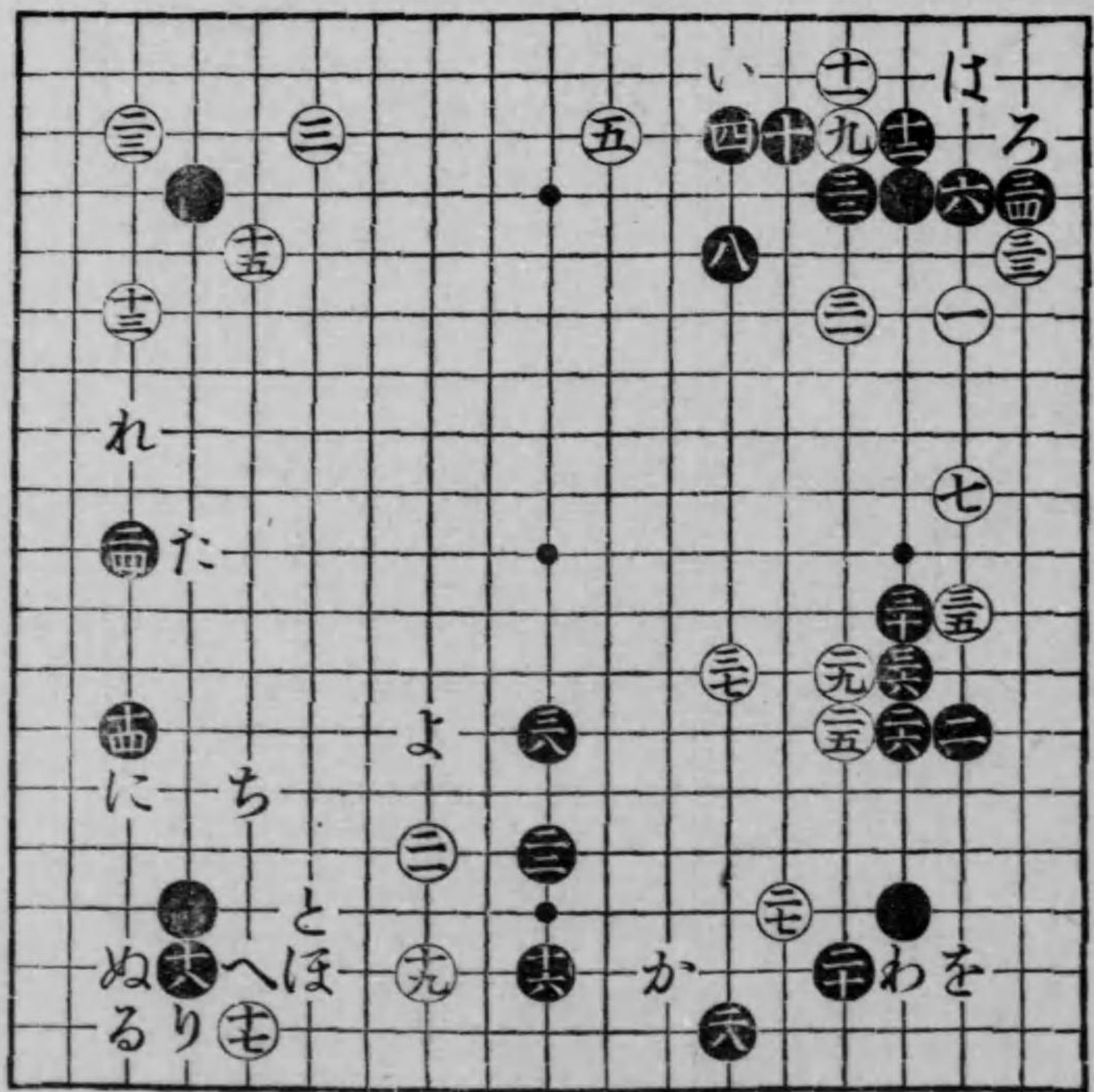
此時白二五と打つて(ぬ)の打込を狙ひ黒二六と打つて之を防ぎつゝ二七の點に侵襲を狙ひ白二七に連絡を保ちつゝ再び(ぬ)の打込を狙つた時黒二八に尖んだのは隅の打込を防ぐと同時に(る)の點に飛出を窺つたのである。此時白(を)と約へたいのは山々であるが若し然らば黒は最早隅に打込はなから手を抜いて左上三六の點に尖み頂け白(わ)と立つた時黒三三若しくは二九の點に拓くことになる。斯くては白は何等獲る處なきのみならず五以下の大石が益々危地に陥るから、此場合(を)杯に儲ける譯に行かぬ。そこで白二九の點に掛つたので黒三十、三二と頂引き白三三に行ひ黒三四に約へたのは定石である。白三五は(か)の點に出切を含んで居るのであるから黒三六に尖頂けて之を防ぎつゝ隅を固めたのである。白三七黒三八はお極りの手で白は此場合(よ)と拓いて黒の(た)の夾撃に備へずばなるまい。黒も(れ)と立つて隅の打込を防ぐがよい。

(第五局) 黒八までは既に前段に於て屢々説明したから茲には略す。

白九と打込んだ時黒十の突當り最も肝要の手筋で此手を三二杯に約へると其結果白十一に並び黒十に約へて(い)の頂盤を防ぎ白(ろ)と打ち黒三四へ約へた時白に(は)と活きられて仕舞ふ。斯くては初め黒が八と立つたのが何の意味もなさぬことになるから白九の時黒十に突當り白十一の時黒十二に約へてと一目を刺すことを忽緒にしては不可。

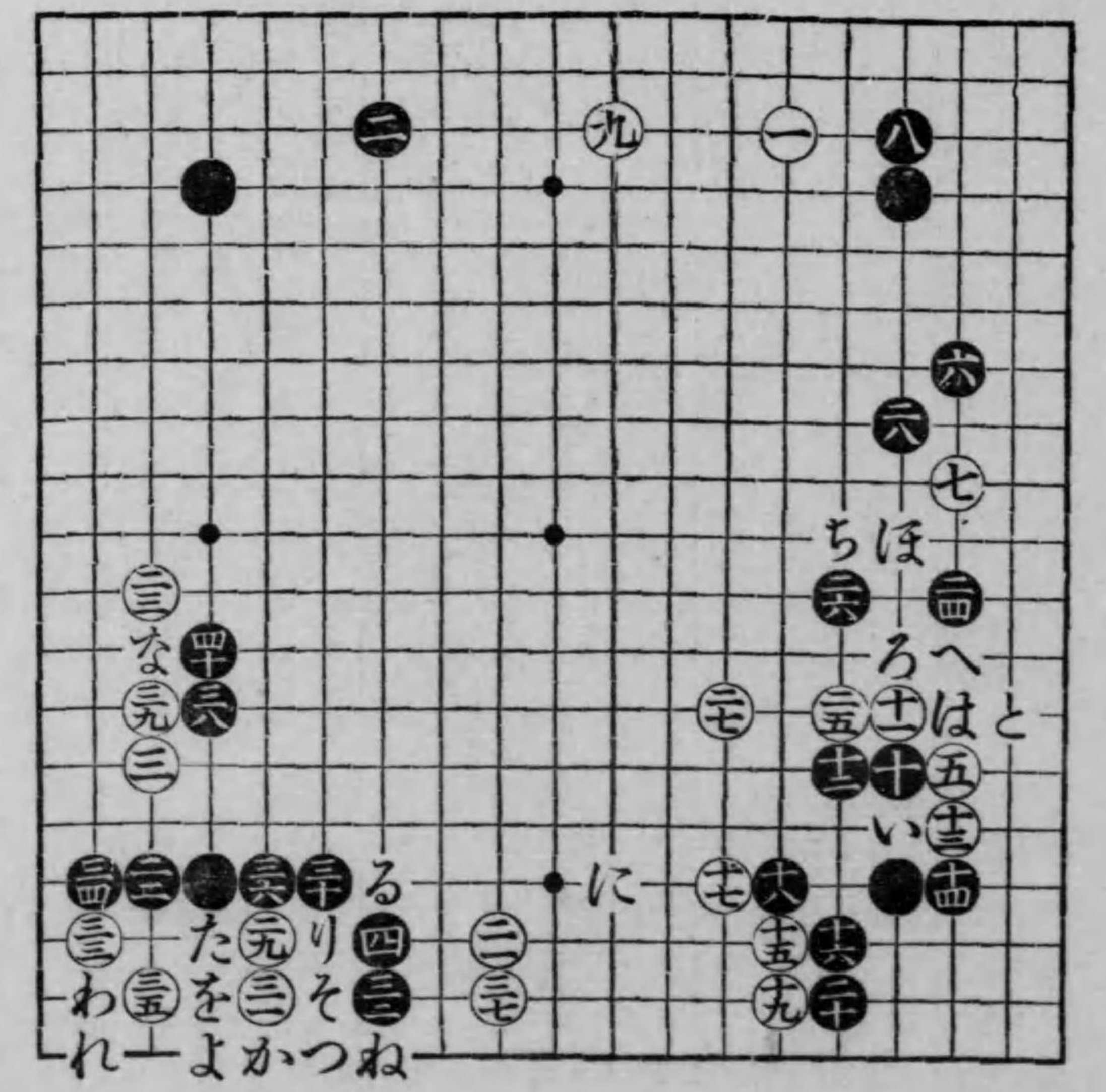
白十三と兩掛りに來た時黒は左上の置石を捨て、十四の點に拓いたのは白から(に)の點に掛か

局五第



られるのが厭だから斯く打つたので白十五に圍つた時黒十六の大場を占めるが良い。白十七の手で(ほ)の點に打込む手段もないことはないが若し然らば黒(へ)と尖頂け白(と)と立つた時黒(こ)と打つて(ほ)(と)の白を攻めつゝ左右の陣形を固めて仕舞ふ。斯くては黒の理想通りになる譯で面白くないから白は此く十七に打込んだのである。此時黒(り)と約へ白十八に割込み黒(ぬ)と約へ白(へ)と粘いだ時黒(る)と粘ぐ定石もあるが譜の如く十八に並んでゐても良い。黒に十八に並ばれると次に(ほ)と打たれる筋が出来来るから白十九に拓いて十七の味方を救はなければならぬことになる。此時黒二十に尖んだのは白に(を)又は(わ)の點に打込まれるのを防いだので此場合逸すべからざる要點である。白二十一と立つたのは十七、十九の二子の備へをなしつゝ(か)の點に打込を含んで居るのであるから黒二十二と立つて之を防ぎつゝ右側面の地盤を擴大すべきである。此時白尙(よ)の點に飛出したいやうな氣がするであらうが若し然らば黒は手を抜いて二三の點に尖むは必定で黒に此隅を活きられることになる。白は全く蛇も蜂も取らぬことになるから此場合二三にとゞ目を刺す外はないのである。黒二四の手で(た)と打つて(れ)の拓を含みつゝ遙に十七以下の白を狙ふも良い。白二五、二七は最早隅に打込む餘地がないから上の方から爆彈投下と出懸けたので黒二六、二八は之に對する最善の防禦手段である。白二九と並んだ時黒三十と打つたのは飽くまで敵を兩断して戦ふの意で白三一以下黒三四と約へた時白三五と頂け黒三六に粘いだ時白三七に走路を取る外はないのである。此時黒三八へ飛出したのは左右の敵を搦み撃ちに攻めやうと云ふ策戦で時機に叶ひたる手段と謂ふべきである。最早事茲に至つては黒軍の勝利歴然、白に勝算はないのである。

局六第



(第六局) 黒二より白九まではお極りの手で茲に重ねて説明するまでもない。黒十は外部發展旁々五七の間合を窄める爲めに打つたので白十一以下黒十四となるのが普通である。白十五と掛り黒十六に尖頂けた時白若し十八に立ちもせんか黒(い)と粘ぎ白(ろ)と並んで(は)の切を防いだ時黒から(に)と打たれて十五、十八の二子を攻められることになる。因て白十七に尖んだのである。黒十八以下二十に約へたのは隅を堅固にして置て機を見て二四の點に打込まん所存である。此

時白(ろ)と備へんか、黒から(に)と打たれて下の三子を攻められる。そこで白二二に拓いたので黒は豫定の如く二二に締り白を二三に拓かせて二四に打込んである。

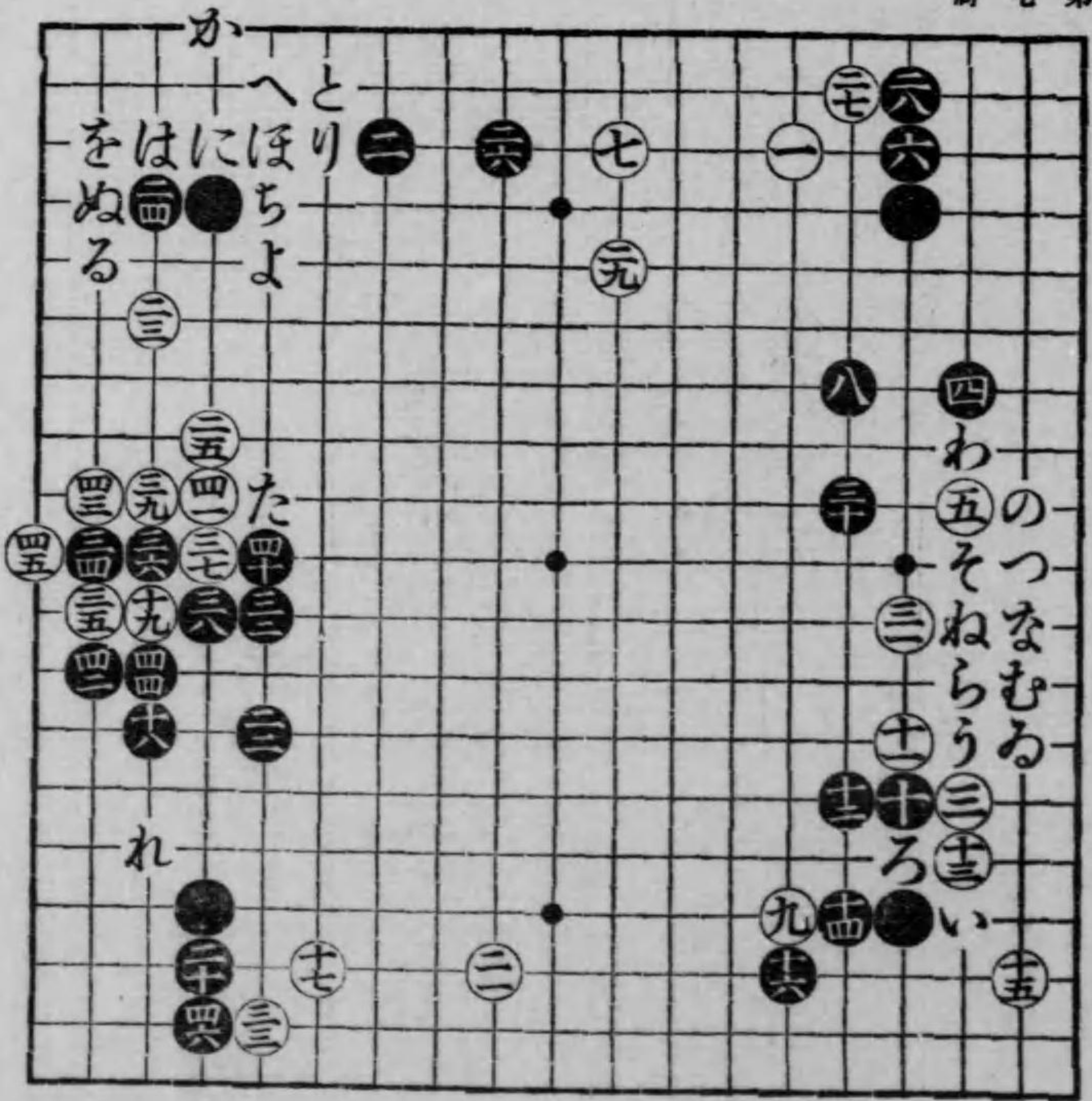
此時白(ほ)杯に尖むと黒に(は)と切られ白(へ)の時(と)と行ひられて五、十三の二子を擒にされるから白は二五の點に押出す外はない。乃ち黒二六に立ち白二七へ遁出した時黒二八へ尖んで七の白を捕獲すべきである。此時白(ほ)と來れば黒(へ)白(は)黒(ち)で文句はない。

白二九の打込に對し黒三六と約へ白(り)と行ひ黒三十と約へ白三二と勿ね黒(る)と粘ぎ白三一に掛粘いだ時黒(を)と打つて隅を護る手段もあるが譜の如く三十の點に尖むも悪くはない。

白三一に並んで三二の頂盤を狙ひ黒三二に並んで之を防ぎ白三三と打つた時黒三五白三四黒(わ)と約へて隅を護る手段もあるが斯くては二九、三一の二子は確實に之を捕獲することは出来るが其代り白三三、三四となつた結果自然左側三、二二の白が丈夫になるから何れが利益であるか茲に斷言は出来ぬ。黒三四と約へ白三五と生きた時黒三六につなぐことを等閑に附しては不可。此時白三七の手を抜くと黒(か)白(よ)黒(た)白(を)黒(れ)白(を)黒(つ)白(ね)の時黒(つ)と投込んで白死となる。故に白は三七と打つて隅を活き黒は三八、四十、自己を守りつゝ(な)の出切を狙ふべきである

(第七局) 白九と兩掛りに打つも亦常用の手段である。黒十、十二と頂引き白十三へ行んだ時黒(い)と約へると白に(ろ)と出切られるから黒十四に並び白十五に斜走した時黒十六の勿最も肝要の筋で黒若し此手を抜くと忽ち白に此處に下られて根據を奪はれて仕舞ふから之は必ず忽にしては不可。黒二二の手で三九の點に夾むものあるは往々見受くる處であるが此は甚だ面白くない。何故なれば此時白(は)と打込み、黒二四白(に)黒(は)白(へ)黒(と)白(ち)黒(り)白(ぬ)黒(る)白(を)黒(三)白(か)黒(よ)の時白三二黒二二の

第七局



時白(た)とならば如何。又黒(よ)の時白三二に立たずして(れ)と打込まば如何。黒は左上隅を散々々荒された上右下隅も幾分減らされることになつて非常なる損害を蒙らなければならぬ。故に黒は三九杯に夾まずに二二と立つて(れ)の打込を防ぐが急務で然る上は白も亦二三に拓いて三九の夾撃に備へねばならぬことになる。

黒二四と縮り白二五に圍ふた時黒二六に詰めたのは(は)の打込を防いだことにもなるが又一方一七の白を狙つたことにもなる。さればこそ白二七、二九と走路を取つたのである。黒三十は(そ)の頂又は(つ)の打込を狙ひ且つ一以下の一隊に對して幾分攻撃の意も含んで居ることは勿論である。借黒から(そ)と頂けられる結果如何と云ふに白(つ)黒(ね)白(な)黒(ら)白(む)黒(う)白(あ)となる又黒から(つ)と打込まれる結果は白(そ)黒(の)白(な)黒(わ)となる。何れにしても白の損失であるから三一の點に一着防備を施して置く必要があるのである。

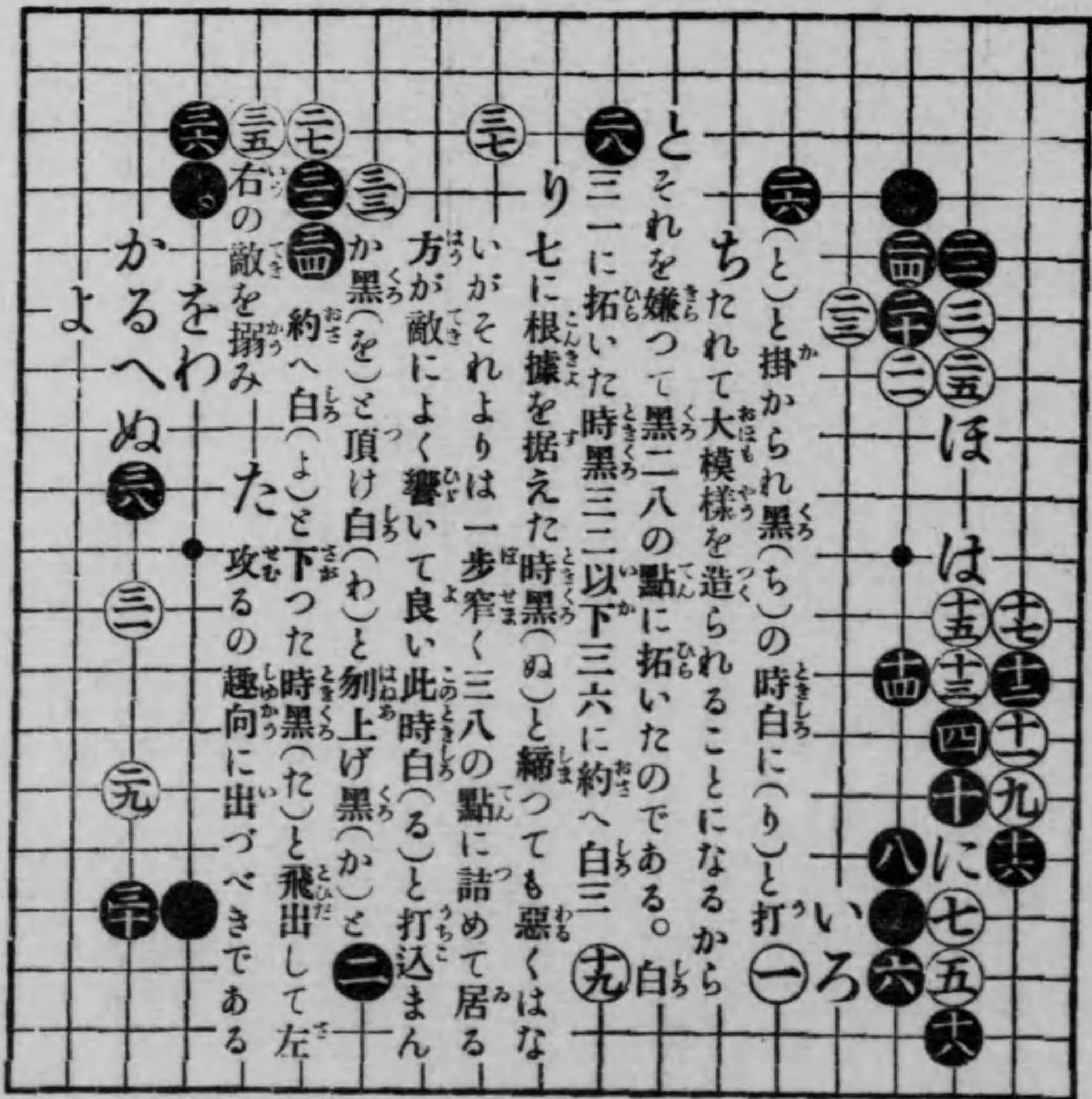
黒三二の帽子も亦三六の頂及び三四の打込を狙つたのである。然るに白手抜して三三と来た故黒は三二の意志を繼いで三四と打込み白三五以下四五と取つた時黒四六に隅を縮つたので斯くては白は三四、三六の二子を捕へてやつと事なきを得たが黒に三八以下四四までびし／＼極めつけられて外勢を張られる結果となつては白に勝算はないのである。

第八局

(第八局) 白五と打込んだ時黒七に約へ白六に連絡し黒(い)と行ひ白(ろ)と粘いだ時黒(は)と拓く手段もあるが譜の如く黒六以下十までの運びに打つても良い

黒十二は此場合十三の點に行ひ白十九に拆いた時黒十二と約へ白(に)と繋いだ時黒(ほ)と詰める方が良い。

何故なれば譜の如く白十三以下黒十八と振替つた結果は自ら三の一子が十三以下の三子と相俟つて勢力を加へることになるからである。黒二十は隅を固め且つ白の三、十五の間合を窄め尙白二五となつた時黒二六に拆いて陣地を擴大せん爲めの着手である白二七に掛つた時黒普通の如く(へ)と應ずると次に白から

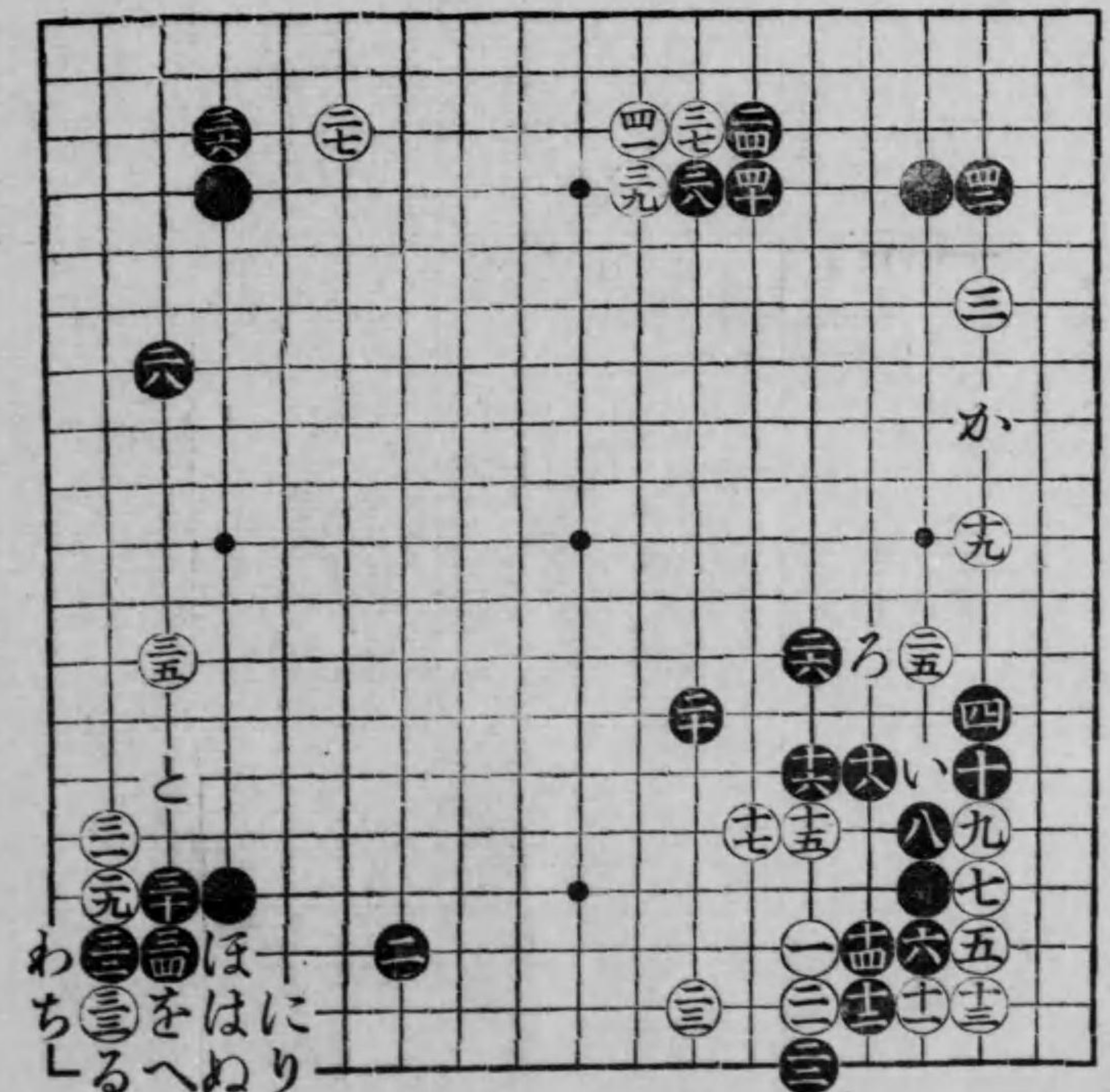


(第九局) 本局は前局に於ける白九の變化で黒十と約へ白十一に勿粘ぎ黒十四に粘いだ時白十五に飛んだのは一の味方の拾收旁々若し黒が手を抜けば白十八に覗き黒(い)と粘いだ時白(ろ)と飛んで敵の陣形を悪くしやうと云ふ魂膽である。さうされては大變であるから黒十六に頂け白十七に引いた時黒十八に引いて形を整へるがよい。

此時白十九に拓いたのは三の味方の守護旁々黒に二十に應せしめて其儘に二一に約へて一以下を治まらうと云ふ意である。

因て黒二二に劔ねて白を二三に應せしめ先手を以て二四の好點

局九第



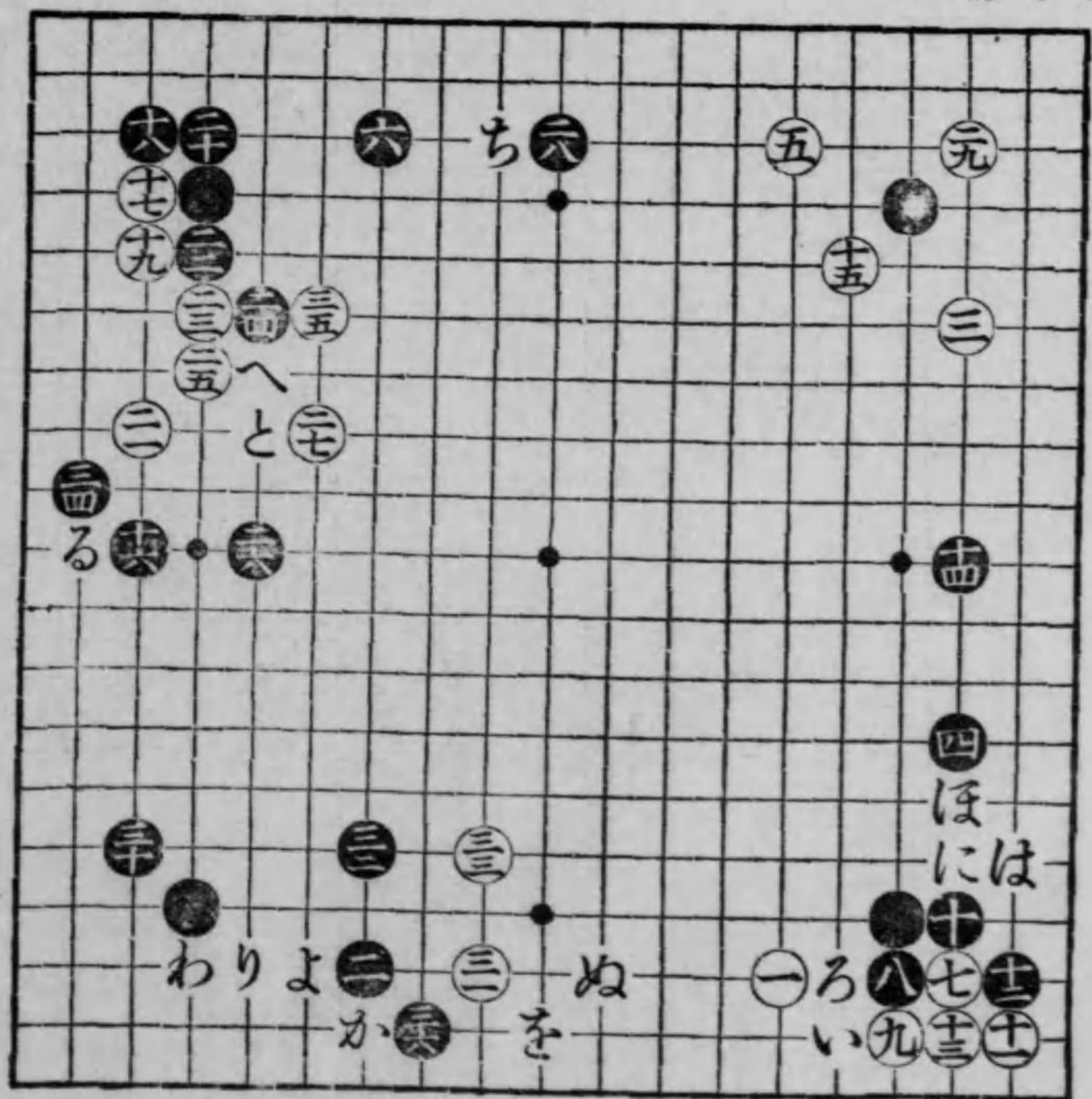
を占むべきである。白二五と打つたのは黒若し手抜することあらば二六の點に一着利かさうと云ふのであるから黒はおとなしく二六の點に應じて置くが利益である。白二九と打つた時黒三十に突當つたのは若し白が三二の點に行び込んで來ることもあらば黒三一の點に約へ込まん意で其結果は白(は)黒(に)白三四黒(は)白(へ)黒(と)となるが白は尙一手三三の點に活を計らねばならぬことになる。何故なれば白若し三三の手を等閑に附せんか。黒(ち)白三三黒(り)白(ぬ)の時黒(る)と投込んで劫争となる。と云ふて白が此場合三三杯に屈服して居ると黒に他に先鞭を着けられることになつて碁はお終ひとなる。故に白が三二に行び込む手は全然面白くない。そこで白三一と引き黒三二と約へ白三三と頂け黒三四に粘いだ時白三五と拓く外はないのである。黒三四の手を(を)と約へると白に(わ)と先手で盤られるから黒は單に三四の點に粘いで居る方が利益である。

白三七は黒の應手を試みたので黒三八に劔ね白三九に劔ね返へし黒四十に粘ぎ白四一に粘いだ時黒四二と隅を締つて(か)の打込を狙ふが一番紛れがなくて慥である。

(第十局) 白九と勿ねた時、黒(い)と約へ白十三に粘ぎ黒(ろ)と粘ぎ白(は)と飛び黒(に)と尖頂け白十に當て込んだ時黒(は)とつなぐ定石もあるが譜の如く黒十に約へ白十一に掛粘いだ時黒十一に當て込んで白を十三に粘がしめ黒十四に拆き白十五に包圍した時黒十六の大場を占むる趣向に出づるも良い。

白十七に頂けた時黒十八、二十と堅固に構へ白を二一に拓かせて二二と約へ二三に勿ねさせて二四と勿ね返し二五と行びさせ二六に單關して左下方面に大模様を張るべきである。此時白二七の手を抜くと黒(へ)白(と)

第十局

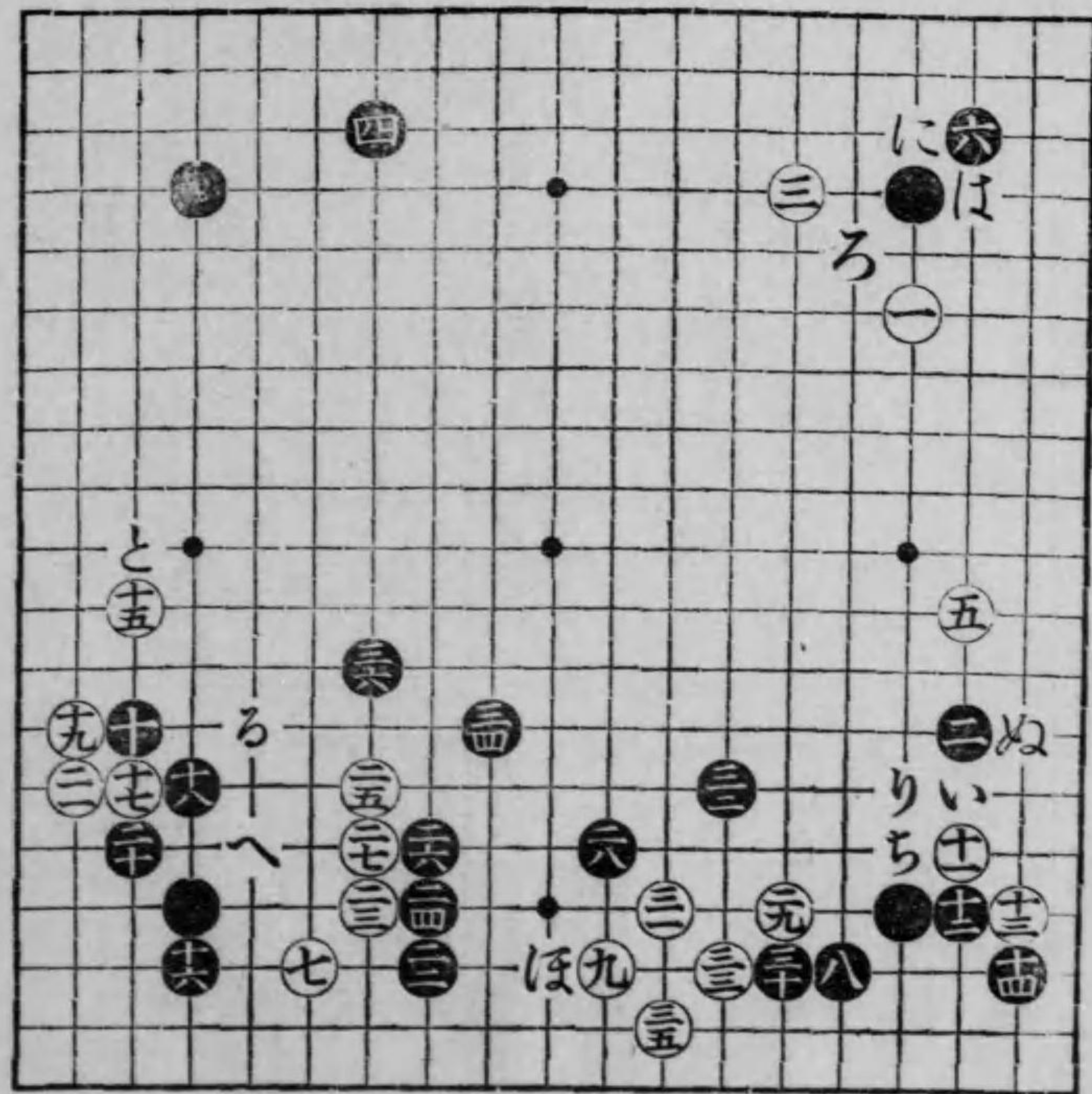


黒二七となつて封じ込まれて仕舞ふから白は二七の手を抜く譯に行かぬ。乃ち黒二八と打つたのは白の(ち)の展開を妨げたので白は二九と打つて隅を確實に占むる外はない。黒も亦三十に尖んで隅の打込を防ぎ白三一に詰め黒三二に立つて(り)の打込を防ぎ白三三に立つて(ぬ)の打込を防いだ時黒三四と尖んだのは白の(る)の頂引を防ぐと同時に十七以下の一隊を攻めつゝ上下の陣形を整へやうと云ふ豫備手段であるから白は三五と頂けて凌がなければならぬのである。

此時黒三六に尖んだのは白の(り)の打込を防ぎ且つ(を)の飛出しを狙つたので凡て擲手は攻守兩様の意味を備へて居らなければならぬと云ふことを以上の説明で了解して置くが良い。猶、黒三六の手を抜いた場合白から(り)と打込まれる結果は黒(わ)白(か)黒(よ)白三六となつて隅地を幾分削られることになる。

(第十一局) 白一と一間高掛りに打つたのは黒に三と受けさせ、白(い)と掛つて右側中邊に大模様を張らうと云ふ策。敵計盡で黒も之を悟つて二と拓いて敵の謀の裏を擽いたのである。白三に對する黒四も同意である。白五と詰めた時黒(ろ)と尖み出すと白に六と打たれ黒(は)ならば白(に)と盤り黒(に)ならば白(は)と盤つて黒の方が面白くない形になる。故斯く六に尖んだのである。白七に掛つた時黒十に受けると白に三十の點に打たれるからそれを嫌つて黒八に尖んだのであるが此手を(ほ)の點に詰めて打つこともある。

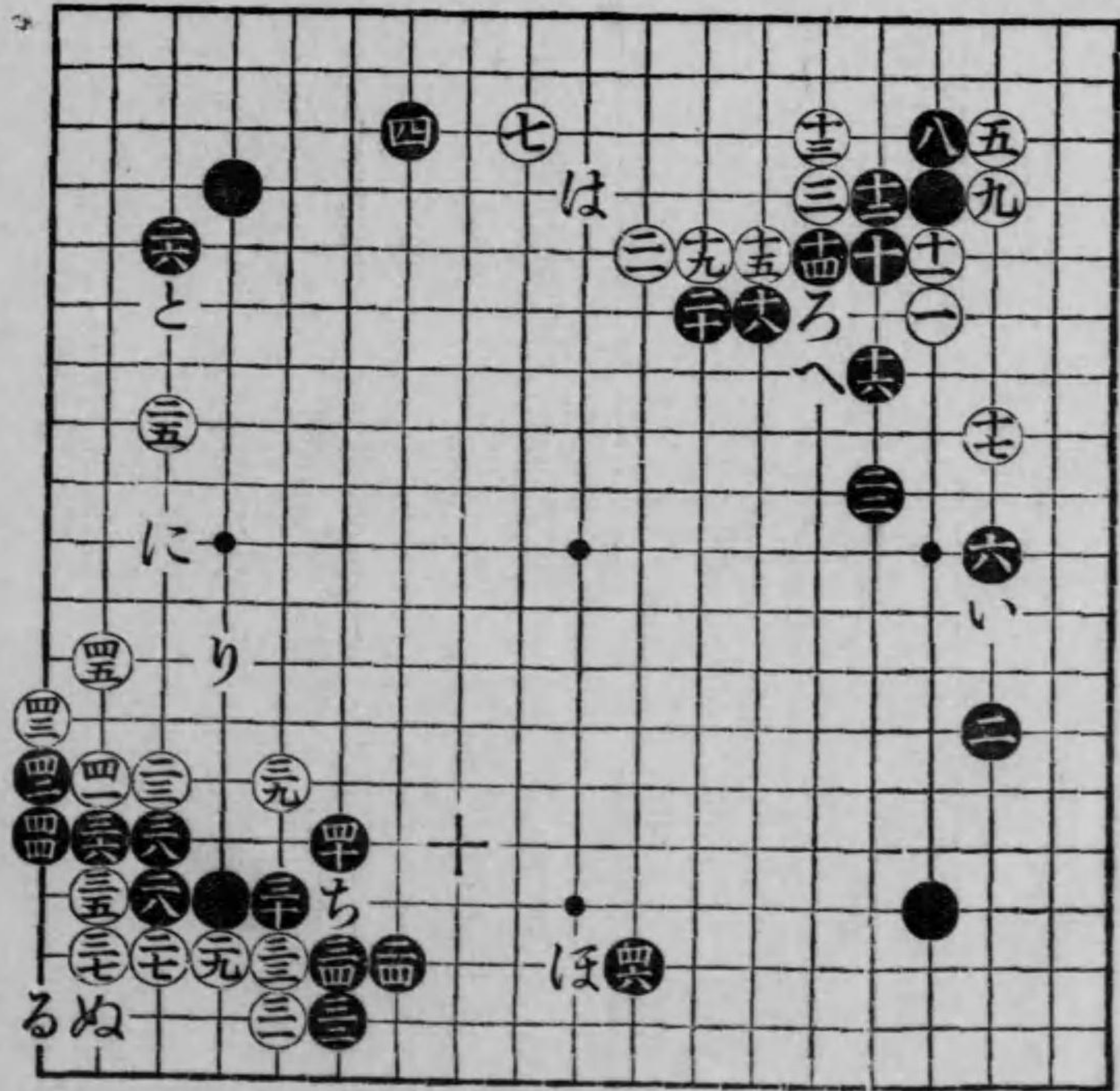
局一十第



白九の手で若しも十七の點に兩掛りに來れば黒(ほ)と詰め白へ(と)圍つた時黒(と)と詰める趣向であつたが白が九と來たから黒十に拓いたのである。
 白十一の打込に對し黒普通の如く(ち)と約へると白(い)黒(り)の時白に(ぬ)と確實に連絡されて仕舞ふから黒十二に約へ白十三の時黒十四に約へて敵を極らせない方が得策である。白十七の打込は無理である。白は此場合二三の點に尖んで黒の二二の打込を防ぐ外はないのである。
 凡てものと云ふものは交換の律に伴ふものである。白二三と尖んで黒に(る)と用心させて置けば白は絶対に安全を期することが出來たのである。然るに白十七に打込んで自分獨り利を占めやうとした爲め黒に二二以下三四と酷しく攻め立てられた揚句三六の要點を阻止せらるゝことになつて遂に白の敗北と極つて仕舞つたのである。

(第十二局) 本局は前局に於ける白五の變化で白が五と来た以上は黒は六に拓いて白の(い)の開展を妨げなければならぬ。此際白(ろ)と打つて隅の置石を確實に捕へて置きたいのは山々であるが若し然らば黒に(は)若しくは(に)(は)の大場を占めらるゝは眼に見えて居るそこで脊に腹はかへられぬから白七に詰めて黒の(は)の展開を妨げたので然る上は黒も亦八に約へ白九の時十に尖み出さねばなるまい。白十一黒十二白十三は双方當然の着手で黒十四に約へ白十五に勿ね黒十六に飛んだ時白十八の點に行ひ黒(と)とながつた時

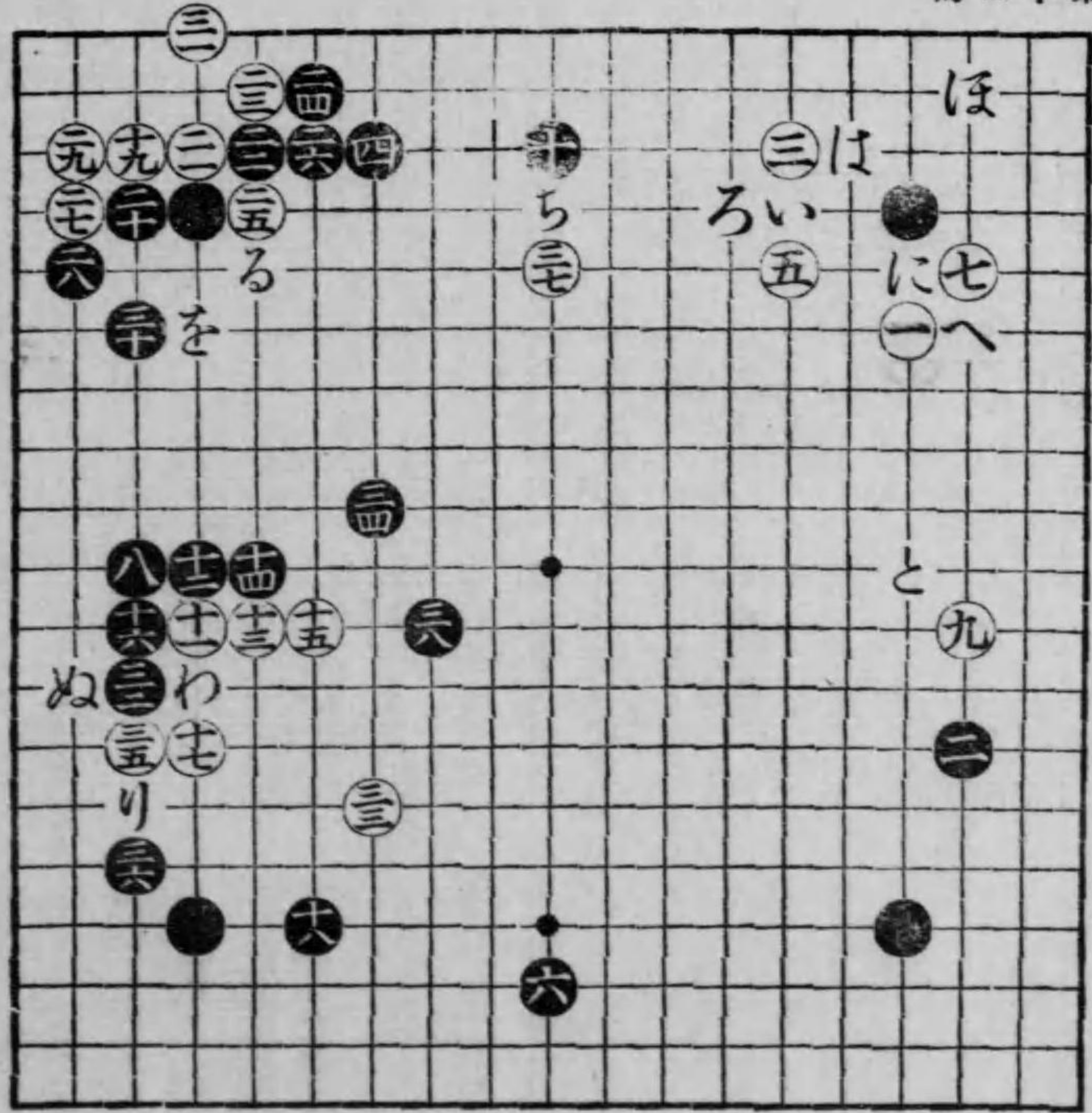
局二十第



白十七に斜走する手順に運ぶも悪くはないが譜の如く白十七以下二一に行んで左側の地盤を固むるも亦一策である。乃ち黒二二と連絡を保ちつゝ外勢を張つたのである。白二五の大々桂馬掛りに對し黒一步窄く(と)の點に詰めてゐても構はぬが二六の點に尖んで居る方が堅實である。白二七以下黒三十に行んだ時白三一に尖む定石もある。之に對し黒三二に尖頂け白三三にぐすんだ時黒(ち)と引き白(り)締つた時黒三七、三五と粘り白(ぬ)(る)と活きた時黒四六の點に拓くのが普通である。此場合は黒(ち)と引かずして三四の點に約へ白に三五の粘りを打たせる方が得策である。其次第は黒三八以下白四五となつて黒が先手で四六の大場を占むる結果となるからである。

(第十三局) 白三の兩掛りに對し黒普通の如く(い)と頂けると白(ろ)黒五白(は)黒(に)白(は)黒(へ)の時白に二六の點に掛かれて上邊中側に大模様を張られる、さうなると碁が大變打ち難くなるから白三に對し黒四と拓いたのである今度黒から(い)と頂けられると白は肝腎の所を二ヶ所も打たれることになるから白五と打つたのである、白七にと、目を刺した時黒(と)と打つて白の九の展開を妨げる手と譜の如く八の大場を占める手と二策あるが其何れを擇むも黒の任意である。黒が八の大場に着手したから白九と拓いたので黒

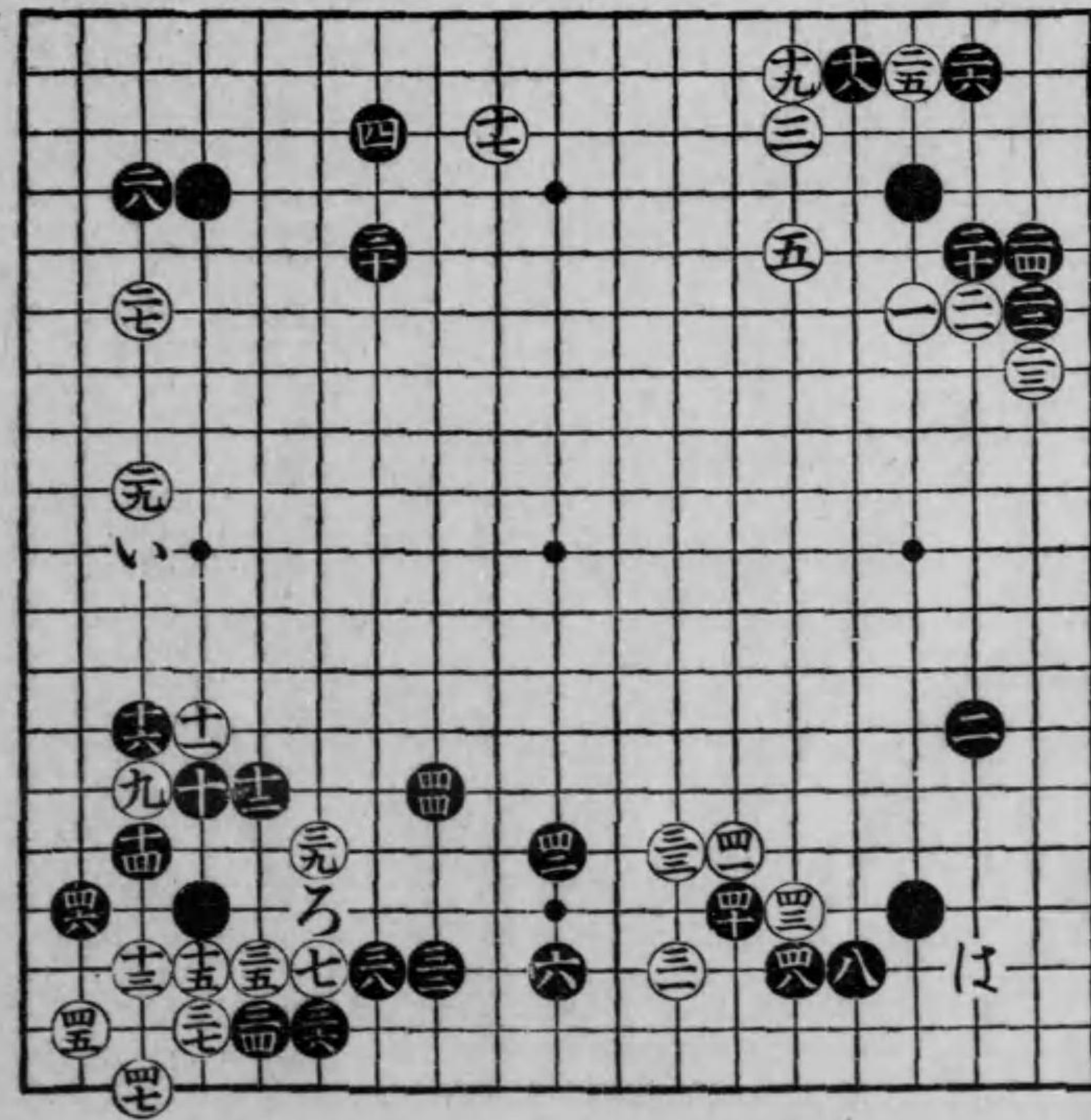
局三十第



も亦十に拓いて地盤の均衡を保つたのである。黒十の手を(ち)の點に打つても良い。白十一は黒の模様を消す爲めに打つたので無論此手で(り)杯に打込む餘地は充分にあるが餘り深入りすると酷い目に逢はされぬとも限らぬから大事を取つて十一の肩を衝いたのである。黒十二白十三黒十四は白の手に敢て説明する程のこともない。白十五に行んだ時黒(ぬ)へ斜走する手もあるが斯く十六に曲り白を十七に應せしめて十八に締るも良い。白十九に打込んだ時黒二十と約へて敵を我が窄き方へ追ひ遣るは圍棋の定則で白二十一以下三一に活を計る外はない。此時黒(る)と約へて二五の白を取切つて置くのが普通であるが此場合は右側黒十の展開があるから假令白(る)と行んでも黒(を)と並んで少しも怖いことはない。故に黒は手を抜いて三二に行びて白の根據を奪ひつゝ(わ)の出切を狙つたので白は三三に備へざるを得ない。黒三四と敵を攻めつゝ左上方に模様を張り白三五に約へた時黒三六に尖んだのは自己を守り且つ敵を攻むると云ふ兩様の意味を備へて居るのである。此時白三七に冠せたのは黒に此處に打たれて大模様を張られるが厭だから斯く打つたので黒は三六の意志を繼いで激しく三八の點に十一以下の白を攻めつゝ下邊一帶の地盤占領の計策に出づべきである

(第十四局) 黒六は(い)の點に打つも良い。黒八の手で三五と尖頂け白を(ろ)と立たせて十と打つ手段もある。白九の兩掛りに對し黒十、十二と頂行び白十三に打つた時黒十四、十六と切るは古來の定石で白十七に拓いた時黒十八以下二六の隅を活きたのは時機を得たものである。白三一に打込んだ時黒三二と打ち白を三三に立たせて三四、三六、三八と利を占め次に四十、四二と立ち白を四三と打たせて四四に包圍し白に四五、四七と活を打たしめて四八と打ちしは黒のお手柄である。猶、是の四八の點は黑白何れよ

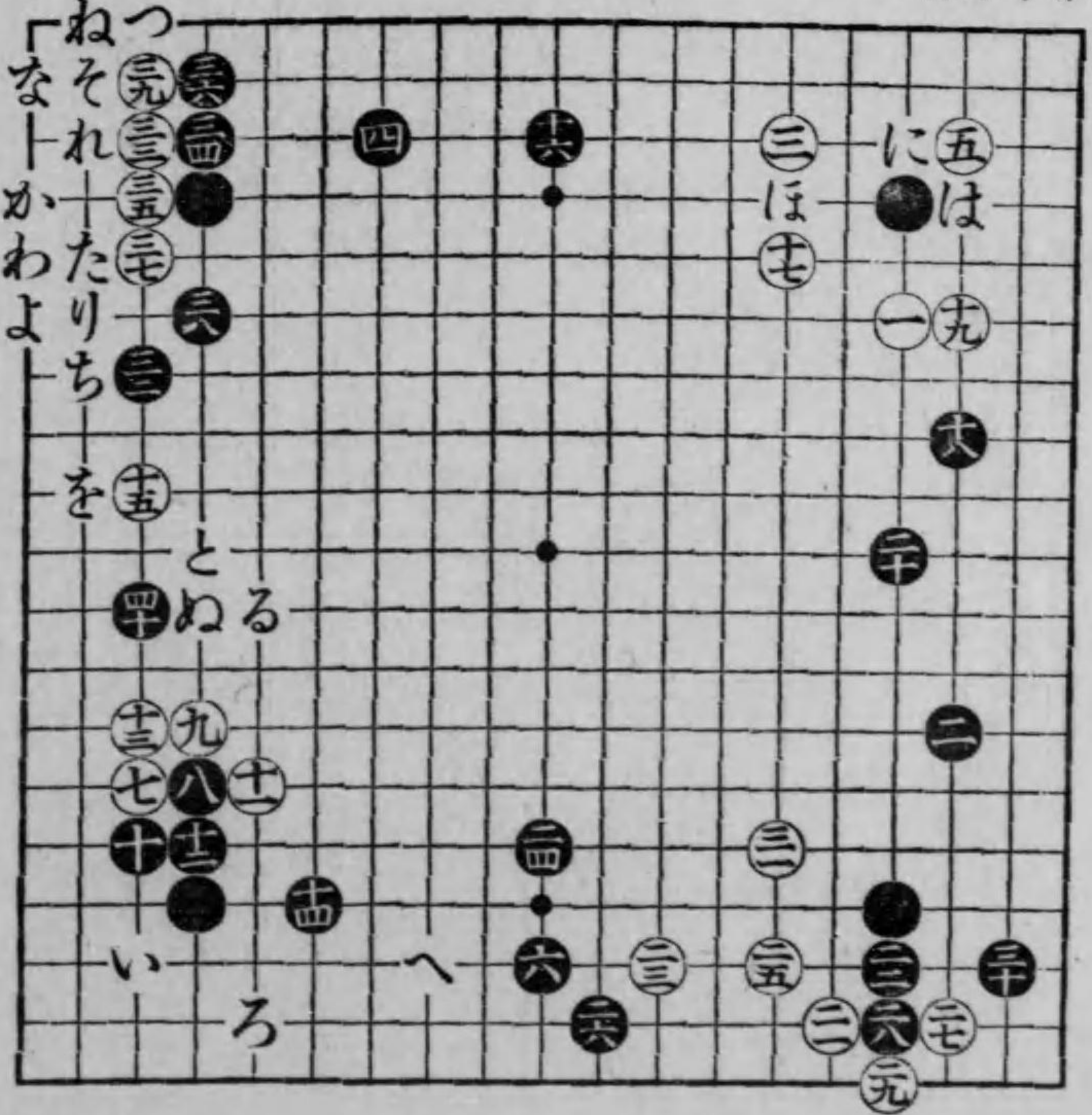
第十四局



りするも好い處で反對に白が此處を占めると三一以下の一隊が好陣形を整へるに反し自ら隅の黒が薄弱になつて(は)の點に打込の味杯を生ずる。けれども此く黒が占めるに於ては隅が非常に堅固になるに反し三一以下の白が根據のない浮石となつて生活に苦しまなければならぬことになるからである。要するに四八の點は黑白何れよりするも重要な所で先づ之に據るものは大勢を制し易いので所謂争奪戰の焦點である。

(第十五局) 白七に掛り黒八に頂け白九と勿上げた時黒普通の如く十一に行びると白(い)黒十白(ろ)黒十三となる。斯くては最初黒が六と打つた趣意即ち下邊中側に大模様を策さうと云ふ計畫が無意義になつて仕舞ふ。因て白九の時黒十に約へたので白十一以下黒十四となつて六の一子が益々働いて来る。白は十五に根據を造らねばならぬことになる。黒十六は今度白が手を抜けば(は)と約へ白(に)の時(は)と頂出さうと云ふのであるから白は十七に備へざるを得ない。黒十八も矢張(は)と約へ白(に)の時十九の點に頂け盤らうと云

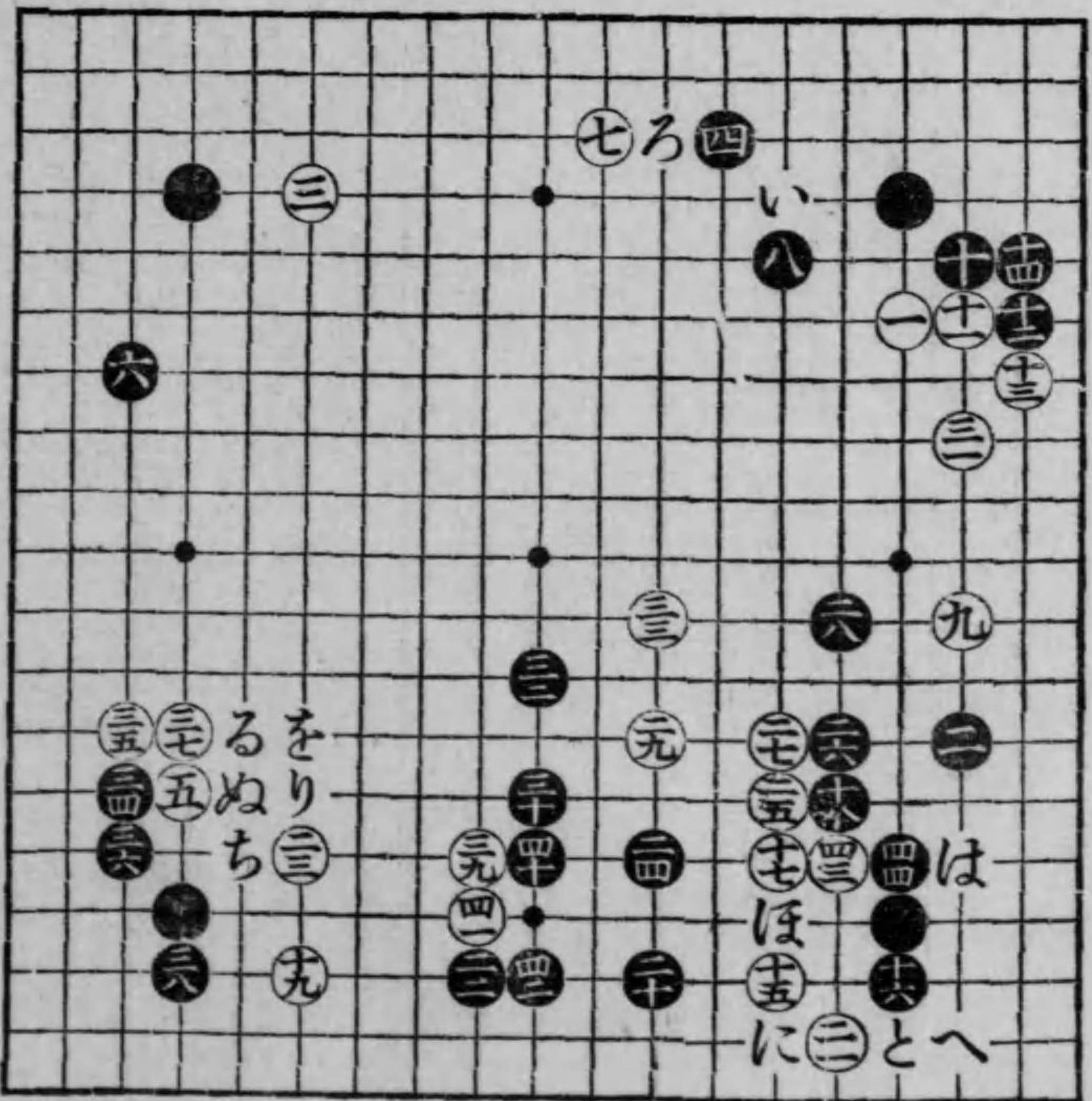
局五十第



ふ意で白十九に備へたのである。黒二十は既に十八に打つ時からの豫定の行動である。白二十一と根を下し次に二三二五と枝を張り黒二四二六と(へ)印の打込を防ぎつゝ二一以下の白を狙ひ白二七以下三一に走路を取つたは餘儀なき次第である。黒三二は三七の點に尖むが普通であるが此く三二と打つて白に三三の點に打込ましめ黒三四以下三八に尖み白に三九と活を打たせて四十の點に打込む趣向も亦悪くはないのである。此時白(と)と尖まば黒(ち)白(り)黒(ぬ)白(る)黒(を)と盤る筋がある。又黒(ち)と打つた時白(り)と打たずして(ぬ)と來れば黒(わ)白(か)黒(よ)白(た)黒(れ)白(そ)黒(つ)白(ね)黒(な)で白死となる。

(第十六局) 黒四は(い)の點に單關するのが普通であるが此場合左上隅に白が三と來て居るから黒(い)と拓くと白から(ろ)と掛かれて上邊中側に大模様を構へらるゝのみならず黒の方は兩裾開で面白くない形になるそこで黒(四)と打つたのである白七に詰めた時黒八と兩柱馬に打つは定石で白九の時黒十以下二十四と刎粘いだのは隅を固め且つ三一の覗を狙つたのである。

局六十第



合白二四などに打つと黒(に)白二一黒(は)となつて連絡されて仕舞ふ。

因て白二一に尖んで(へ)の飛込を狙ひつゝ、逆りを止めたのである。

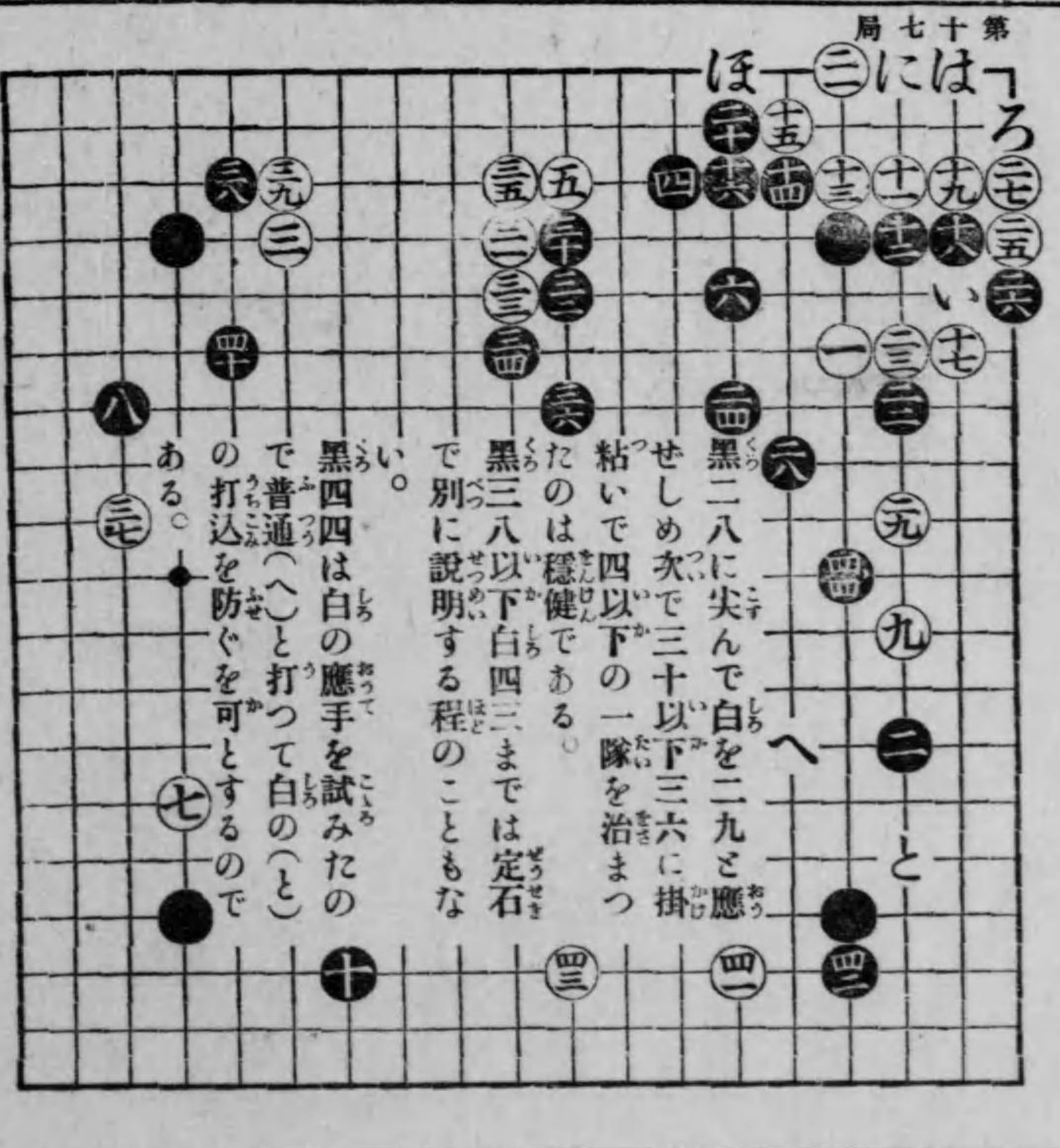
此時黒(と)坏に約へると白から四二の點に詰められて折角打込んだ二十の一子が動けなくなる。因て黒二二と拓いて根據を据えたので白は二三に打たざるを得ないことになる。黒二四以下二八に飛出し白に三一に用心させて三二に立ち白に三三に應せしめて三四、三六、三八と活きたのは時宜の手段と謂ふべきである。

黒三八は先づ隅を固めて置いて機を見て(ち)と尖頂け白(と)と行ひ黒(ぬ)と突出し白(る)と約へた時黒(を)と切つて敵を左右にへだて、攻める意であるから白は好まぬ手であるが三九、四一と打つて之に備へねばならぬことになる。

白四三は黒の(は)の切斷を防いだので本局も亦黒の優勢なることは固より言ふを俟たぬのである。

(第十七局) 本局は第十六局に於ける黒十の變化で、斯く黒が左下隅に着手したから白十一に打込んだのである。黒十二以下十六となつた時、白十八に、勿粘ぐのが普通であるが、然る時は黒(い)と約へ二三に掛ぐ結果、右邊中間の白地を傷められることになる。因て白十七に打ち、黒十八に下つた時十九に約へて、兩全を計るを得策とするのである。

黒二二に覗いて次に二四の點に單關したのは所謂手順である。此時白二五の手を抜くと、黒二七(ろ)黒(は)白二五黒二六(い)白(ろ)黒(は)白二五となつて、劫争となる。故に白二五に勿粘いで確實に活を計らねばならぬのである。

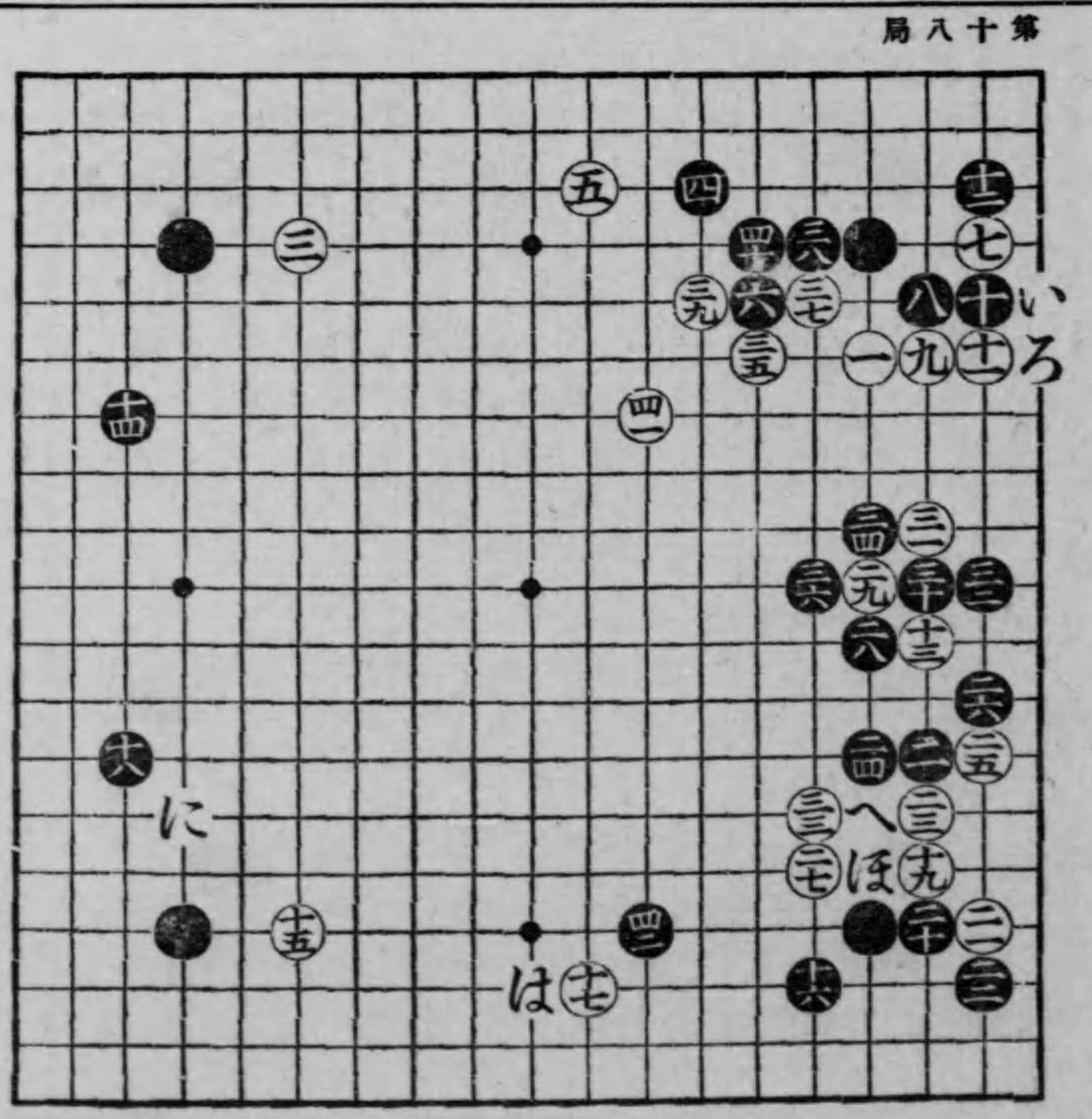


(第十八局) 白七は黒に八と打たせて九、十一と約へ、次に十三の點に拓いて右側中間に根據を構へやうと云ふ意である。

黒十二の手で(い)又は(ろ)と打つとあとで白から七の一子を利用されて色々の手段を弄せらるゝ虞があるから、此く打つて絶對に隅の安全を計つたのである。

黒十六は少し緩い嫌ひはあるが、此く打つても決して悪いと云ふことはない。白は此場合十七に打つて黒の(は)の展開を妨げなければならぬ。乃ち黒十八に打つて左下隅の置石を擁護したので、此手を(に)と一間に締つても良い。

白十九の打込は此場合では無理である。



黒二十の手を(は)と約(おさ)へると白二三黒(へ)白二五と確實に連絡されて仕舞つて面白くないから多くは此く二十の點に約(おさ)へるを可とするのである。

白二一以下二七に飛出した時黒二八以下三二と行んで(は)の出切を狙ひ白三三につないだ時黒三四、三六と取り白三五以下四一と連絡を計つた時黒四二と十七の白に迫りつゝ十九以下の一隊を攻撃するの趣向時機宜しきを得たものである。

(第十九局) 黒四は一步廣く四の點に拓くのが普通であるが斯く打つたは黒の趣向である。

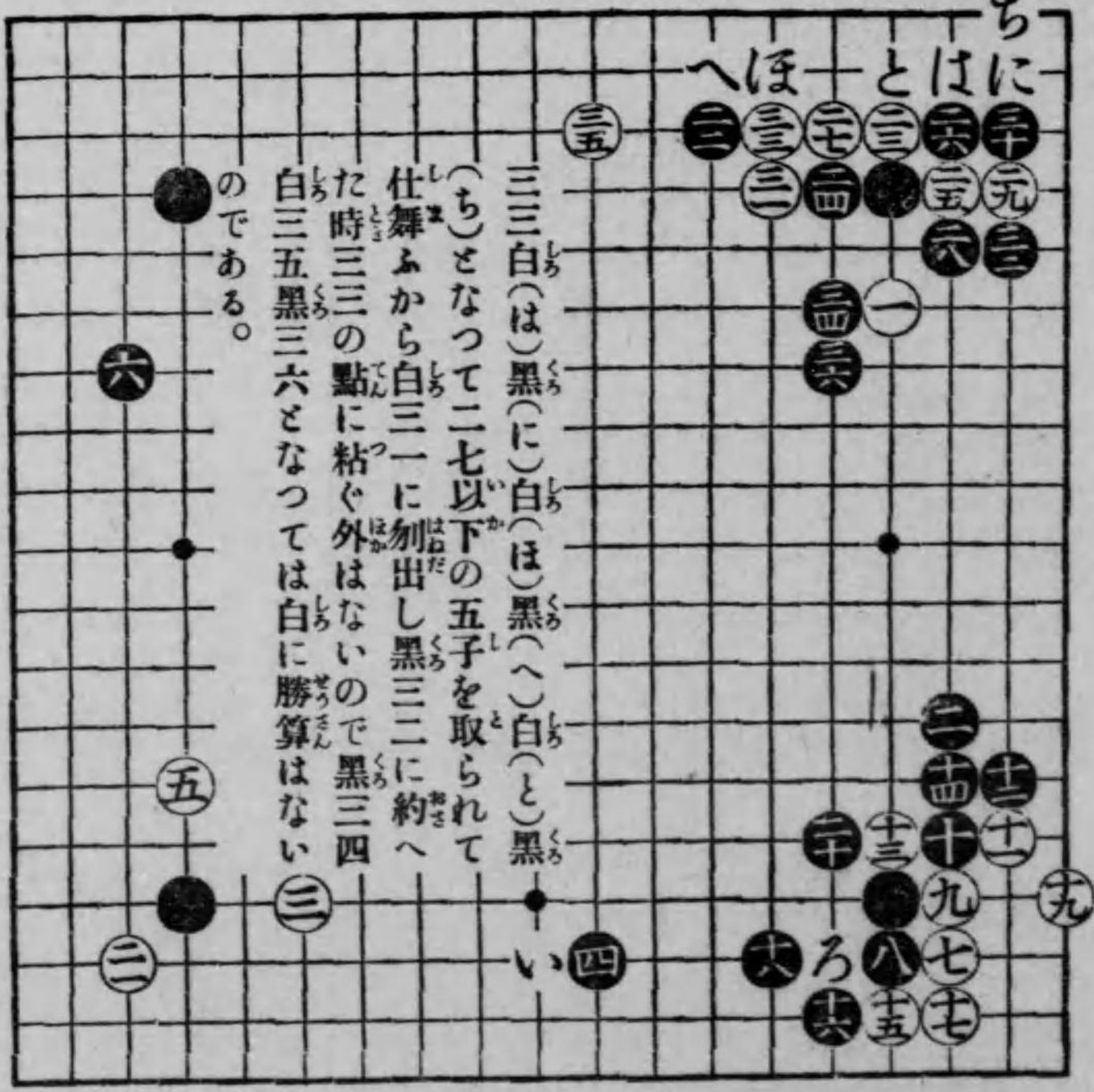
白七は早く打たぬと黒にろと締られて隅に打込がなくなるからで黒八以下二十となるのが普通である。

斯くては黒は後手になつて面白くないやうに思はれるが其代り外勢が非常に厚状になるから黒としては充分な形である。

白二三は可成局面を紛亂せしめてあわよくば黒の缺陷に付け込んで奇功を奏せんと恐ろしい魂膽であるが黒に二四と行びられ白二五に勿ねた時黒に二六と切られて白の謀は茲に全く破壊されて仕舞つた。

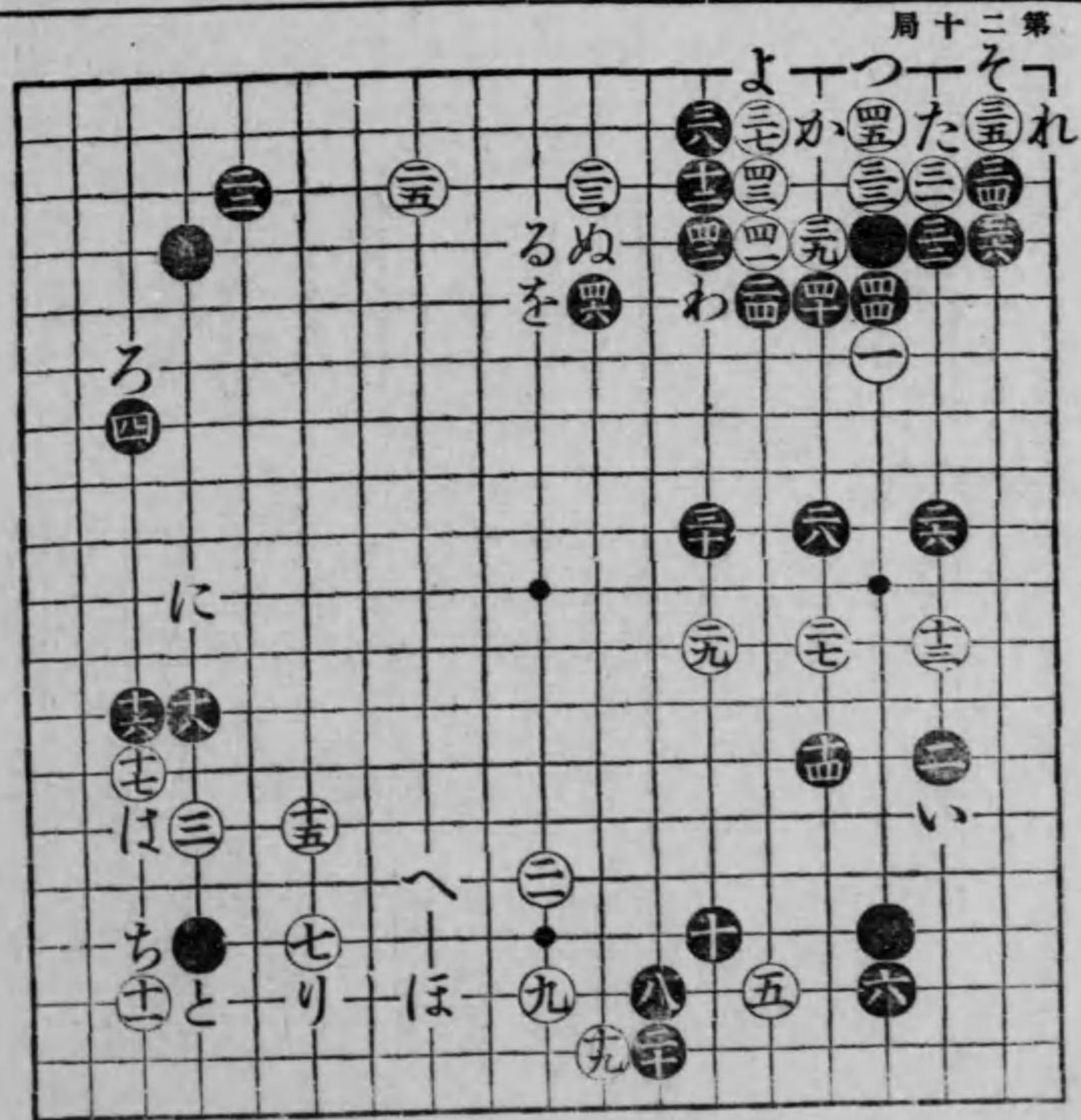
白三一の手で三二と行びると黒

第十九局



三三白(は)黒(に)白(は)黒(へ)白(と)黒(ち)となつて二七以下の五子を取られて仕舞ふから白三一に勿出し黒三二に約へた時三三の點に粘ぐ外はないので黒三四白三五黒三六となつては白に勝算はないのである。

(第二十局) 黒二四は毎度云ふ通り白の趣向を妨げたのでこれを普通の如く黒二を四一に應ずると白から(い)と掛られ又黒四を七に受けると白から(ろ)と来られるから斯く打つたので矢張黒の趣向に出たのである。
 右下隅六の意志を繼いで黒八と夾み白九と詰めた時黒十に尖んで五の一子を捕へたのは堅實である。
 白十一より黒十六までは別に説明する程のこともない。
 白十七の手を(は)と並ばし黒は(に)と縮むが良い。
 白二十一は黒に(は)と打込まれ白(へ)黒(と)白(ち)の時黒に(り)

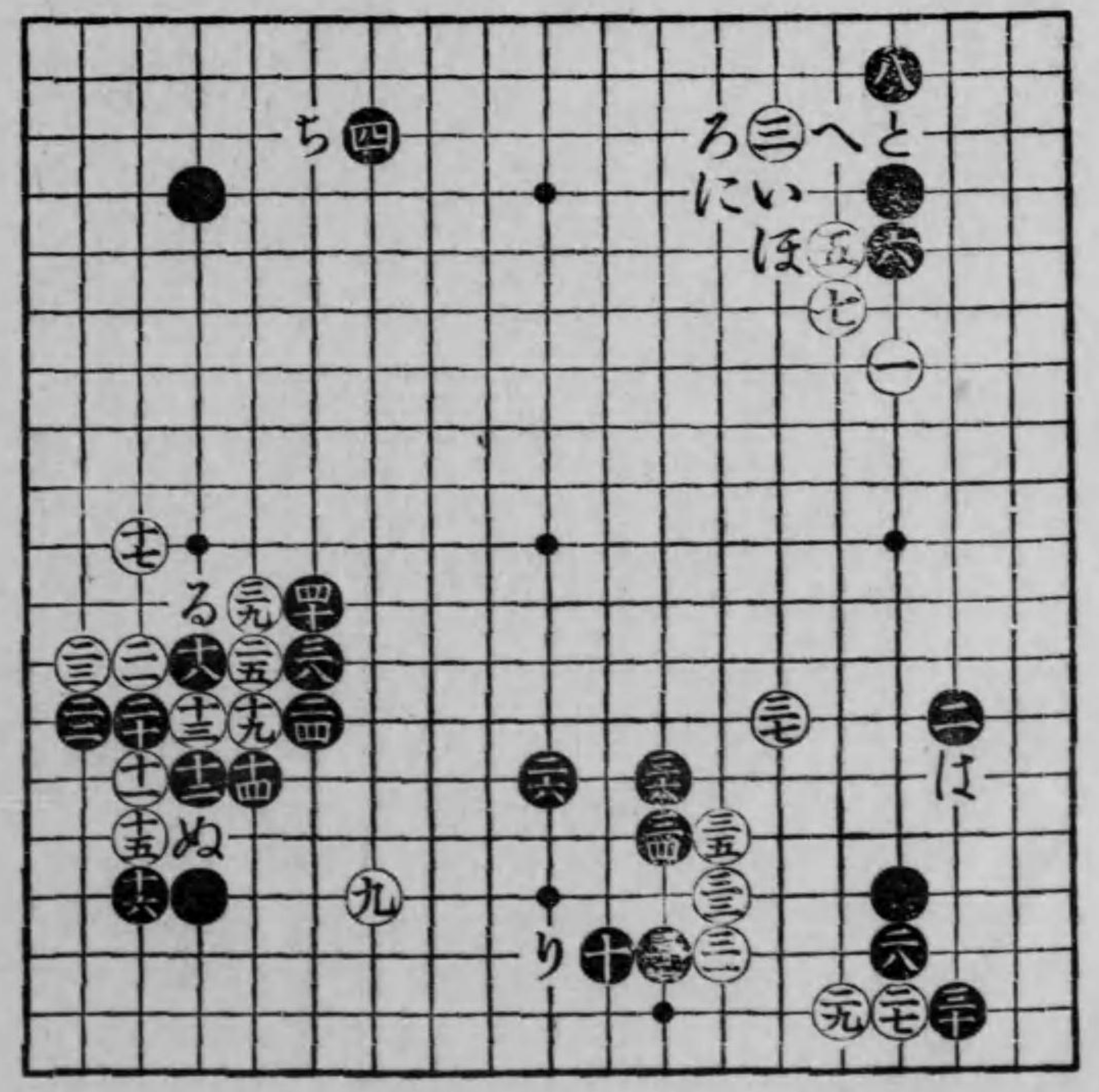


と頂けられる筋があるから斯く打つて用心したので黒二二は此場合に於ける最好点である。
 黒二六は打込の急所で二八、三十と敵を追撃しつゝ一の白を危地に陥れたのは黒のお手柄である。白は此場合三一に打込み黒三二以下四四の粘となり白四五に活を計る外はないのである。此時黒(ぬ)と頂け白(る)と刎ねた時黒(を)と二段に刎ねて打つ手段もあるが譜の如く四六に斜走して(わ)の切斷を補ひつゝ二五三三の白を狙ふも良い。
 猶、白四五の手を抜くと黒(か)白(よ)黒四五白(た)黒(れ)白(そ)黒(つ)で白死となる。

(第二十一局) 白一の二間高掛りに對し黒(い)又は(ろ)に應ずるのが普通であるがさうすると白から(は)の點に掛かれる。又白三と来た時黒(い)と頂け白(に)と刎ね黒(は)と行び白(へ)と行んで時黒(と)と約へるのが次に白から(ち)と來られる順序になる。さうなると所謂戦線が擴大して來て碁が大變打ち難くなる。

因て黒は敵の趣向を挫くべく二と拓き四と詰めたので次に白五と來ても黒六、八と活きることが出来る。斯くては白は單に外勢を張つたと云ふのみで實利は更に獲られないのである。

局一十二第



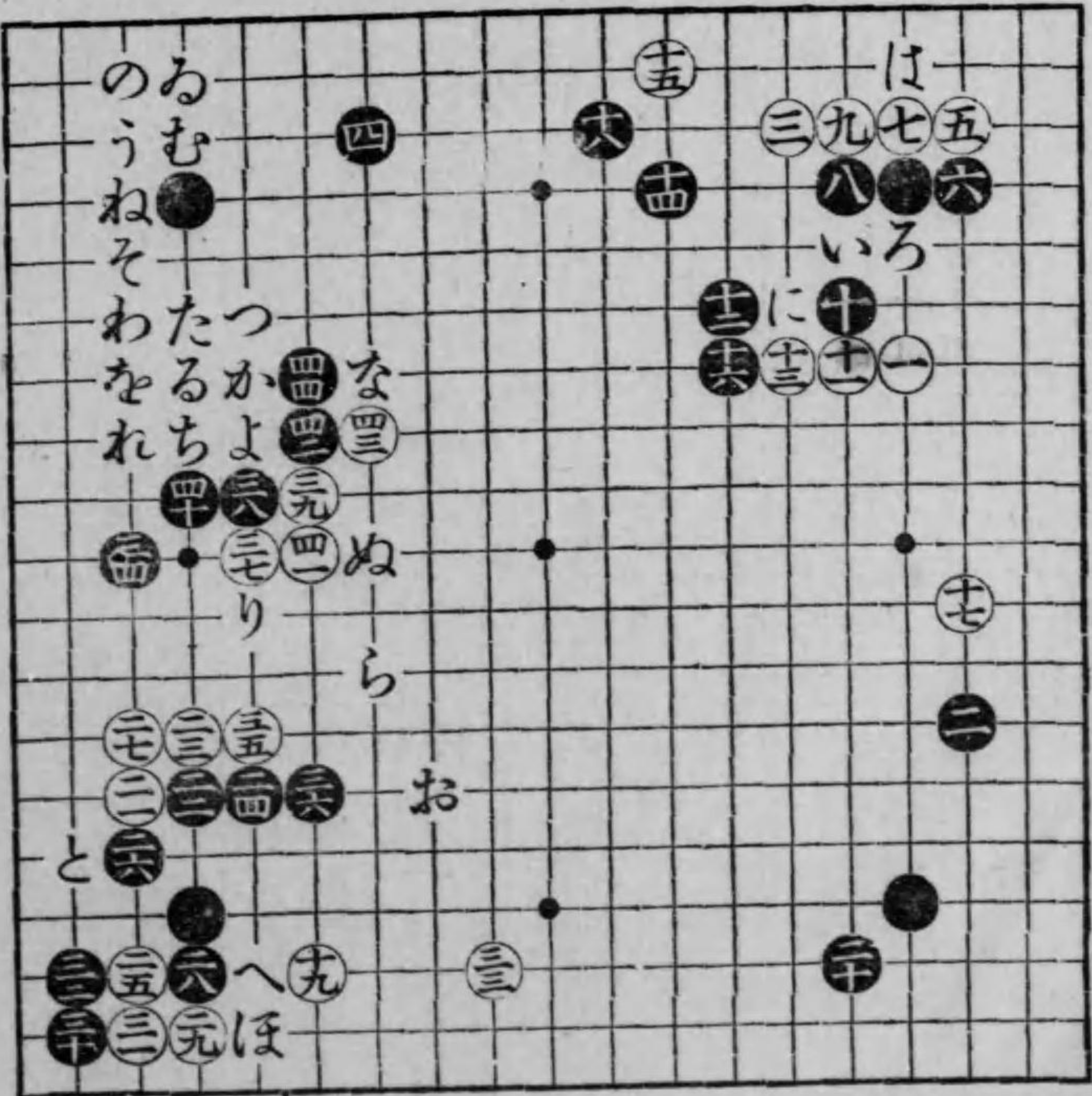
黒十の手を一步窄く(り)の點に詰めてゐても良い。白十一の兩掛りに對し黒手を抜いて他を打つも差支はないが此く十二以下十六に約へて敵を左右にへだて戦ふも亦一策である。

白十七の手を抜くと黒から(る)と打たれ白十九の時黒から二四に刎掛けられて愚形にされて仕舞ふから之は可成抜かぬ方がよい。

黒十八以下二二と下つて(ぬ)の出切を防ぎ白二三に約へた時黒二四に刎ね白二五に曲つた時黒二六に大斜走して白九を包圍しつゝ右方面に大模様を張り白二七に打込んだ時黒二八以下三六と打つて白を三七に走らしめ次で三八四十と約へて遂に白九を重圍の裡に陥れたのは却々悔り難い手腕であると賞するに値ひるのである。

(第二十二局) 黒四と拆いた時
 白(い)と打つと黒(ろ)と押し白
 十へ行んだ時黒に(は)と活きら
 れて少しも儲からぬから白は敵
 の根拠を奪ふべく五と打込んだ
 のである。之に對し黒六以下十
 二と打ち白十三に行んだ時黒十
 四と打つて(に)の出切を防ぎ白
 十五に走つた時黒十六に約へ白
 十七に拓いた時黒十八に尖んで
 左側に大模様を策するの趣向場
 合宜しきを得たものである。
 白十九に掛つた時黒二十と隅を
 締つたのは少し緩い嫌ひはある
 が確かな手である。
 黒二六に約へた時白二八に連絡
 し黒二七に切つた時自他に先鞭

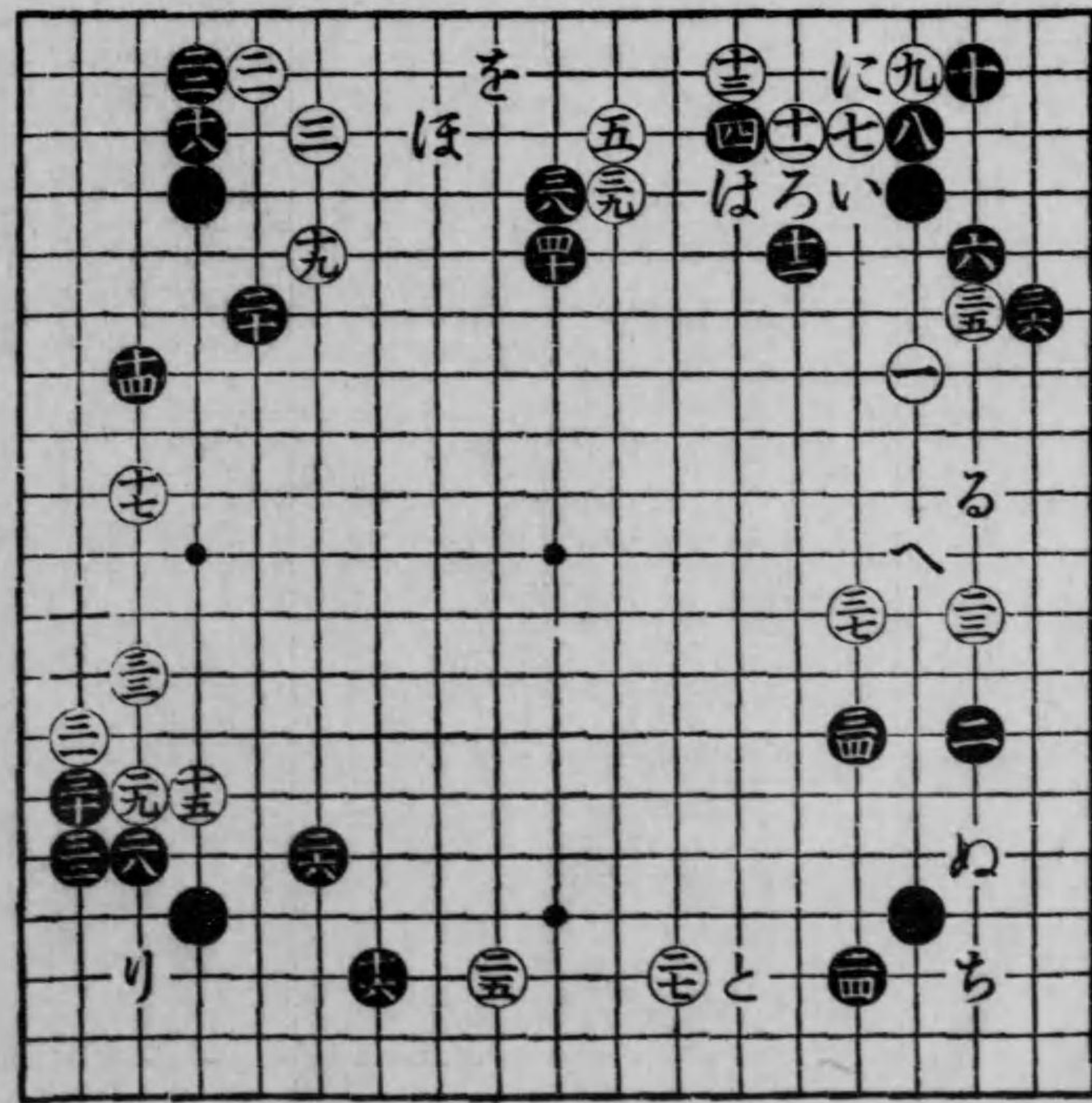
局二十二第



を着くる手順に運ぶのが普通であるが此く二七に粘いで打つこともある。然る時は今度白に二八に
 盤られては大變であるから黒は二八に約へねばならぬ。
 白二九と劬ねた時黒(は)と約へると白三一に粘ぎ黒(へ)と粘いだ時白に(と)と盤られて黒の方が悪
 い。因て黒三十に覗き白三一に粘いだ時黒三二に盤り白三三へ拓いた時黒三四と打つて敵の根拠を
 奪ふべきで白は三五三七と走路を取らなければならぬことになる。
 黒三八の手で(ち)の點に受けてゐても悪くはないが此場合は酷しく三八の點に頂け以下四二、四四
 と行んで早く治まつて置くが良い。
 白四一の手で四二の點に行びると黒四一白(り)黒(ぬ)白(る)黒(を)白(む)黒(か)白(よ)黒(た)白(ち)
 黒(れ)白(そ)黒(つ)白(ね)黒(な)白(ら)黒(む)白(う)黒(あ)白(の)黒(お)となつて白の不利に歸
 するから黒四十の時白は四一の點に粘ぐ外はないので本局も亦黒の優勢なることは固より疑を容れ
 ないのである。

(第二十三局) 白五と詰めた時
 黒(六)に尖み白七に打込んだ時
 黒八に約へるは古來の定石であ
 る。是の八の手で(い)杯に約へ
 るものあるは往々見受ける處で
 あるがこれは甚だ宜しくない。
 何故なれば此時白十一に行ひ黒
 (九)と約へ白十三に劔ね黒(は)
 と粘ぎ白(に)と掛粘いだ時黒は
 尙十に一手を費さなければなら
 ぬ。斯くては黒後手になり今度
 白から左上隅方面に先鞭を着け
 られる手順になつて面白くない
 からである。
 故に白七の打込に對し黒八以下
 十二に斜走し白十三に盤つた時
 黒先手を以て左上隅十四の點に

局三十二第

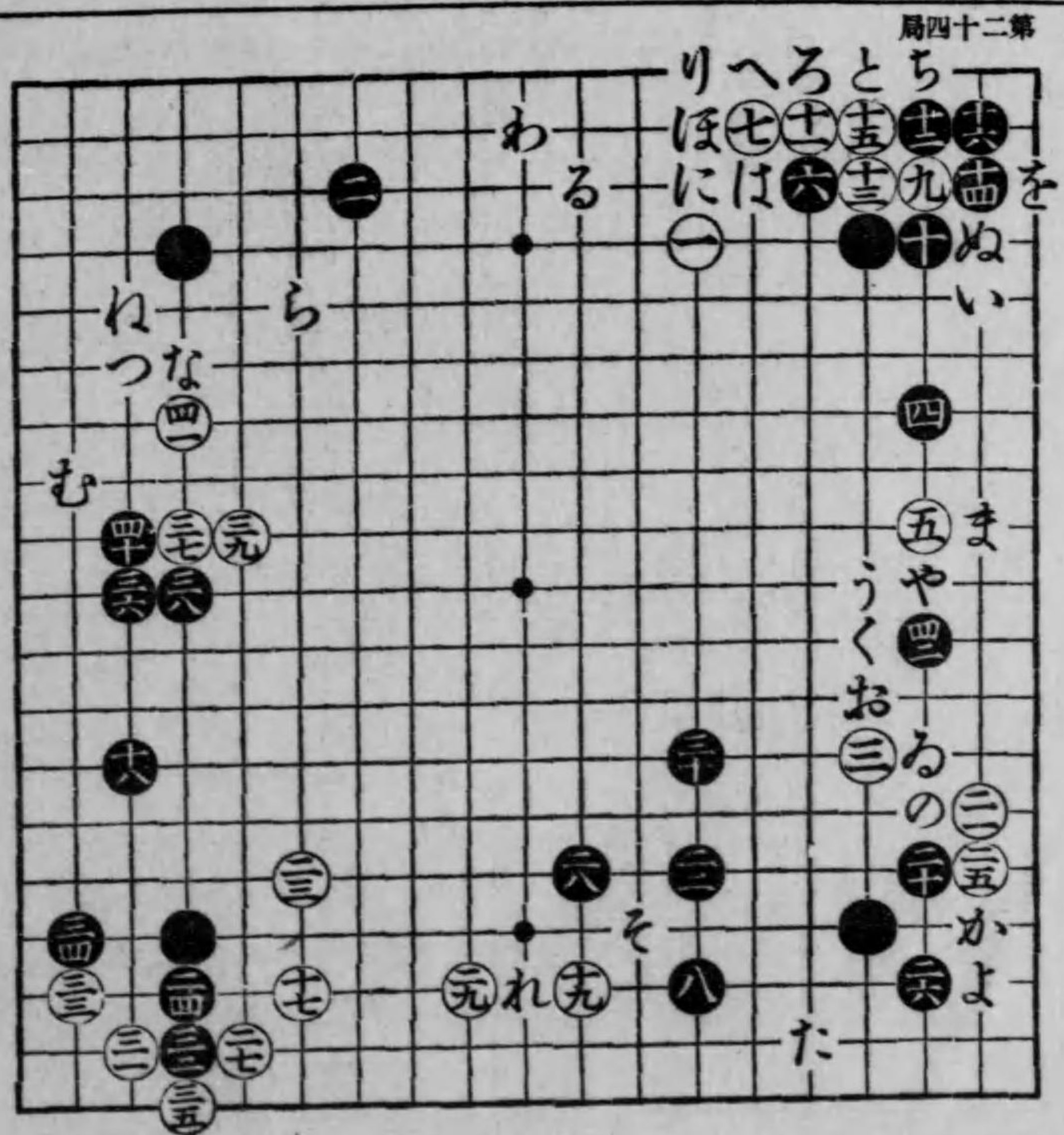


締るを得策とするのである。黒二一は(は)の打込を防いだので黒は此場合手を抜いて(へ)の點に白
 一を夾撃する手段に出づるも悪くはないが四子の置碁としては二二に締つて置く方が儲である。
 然る上は白も亦二三に詰めて(へ)の夾撃に備へざるを得ない。乃ち黒二四に尖んで隅を固めたので
 あるが兎角初心者はこの二四の所位では辛棒が出来ないで廣く(と)の邊に慾張るものあるを往々見
 受くるが之は所謂トンボ形で肝腎の大黒柱が抜けて居るから何の効もない。忽ち白から(ち)と打込
 まれて中で生きられて仕舞つて一も二も取らぬことになる。故に黒は先づ二四と一柱を建て、隅の
 打込に備へるを急務とするのである。
 今度黒に二七の邊に拓かれて廣潤な陣地を占められては大變であるから白二五と打つて黒に二六に
 應せしめて二七に拓かざるを得ないことになる。
 先手は依然黒の手中にある。そこで黒二八以下三十に劔粘いで(り)の打込を防ぎ白三三に掛粘いだ
 時黒三四に立つて(ぬ)の打込を防ぎつゝ(る)の點に侵襲を狙ひ白三五三七と防備を施した時黒三八
 と敵の模様を消すの趣向に出づるを時宜とするので白三九黒四十の時白(を)と連絡を計る外はない
 のである。

(第二十四局) 白七の時黒十一に應じて居ると白から右下隅方面に着手せられて一手後れて仕舞ふことになる。此處は寧ろ手を抜いて八の點に締るを得策とするのである。

白九に打込んだ時黒十一に約へると白に(い)と飛ばれて隅で活さられる。さうなると四以下の黒が眼無石になつて仕舞ふから黒は十以下十六と打つて隅を護る方が儲である。

此手順中注意すべきは白十一の手で此手を浮つかり十五杯に尖むと黒十一(ろ)黒(は)白(に)黒(は)白(へ)黒十四白十六黒十三白十二黒(と)白(ち)黒(り)白



(ぬ)黒(と)(三)子を取る(白)る(黒)い(白)を(黒)わ(と)打つ筋がある。故に白は必ず十一に盤ることを忘れてはいけぬ。

白十七より黒二四までは普通の着手で別に説明する程のこともない。

白二五の時黒(か)と約へるとあとに(よ)又は(た)に打込まれる杯の厭な味が残るから此く二六に外したので之は機を見て(か)に約へやうと云ふ意を含んで居るのである。

黒二八は敵の厚みを削りつゝ(れ)の頂けを狙つたので白二九は(れ)の頂を防ぎつゝ(そ)の眼を窺つたので黒三十は(そ)の眼を防ぎつゝ四二の打込を狙つたのである。

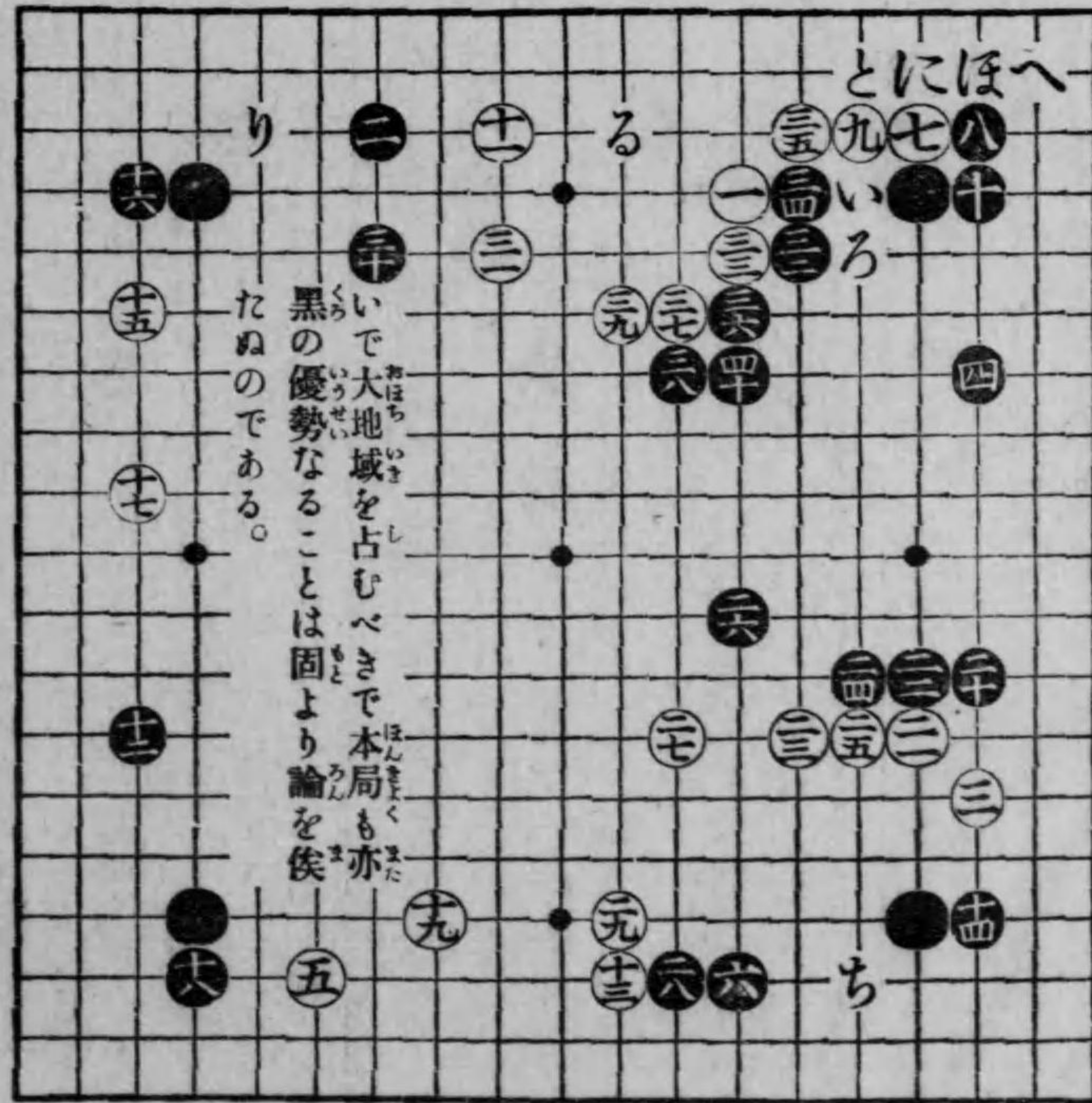
黒三二は三三の點に備へる方が利益である。

白三七の手で(つ)の點に打込む手段もないことはないが然らば黒(ね)と尖頂け白(な)と立つた時黒(ら)と煽つて白が攻められることになるから此く打つたものである。

白三九の時黒(む)と斜走に打つのが普通であるが此場合は黒四十に曲り白を四一に應せしめて四二の急所に打込むが良い。兎に角黒から此處に打込まれる結果は白の潰敗は到底免れない。假りに白(う)と尖むも黒(む)白(の)黒(お)と出で白(う)と尖ますして(く)と頂くるも黒(や)白(う)黒(ま)と連絡する筋がある。

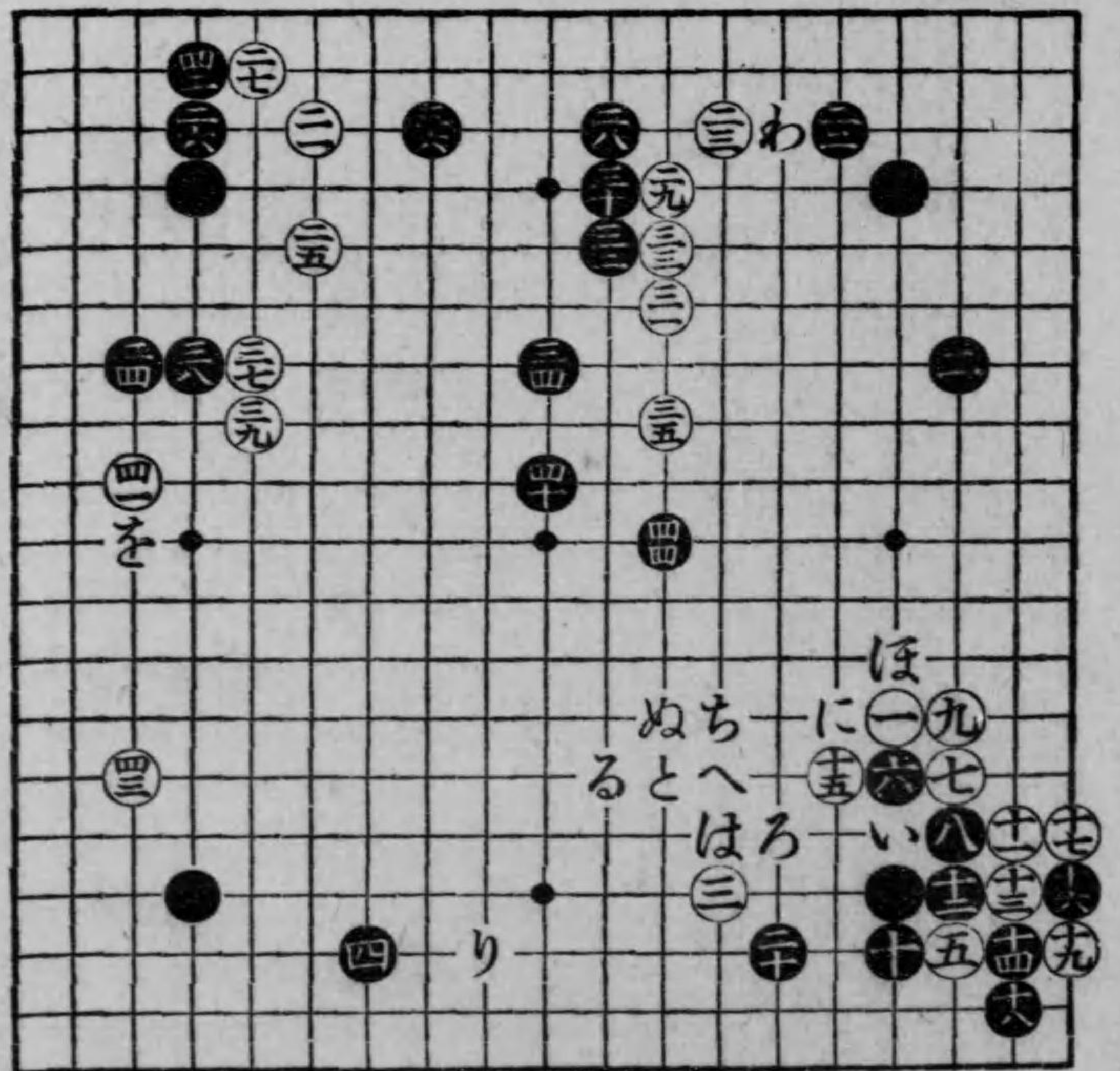
(第二十五局) 白七に頂けた時
 黒九と約へ白(い)と切り黒(ろ)
 と勿ね白三四と粘り黒八と約へ
 白(に)と行び黒十と粘り白(ほ)
 と曲り黒(へ)と約へ白(と)と曲
 つた時黒他に先鞭を着くる手順
 に運んでも良いが譜の如く八十
 と粘りで居ても悪くはない。
 黒二十は十四の意志を繼いだの
 で白は二一に尖み出さなければ
 ならないことになる。
 乃ち黒二二と押し白二三の時黒
 二四と覗き白二五と粘りだ時黒
 二六に斜走し白二七に飛出した
 時黒右下隅二八に突當つて(ち)
 の打込を防ぎ白二九に立つた時
 黒三十に單關して(り)の打込を
 防ぎ白三一に立つて(る)の打込
 を防いだ時黒三二以下四十と粘

局五十二第



(第二十六局) 白一、三の兩着
 は隅の置石に對して何れも二線
 を停て居るから黒に何等の痛
 痒も與へない。因て黒二四と他
 隅を打つて白の趣向を挫いた時
 で白五と來ても黒六以下二十と
 打つて仔細はない。
 黒六の手で十に約へ白十二に盤
 り黒(い)と行び白八に盤つた時
 黒(ろ)と打ち白(は)と押し黒(に)
 と頂け白(ほ)と行び黒(へ)と勿
 ね白(と)と勿返し黒(ち)と行び
 白(り)と拆いた時黒(ぬ)と押し
 白(る)と行んだ時黒左側(を)の
 點に大場を占むる手順に運んで
 も此場合では悪くない。
 黒二十は打たなくとも取られる

局六十二第

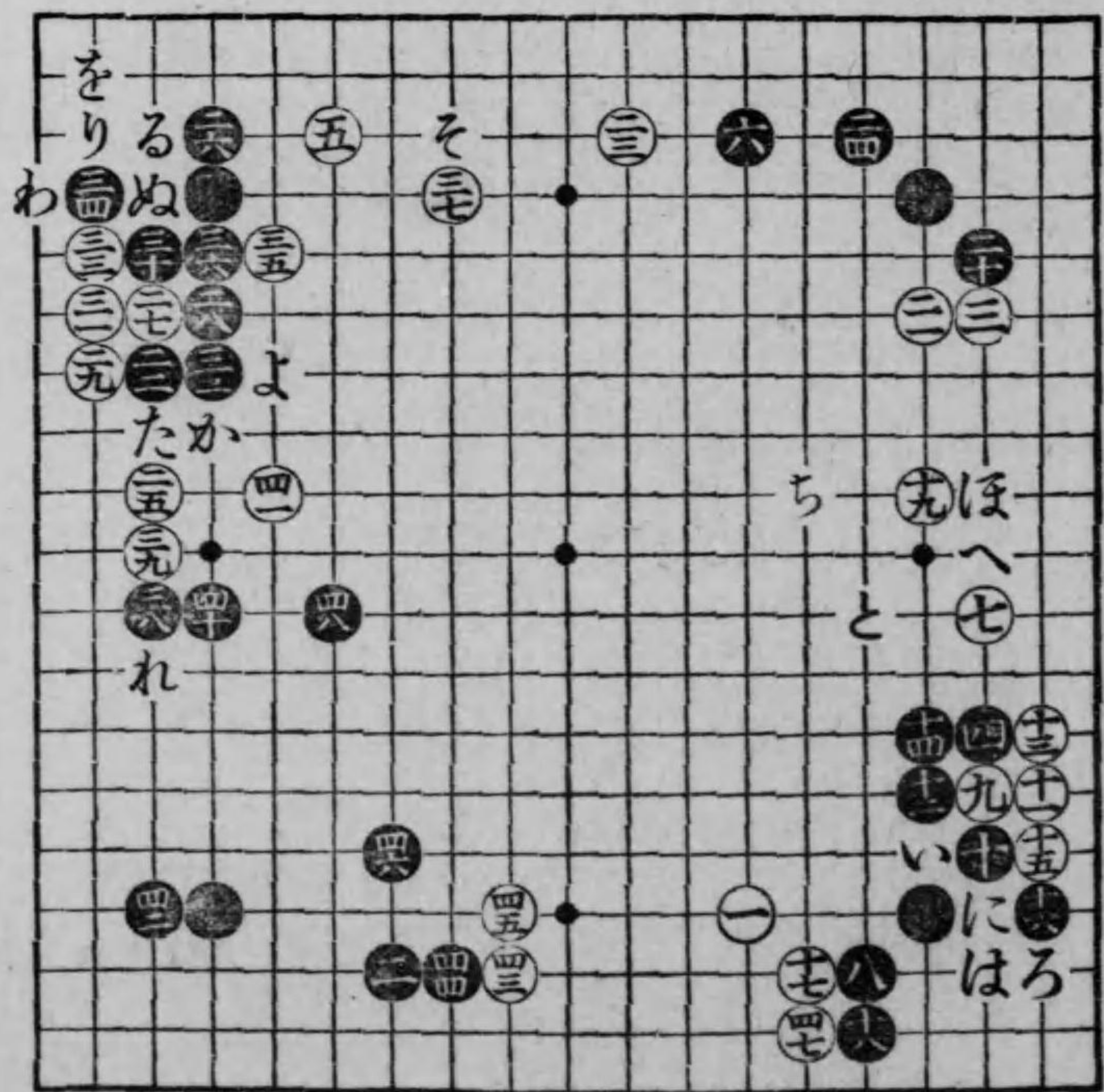


氣遣ひはないが此處は損益上から云つても却々大きい所であるから斯く打つて確に治つて置くが良
 い。
 白二一に掛つた時黒普通の如く二四に締ると白に(わ)と掛かれて面白くないから二二と尖んだの
 である。
 白二三は恰も敵の砲台直下に砦を築いたやうなもので無理も亦甚だしい。爲めに黒に二八以下三六
 と打たれて左右を搦み攻めらるゝの不利に陥つたのである。
 白四三も亦無理である。黒から四四の要點を阻止せらるゝことになつては白に勝目はない。

(第二十七局) 白九に打込んだ
 時黒十に夾む手段記憶すべきで
 此手を十二杯に約へると白十黒
 (い) 白十三黒十四白十五黒(ろ)
 となつて面白くない。

白十七に尖頂けた時白十八の手
 を抜くと白に(は)と打たれ黒に
 と粘いだ時白に十八に盤られて
 黒は忽ち眼無石となつて仕舞ふ
 又白十九の手を抜くと黒(は)白
 (へ)黒十九白(と)の時黒に(ち)
 と飛出されて左右を搦み攻めに
 逢はされることになるから白は
 一着十九の點に防備を施さざる
 を得ないのである。然る上は黒
 は最早此處に打込はないから二
 十の點に尖頂けて隅を固め次で

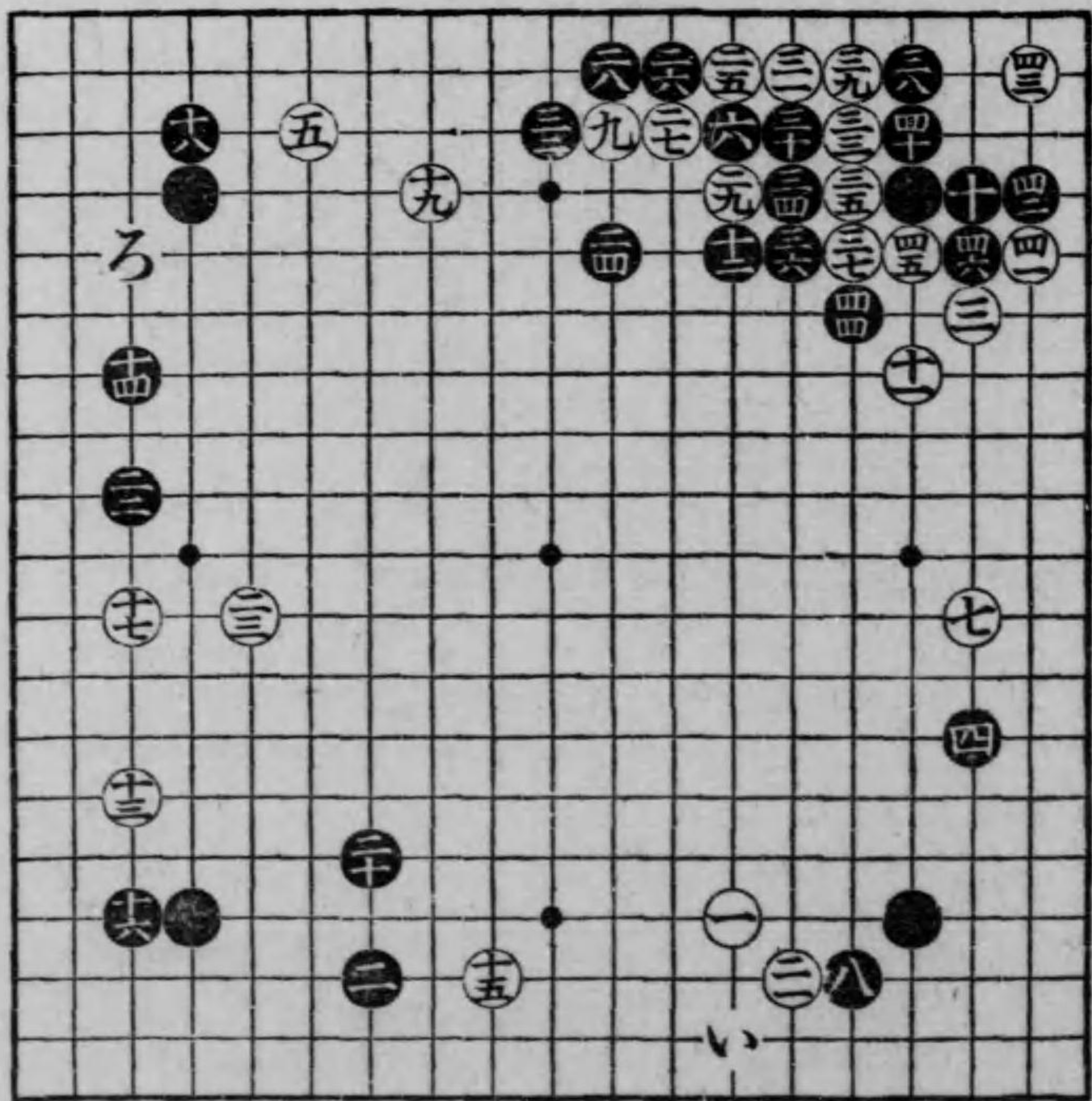
局七十二第



二二の要點を占むべきである。
 黒二八に約へた時白三十に行びると黒二九白(り)黒三四白(ぬ)黒(る)白三三黒(を)白(わ)黒三六白
 三三黒(か)白(よ)黒(た)となつて白全滅となる。故に白二九と刎ねて連絡を計る外はないのである
 白三七の手で(れ)と折くと黒に(そ)と打込まれて五、二三の二子が治まらぬことになるから白は止
 むを得ず三七に圍ふたのである。
 乃ち黒が三八の要點を占むる手順となるので白は三九、四一と走路を取る外はない。次に黒に四二
 以下四六、四八と大地域を占めらるゝ結果となつては白に勝算はない。

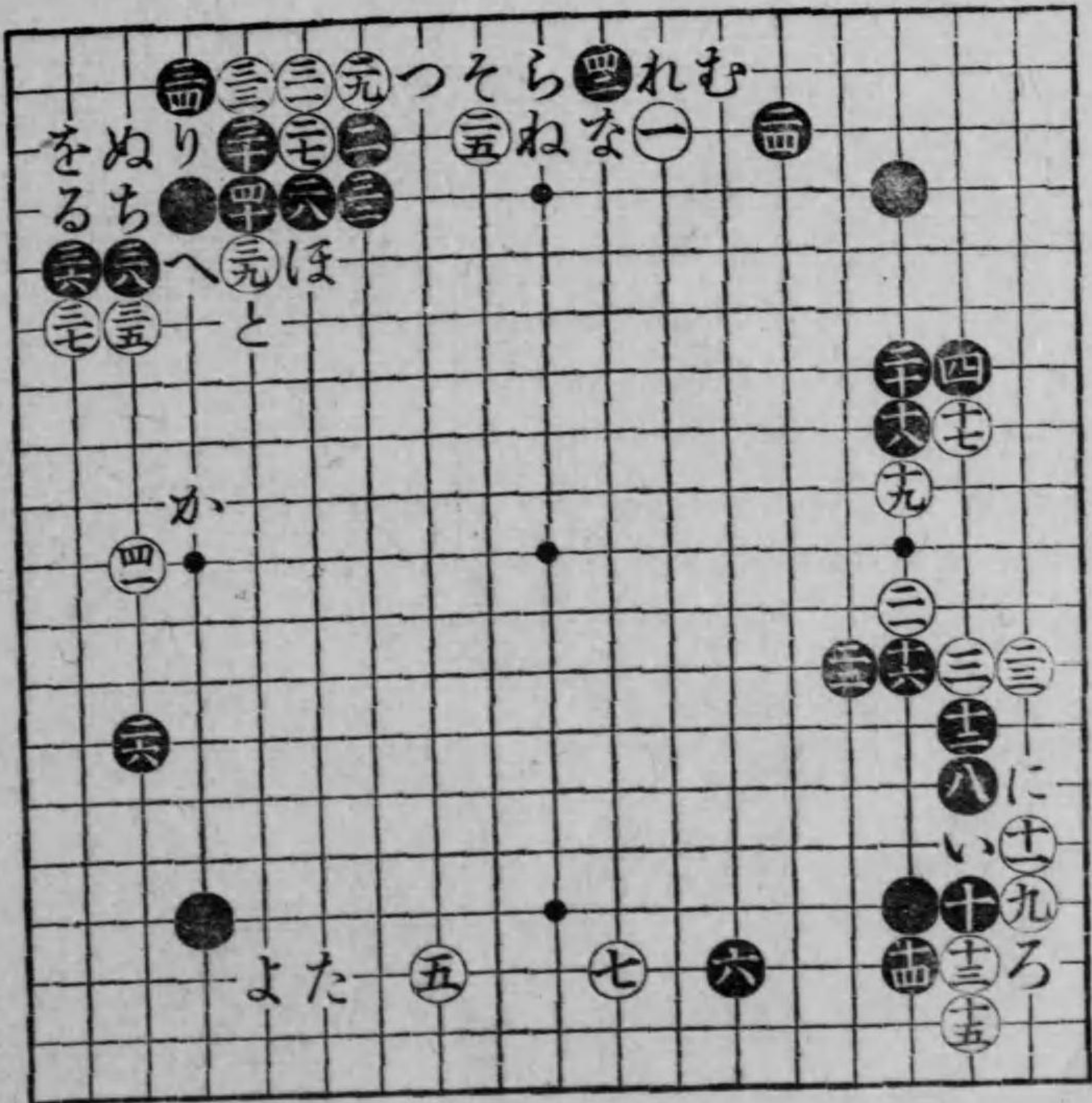
(第二十八局) 黒八は隅を護る
 一方に(い)の點に侵襲の意を含
 んで居る。さればこそ白二一に
 尖頂けて之を防いだのである。
 黒二二は(ろ)の打込を防ぐ一方
 に時宜に依つては二十の味方と
 相呼應して十三、十七の白を攻
 めやうと云ふ意味も含まれて居
 るのであるから白は先づ二三の
 點に走路を取るが穩當であらう
 白二五は敗着である。黒から二
 六以下四六に突込まれる結果と
 なつては白は少しも獲る處なき
 のみならず左側五、十九の二子
 が非常に薄くなつて攻められる
 ことになるから白の大敗は到底
 免れないのである。

局八十二第



(第二十九局) 白一の大々桂馬掛りは隅に餘り響かぬから黒は二と拓いて白の二七の掛りを妨げたので黒四六も亦同意である白七に詰めた時黒(い)と締る手段もあるが酷しく八の點に詰むるも亦一策たるを失はぬ。白九の打込に對して黒十に突當るが定法で白十一に引いた時黒(ろ)と約へ白(に)と盤るのが普通であるが譜の如く黒十二に突當る手段もある。然る上は白十三に刎ね黒十四に約へた時白十五に行んで生きざるを得ない。黒十六以下二二と行び白を二三に下らせて二四と詰めたのは穩かで良い。

局九十二第

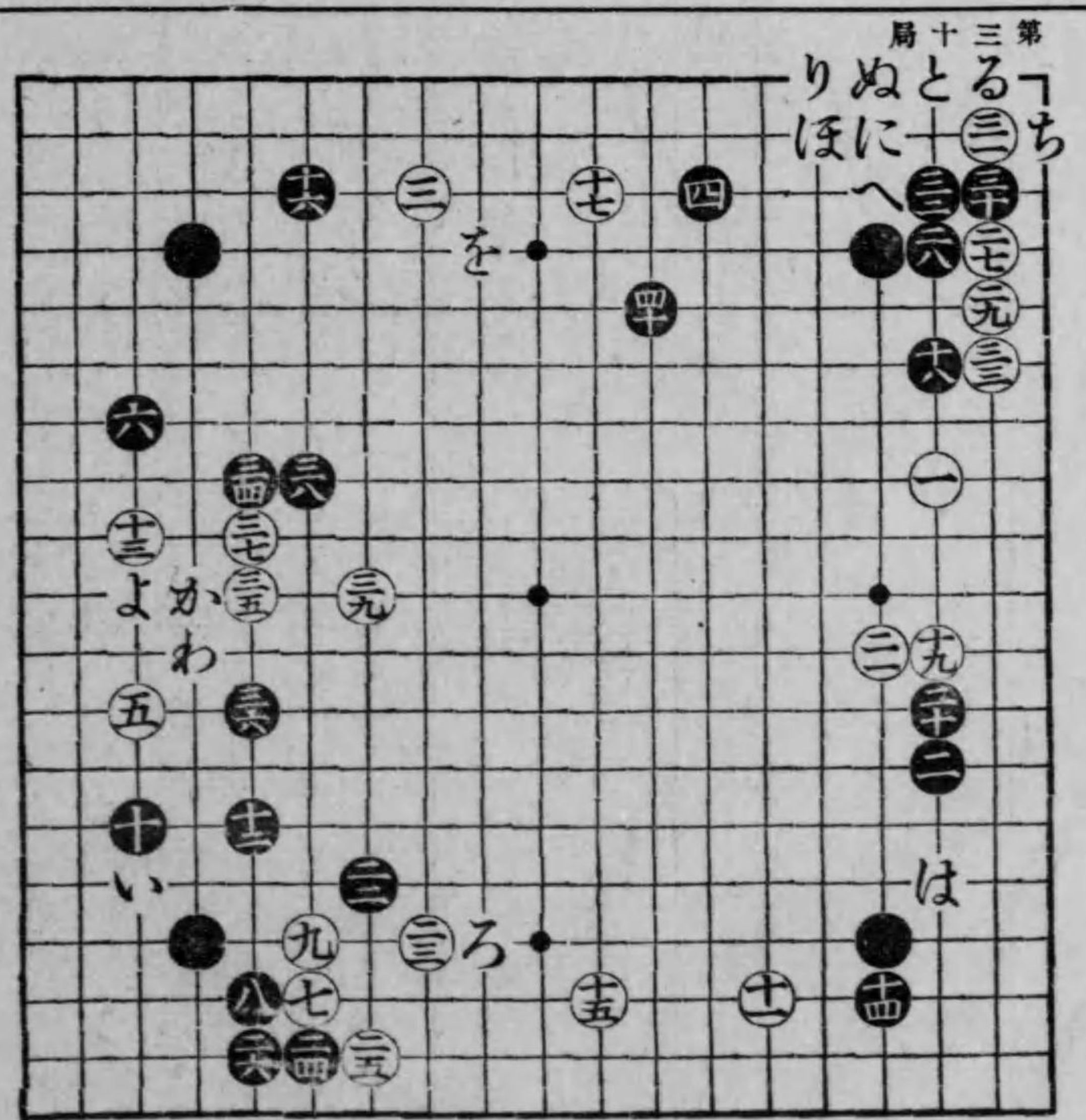


白二七に打込み黒二八に約へた時白二九に刎ねずして三十の點に行びることがある。此時黒普通の如く二九の點に下ることあらんか。白四十黒三九白(ほ)黒三二白(へ)黒(と)白(ち)となつて黒の方が悪い。然らば如何に應手すべきかと云ふに白三十の時黒三二白(り)黒(ち)白(ぬ)黒(る)白(を)黒二九白三一の時黒(か)と打つか或は又白三十の時黒四十白二九黒三二白三三の時黒(か)と打つか良い。何れにしても白三十に行びる結果は面白くないので白は此場合二九に連絡を計る外はないのである。白三五以下黒四十までは双方當然の着手で前に説明する程のこともない。白四一に拆いた時黒(よ)又は(た)に詰めて居るのが普通であるが上邊四二の點に侵掠を試みるも亦一策である。此時白(れ)と約へんか、黒(そ)白(つ)の時黒(ね)と膨れ出す筋がある。故に白は(れ)杯に慾張る譯に行かぬ。(な)と約へる外はない。然らば黒(れ)と引き白(ら)の時黒(む)と引いて居るが良い。白は尙此所に一手を要するから黒は其機會に(よ)又は(た)に詰めて右側五七の白を攻むるが良い。

(第三十局) 白九と立つた時黒(い)と尖んで所謂三羽鳥の陣に構へることもあるが此場合は十に詰めて居る方が激しくて良い。

黒十四の手で(ろ)と敵を左右に隔て、戦ふ手段もあるが黒の態度としてはおとなしく十四に締り白を十五に拆かせて十六に詰め白を十七に拆かせて十八に詰めて居る方がふさはしい。

黒二十は(は)の打込を先手で防がん爲めに打つたのであるが譜の如く白が一、十九と二間に拆いて居る場合白の形を疑らす爲めに斯く打つことが間々あると云ふことを記憶して置くが良い。



黒二二に浴せかけ次に二四に勿粘いだのは所謂手順で先づ隅を丈夫にして置て左側五、十三の白を攻めやうと云ふ策戦である。

黒二八に突當つた時白二九に引かずして三十の點に行びると黒二九白(に)黒(は)白三二黒(へ)白(と)黒(ち)白三一黒(り)白(ぬ)の時黒(る)と投込んで劫争となる。然し黒の方には(を)(わ)其他多くの劫種を有して居るから本劫は先づ白の不利に歸するものと見なければならぬ。因て黒二八の時白二九に引き黒三十の時三一、三三と連絡を計る外はないのである。黒三四は二二、二四の意志を受け継いだので白が若し手抜することもあらば黒(か)と浴せ掛け白(よ)と受けた時黒(わ)と行んで窘めやうと云ふのであるから白は三五に備へざるを得ない。

黒尙三六三八と攻め白三九に逃げ出した時黒鋒を轉じて上邊四十の點に煽り掛けたのは三十七の白を攻めつゝ左右の陣形を固めて仕舞ふ魂膽である。

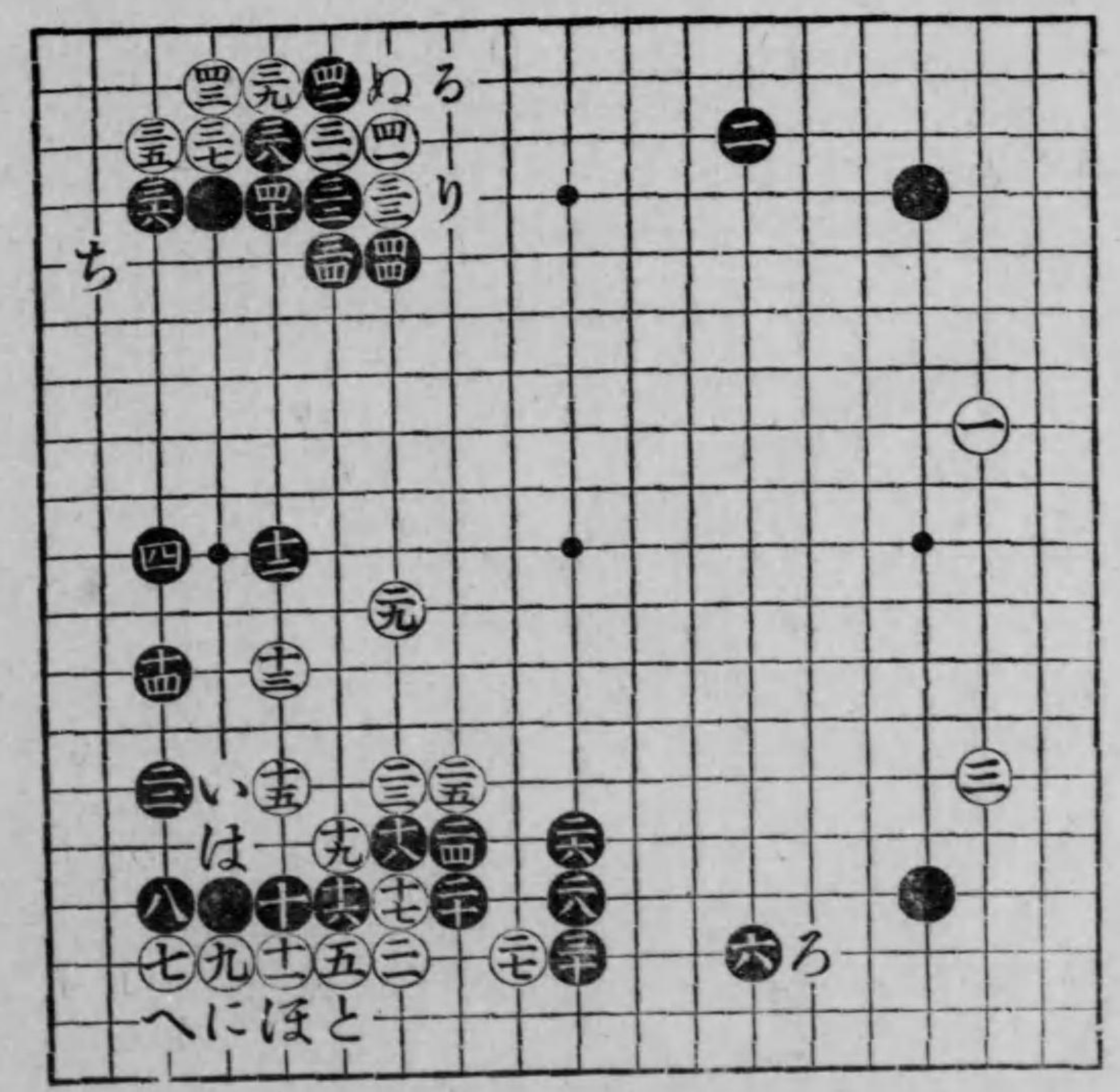
さあ斯うなつては白は何處も彼處も攻め立てられる形勢になつて居るから却々黒地を潰しに行く處の騒ぎではない。自分の方が忙しくて始末に困ると云ふ中に碁はお仕舞となるので黒の優勢なることは固より言ふを俟たぬのである。

(第三十一局) 白一の大々桂馬掛りに對し黒二と打つも亦一策で白三の掛りに對し黒之に應ぜずして四と目下の大場を占めたのは趣向である。

白五と来た時黒は普通(い)の點に應ずる處であるが若し然る時は白から(ろ)と掛かられるから此處は毎度云ふ通り六と右下隅を締る方がよい。

白七に打込んだ時黒九と約へると白八黒(は)白(に)黒(は)白(へ)黒十一白十二となる。斯くては最初黒が四と打つて左側に大模様の策さうとした趣意を没却することになる。故に黒は白七の打込に對して必ず八の側から約

局一十三第



へることを忘れてはならぬ。

白九と連絡した時黒十の行最も肝要の手筋で白から反對に此處へ刎上げらるゝことになる。左側の黒が非常に薄弱になる。因て黒十と行んだので此時白十一の手を抜くと忽ち黒から十一に突込まれ白(は)と受けた時黒に(と)と切られて五の一子か七九の二子かの何れかを捕へられて仕舞ふ。

故に黒十の行は先手で之を利かすことが出来るので白は十一につぐか二一に並ぶかして出切に備へねばならぬのである。

白十三は今打つて置かぬと後になつて間に合はなくなるから白十三と一擲黒の模様を消したので黒十四之に對する當然の應手である。

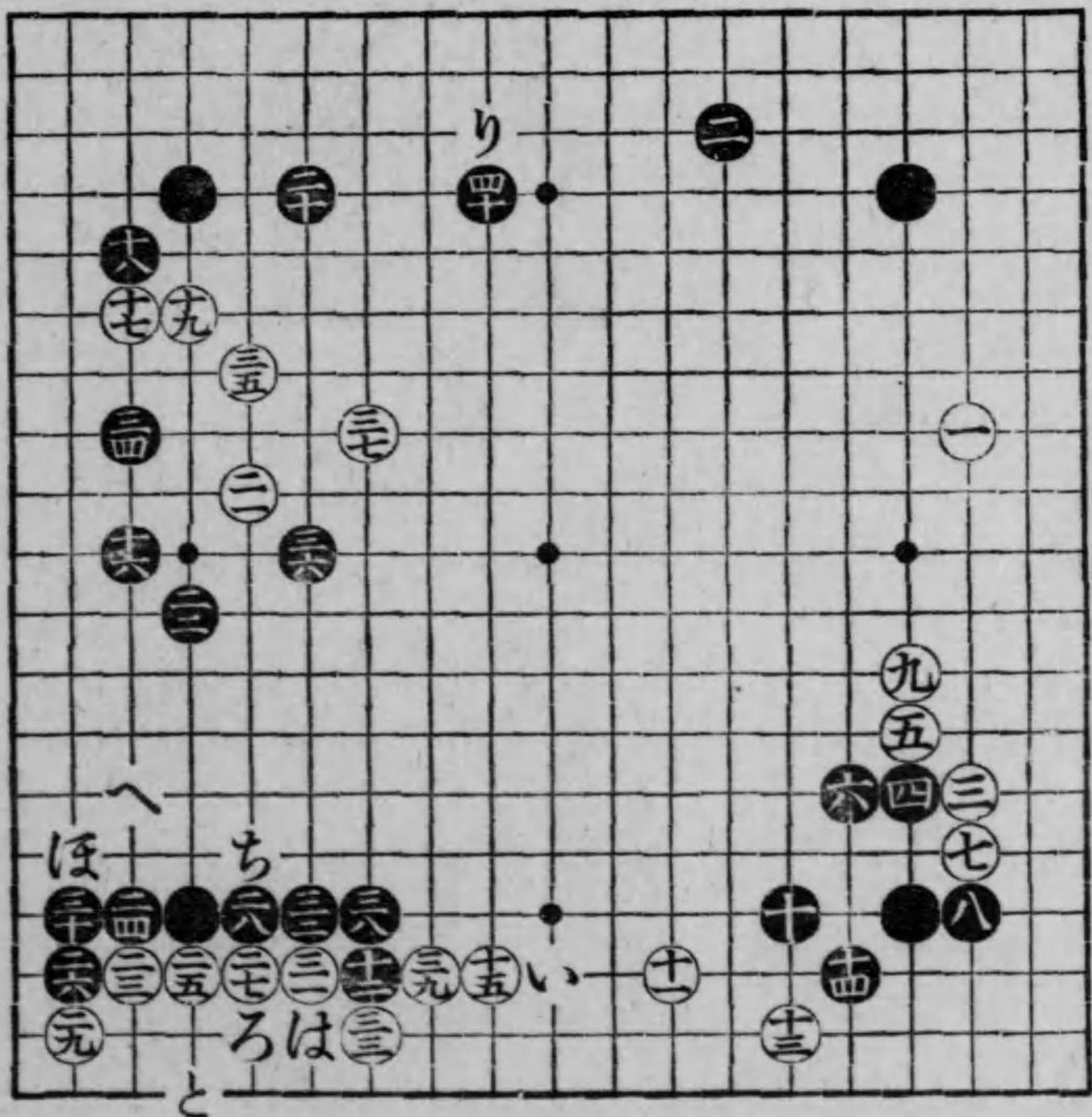
白十五と来た時黒二二に受けると白に十八の點に連絡されて了ふ。それでは何の味も無くなるから黒十六以下二十と先づ敵の勢力を二分して置いて二二と打つたので其結果は白二三以下黒三十となる外はない。

白三五に打込んだ時黒普通の如く三八の點に約へると白に(ち)と飛ばれて左側の黒の勢力範圍を滅茶々に蹂躪されることになる。斯くては最初黒が四と拓き十二と立つた趣意が立たなくなる。因て白三五に對して黒は定法に泥まないので三六に約へ白三七の時三八、四十と粘ぎ白四一に粘いだ時黒四二、四四と約へて飽くまで當初の意志を貫徹すべきである。

猶四四の手は後に黒(り)と刎ね白(ぬ)と約へた時黒(る)と封鎖の意を含んで居ることを記憶して置くがよい。

(第三十二局) 黒四は白の一、三の間合を奪めつゝ早く治まらうと云ふ意で白五以下黒八となるのが普通である。白九黒十は俱に縮で先づ斯く打つて置くが無難である白十一は黒の(い)の展開を妨げたので黒十二と左下隅を縮るが定石である。白は十三十五と根據を据えねばならぬ。黒十六毎度云ふ通り此場合に於ける唯一の大場である。白十七は黒の十九の縮を妨げたので黒は十八、二十と打つて遙に十六の味方と相呼應して白を攻撃せんとする意。白二十一は雷に十七、十九の通仕

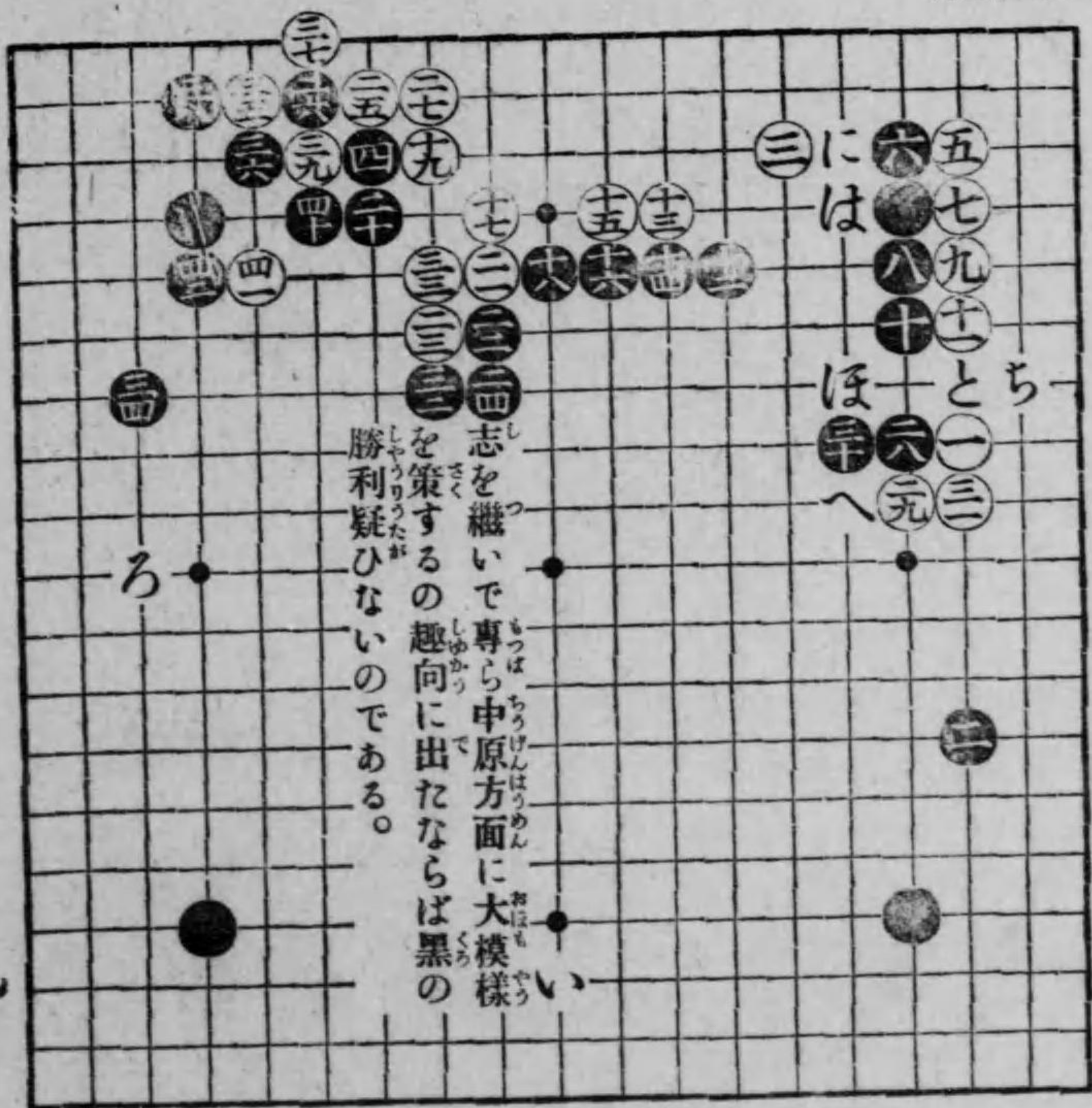
局二十三第



度をしたと云ふ意味ばかりではない。若し黒が手扱することあらば二二の點に浴せ掛けて黒を底地に匂はさうと云ふ意も含まれて居るのであるから黒は二二に尖んで之を防がねばならぬ。白二三に打込んだ時黒二四に約へ白二五に行んだ時黒二七に約へるのが普通であるが若し然る時は白(ろ)と匂ね黒(は)と約へ白二八に切り黒三一に粘ぎ白三十に匂ね黒(は)と約へ白二六に粘ぎ黒(へ)と掛粘ぎ白(と)と掛粘ぎ黒(ち)と約へた時白に他に先鞭を着けらるゝ結果となつて面白くない。因て黒二六以下三二に約へ白三三に盤つた時黒先手を以て三四三六と敵に壓迫を加へ白三七に走路を取つた時黒三八に粘いで白をして三九に盤らしめ次に黒四十と打つて上邊に大地域を策しつゝ遙に十七以下の白を狙ふの戦法に出づるを得策とするのである。黒四十は底(り)の點に縮るのが普通であるけれども斯くては十七以下の白に響かぬから此場合高く四十の點に打つを可とするのである。

(第三十三局) 白が五と打込んだのは黒の足場を奪つたので黒は手を抜いて(い)又は(ろ)の大場を占むるも良い。或は黒六の手で七に約へ白六に連絡し、黒(と)と行ひ白に(と)つなぎ黒(ほ)と飛び白(へ)は斜走し黒十二へ斜走し白十三に受け黒十四に押し白十五へ行ひ黒(こ)と頂け白(ち)と勿ねた時黒十一に行んで治まる手段もあるが譜の如く黒以下三十までの手順を連んで(こ)に粘いだ時黒三二に曲方面に大模様を策する。つても亦一策である。説明する程のことにも黒から(へ)に曲げる手である。るに黒は飽くまで當初の意

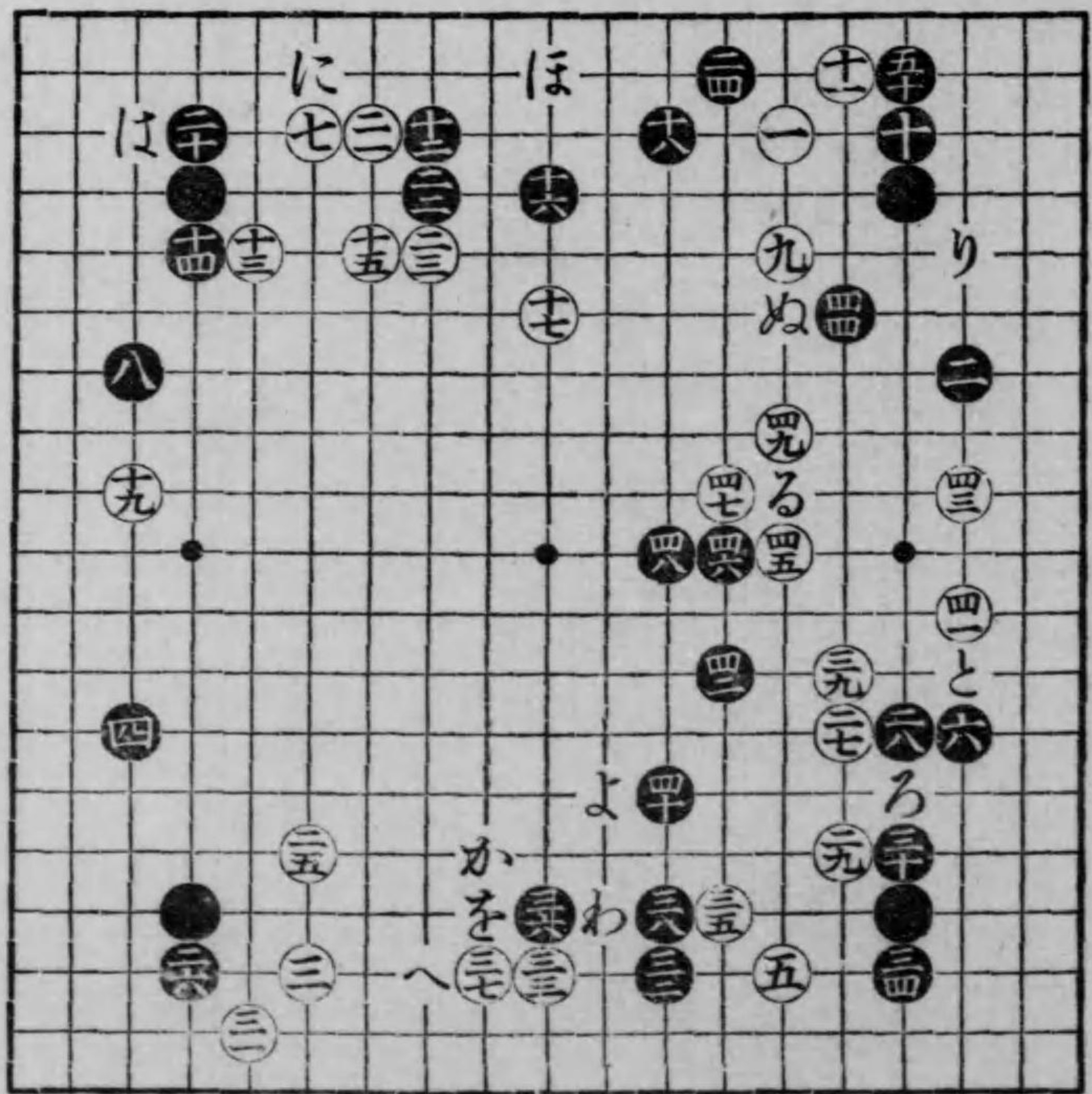
局三十三第



志を繼いで専ら中原方面に大模様を策するの趣向に出たならば黒の勝利疑ひないのである。

(第三十四局) 白一に對する黒二は普通の應手であるが斯く打つと白から七の點へ掛かられて上部中邊に大模様を構へらるゝことになるけれども本局の如く先づ隅を占めて然る後に白の缺陷を衝いて徐々に大模様を消すの趣向に打てば少しも差支はない白三に對する黒四も亦同様である。

局四十三第



れは唯其形のみを論ずるからさう云ふ理屈が生ずるので實戦に於ては何等差支はないのである。
 白七に對する黒八も亦前説同様である。
 白九は上部中邊に大模様を張らんとする趣向である。
 黒十は隅を占め且つ十八の點へ打込を含んで居るのであるから白十一に尖んで之を防がねばならぬ
 黒十二は白の模様を消す最要點で白十三、十五の兩着は此場合多く用ふる着手である。
 黒十六は中央に發展せんとする意で白十七は黒の發展を阻止したのである。
 黒十八は十二以下の味方を早く治まらうと云ふ意で此處は損益上から云つても却々大きい處である
 白十九は(は)の打込を狙つたので黒二十は(は)の打込を防いで隅を占めたのである。
 白二一は黒から(に)へ頂け盤られるのを防いだのである。
 黒二四は白から(は)に打込まれる筋があるから此く備へたのである。
 白二五は白九と黒二六は黒十と同意である。
 白二七は(と)の頂を含む一方に黒に二八に應せしめて二九と打ち下部中邊に大模様を張らんとする
 意も含まれて居る。
 白三一(は)の打込を防ぐ爲めに新く打つたので黒三二は此場合逸すべからざる要點である。
 黒三四は單に隅を占むるばかりでなく暗に三二の味方に勢援を與へて居るものである。
 黒三六は白の三五に對して多く用ふる着手であるが場合によつては單に三八の點へ押し出すことも
 ある。

白三七は黒の三六に對する普通の應手であるが之も場合によつては劇しく(を)の點へ刺上げること
 もあるけれども、さうすると黒は(わ)へ引く。其結果白(か)黒(よ)となつて白の方が餘り好ましく
 もない。故に大概は三七の點に引いて居る方がよい。
 黒四十は單に走路を取るのみではない。五以下の白を攻撃の意も含まれて居るのである。
 白四一は此處に打つより外なきも右下隅の黒に少しも響かぬ。黒四二は白を攻めつゝ自然に自己を
 厚くしやうと云ふ意である。
 白四三は自己を守つて(り)の打込を含むものである。
 黒四四は(り)の打込を防ぐ一方に時宜に依ては(ぬ)へ押して上邊一、九、十一の三子を攻めつゝ下
 部より右側に向つて發展して居る五以下の一隊を攻撃せんとする意が含まれて居るのである。
 黒四六は白に迫つて自己を堅固にする趣向最もよい。
 白四九を手抜すると黒から(る)の點を切られて白は應手に困るから此く備へたものである。
 黒五十は利の大なる所である。

局五十三第

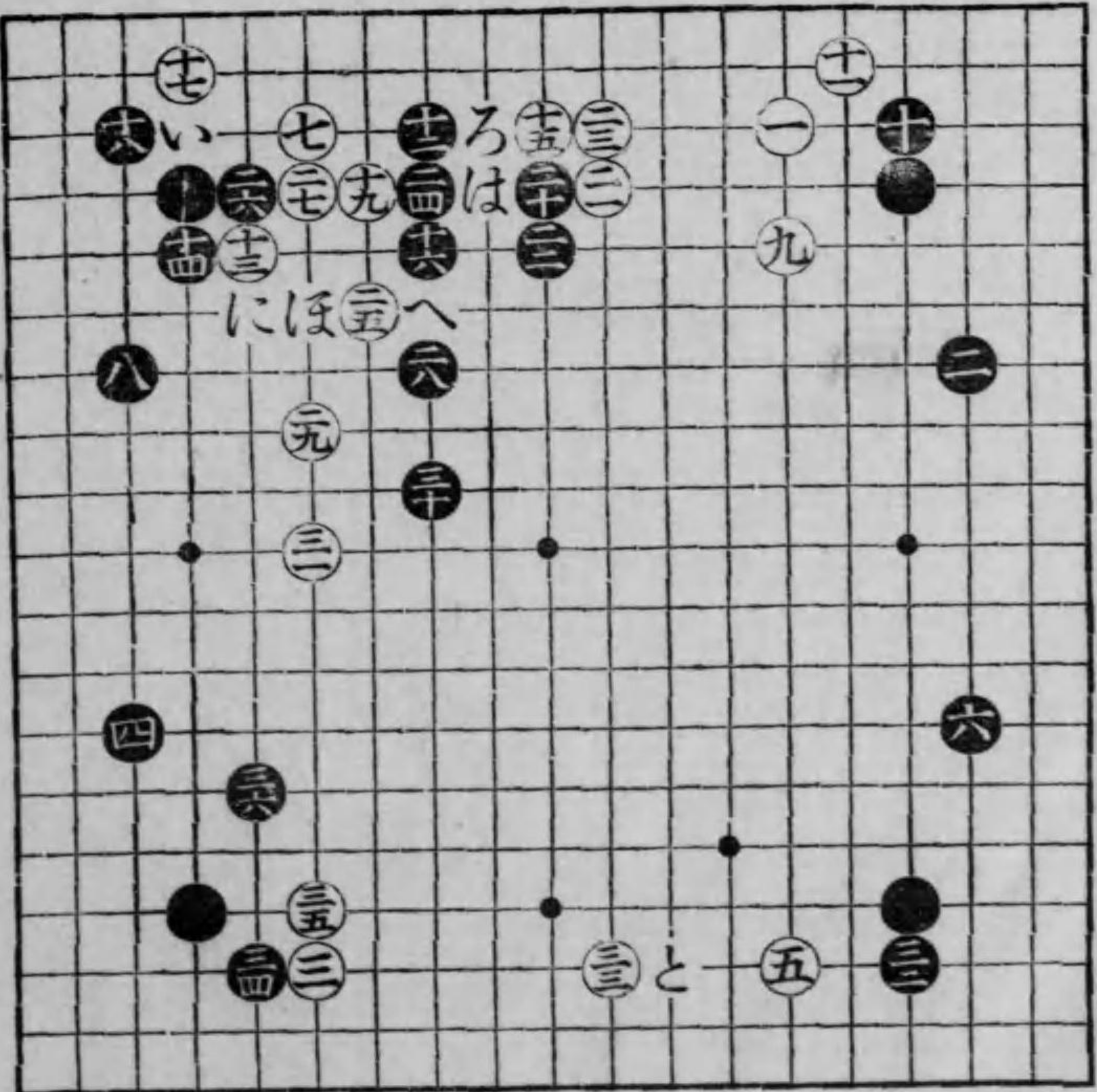
(第三十五局) 黒二より十四までは前局説明の通りである。白十五に詰めた時黒(い)と締り白十九に尖み黒二十に頂け白二三に引いた時黒二四に押出す手段もあるが譜の如く單に十六に飛出しても良い。

白十九に覗いた時黒二十に頂けて右側の白地を窄めつゝ走路を取つたのは黒の働きと謂ふべきである。

白二二に刎上げ黒二二に行んだ時白二四に突出すこともあらんか。

黒(の)と約へ白(は)と切つた時黒二三の所を切る筋がある。

故に白は二三に粘ぐ外はないの



で然る上は黒も亦二四に粘がざるを得ない。

黒三十の手で(に)と刎ねると白に(は)と並ばれて(へ)の出切を狙はれることになるから黒は辛棒して單に三十の點に飛んで居るが良い。

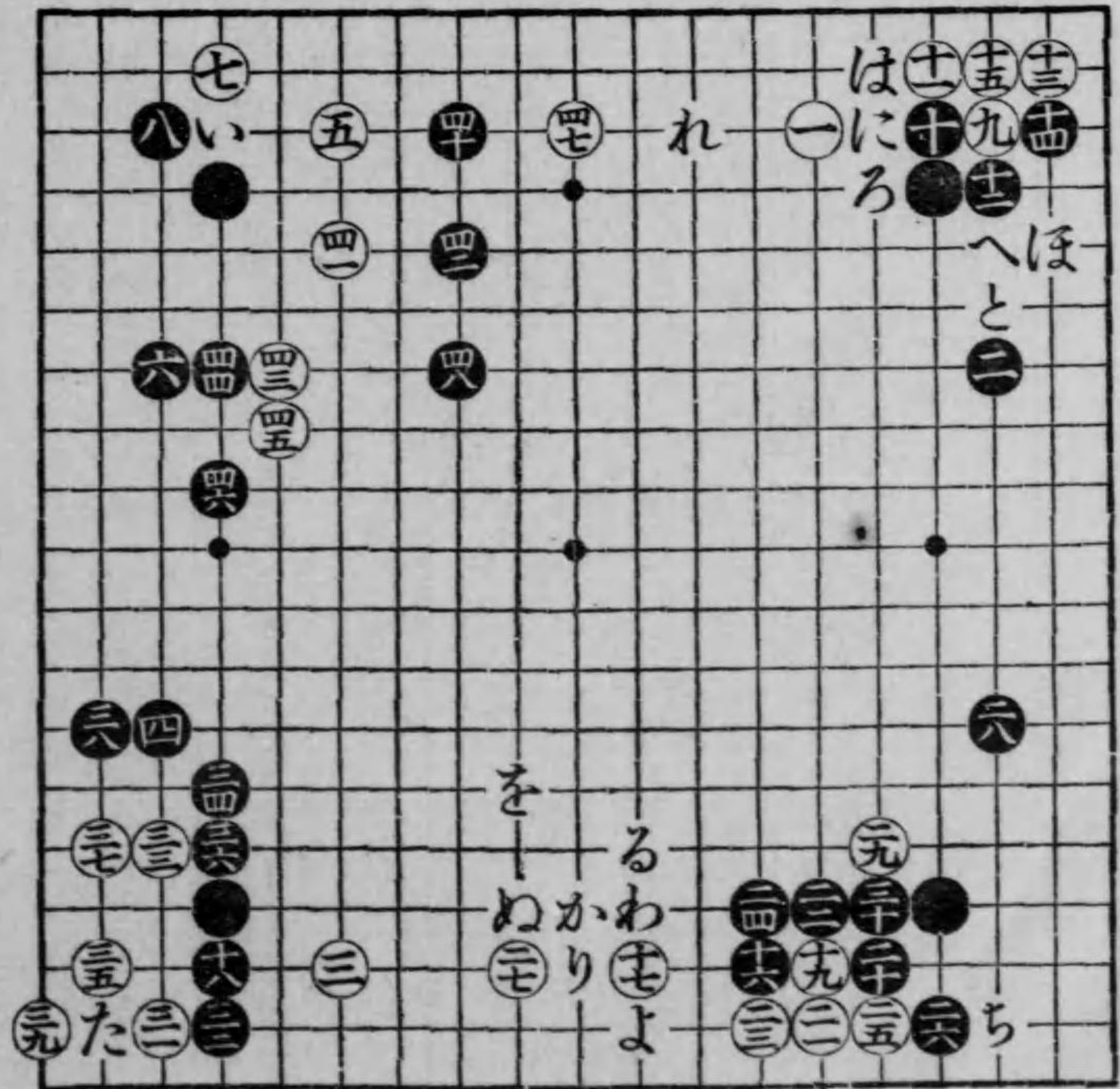
白三一は止むを得ない手で黒三二に締り白三三に拆いて(と)の夾撃に備へた時黒三四、三六と隅を固めつゝ遙に七以下の一隊を狙つたのは事宜の手段と謂ふべきである。

本局も亦白に勝算なきは固より言ふを俟たぬのである。

(第三十六局) 白七は餘り好ましい手ではないが黒から(い)と縮られるのが厭だから此く打つたので黒八と應ずるのが普通である。

白九と打込んだ時黒十二に約へ白十に盤つた時黒(ろ)と行びる定石もあり或は又白十一に勿ねた時黒(は)と約へ白十五に粘ぎ黒(に)と粘ぎ白(ほ)と飛び黒(へ)と尖頂け白十二へつないだ時黒(と)と粘ぐ手段もあるが譜の如く黒十二へ約へ白十三に掛粘いだ時黒十四へ當て込むも亦古來の定石である。
白十九に頂けた時黒二二に約へると白二十黒三十白二三黒二四

局六十三第



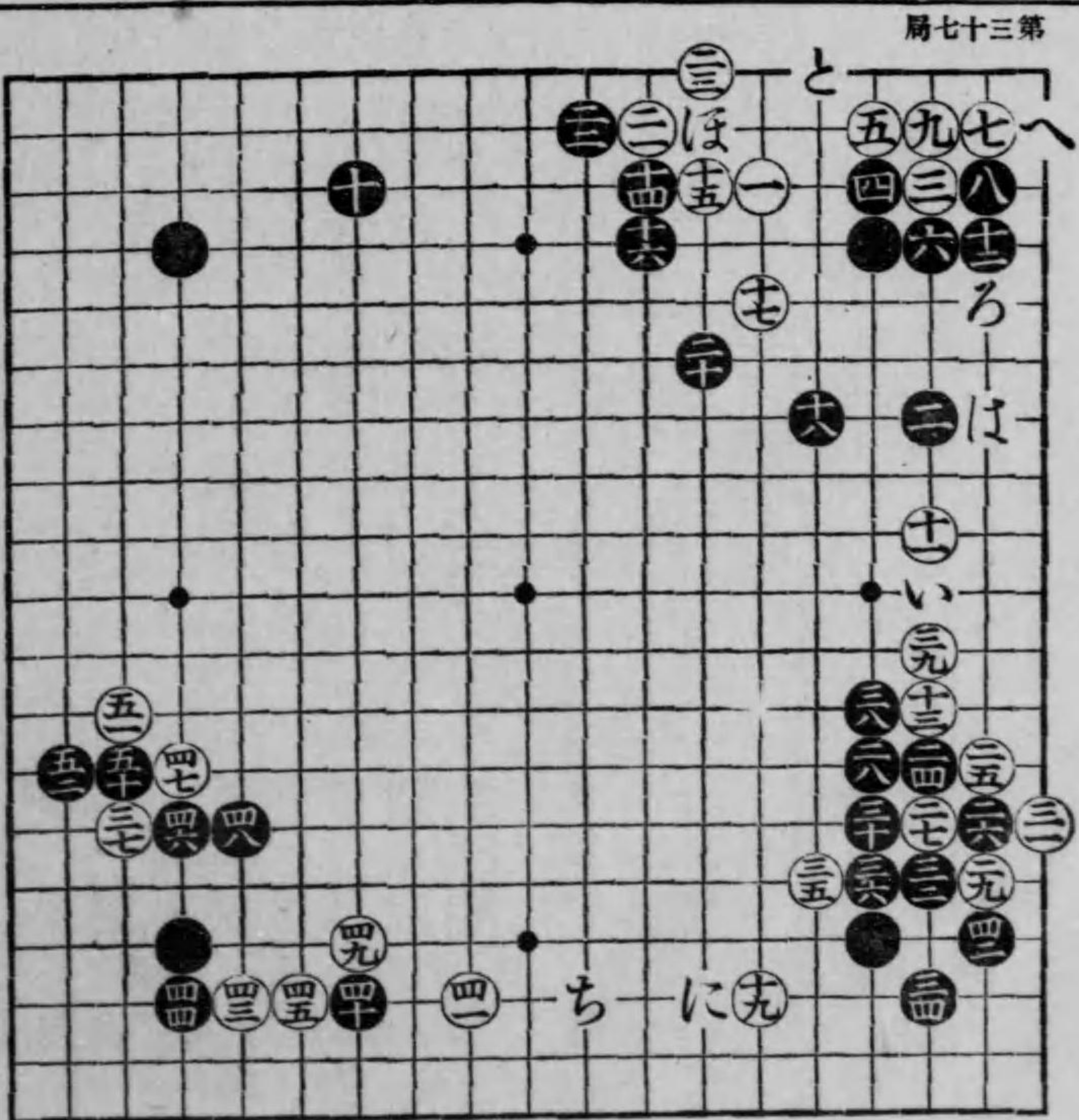
白二五黒(ち)となつた時白に右側面に先鞭を着けられることになつて黒の方が面白くない。因て白十九の時黒二十以下二六に約へ白二七に備へた時黒先手を以て二八の要點を占むべきである。斯くては白は三二七十七と所謂の勢力の重複を來たして面白くない。因て白二七の手で二八の邊に打ちたりと假定せんか。然らば黒二七に打込み白(り)と突當り黒(ぬ)と立ち白(る)と飛出した時黒(を)と立つがよい。

又黒二七に打込んだ時白(り)と突當らずして直に(る)と飛出せば黒(わ)白(か)黒(よ)と頂ける筋がある。要するに黒から二七の點に打込まれる結果は白の大不利に歸せなければならぬから白は二八杯に儲ける譯に行かぬ。是非共二七の點に備へて置かなければならぬので結局黒が二八の要點を占むることになるのである。

白三一に打込んだ時黒三五と打ち白三二に盤つた時黒(た)と約へる手もあるがそれよりは譜の如く黒三二以下三八と打ち白に三九と活を打たせて四十の要點を占むるを得策とするのである。
白四三に冠した時黒四四に突當り白四五に行んだ時黒四六に備へ白四七に詰めた時黒四八に立つて五以下の一隊を攻めつゝ(れ)の打込を狙ふべきで本局も亦白に勝目はないのである。

(第三十七局) 黒十は(い)の點に拆くのが普通であるが此場合は此く打つも仔細はない。白十一は黒の(い)の展開を妨げる一方に黒が若し手を抜けば白(ろ)と覗き黒十二に粘いだ時白(は)と盤つて黒の根據地を奪取せんとする意も含まれて居るのであるから黒は十二に粘いで十四の詰を狙ふが良い。此時白十四に拆くは黒から二四に詰められて十一の白が攻められることになるから白十三に根據を据えたのである。

因て黒十四に詰め白十五以下十七に飛出した時黒も亦十八に飛(三三)二六の處に粘ぐ。



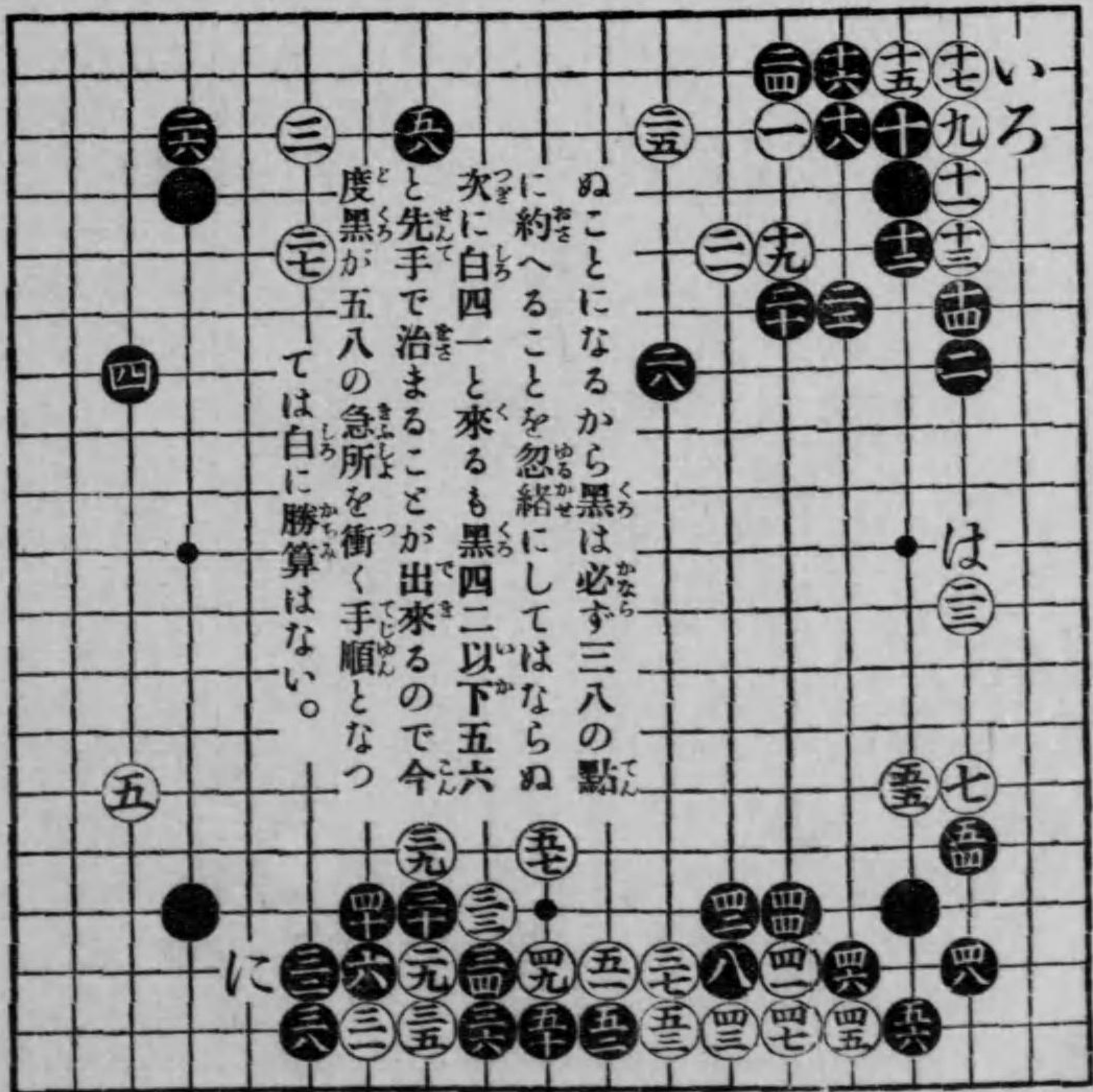
出すが良い。此時白二十の點に出たいのは山々であるがさうして居ると黒に手を抜かして(に)の點に拆かれる。さうなると何處も彼處も極りがついて仕舞つて白の攻める石がなくなるから黒に二十の要點を譲つて白十九に攻め掛つたのである。

黒二十に封鎖した時白二一の手を抜くと忽ち黒から二二の點に下られ白(は)ならば黒に(へ)と刎ねられ白(へ)ならば黒に(と)と走り込まれて白死になる。因て白二一、二三と活きざるを得ないので黒二四以下二四までは常用の手段で別に説明を要する程のこともない。

黒四二は先づ隅を確實にして置いて機を見て(ち)に打込まうと云ふ意である。白四三に打込んだ時黒四四と約へるのが普通で其結果白四九黒五十となる外はないので黒は四十の一子を失ふた代りに三七の白を擒にすることが出来るから決して割合が悪くない。本局も亦黒優勢である。

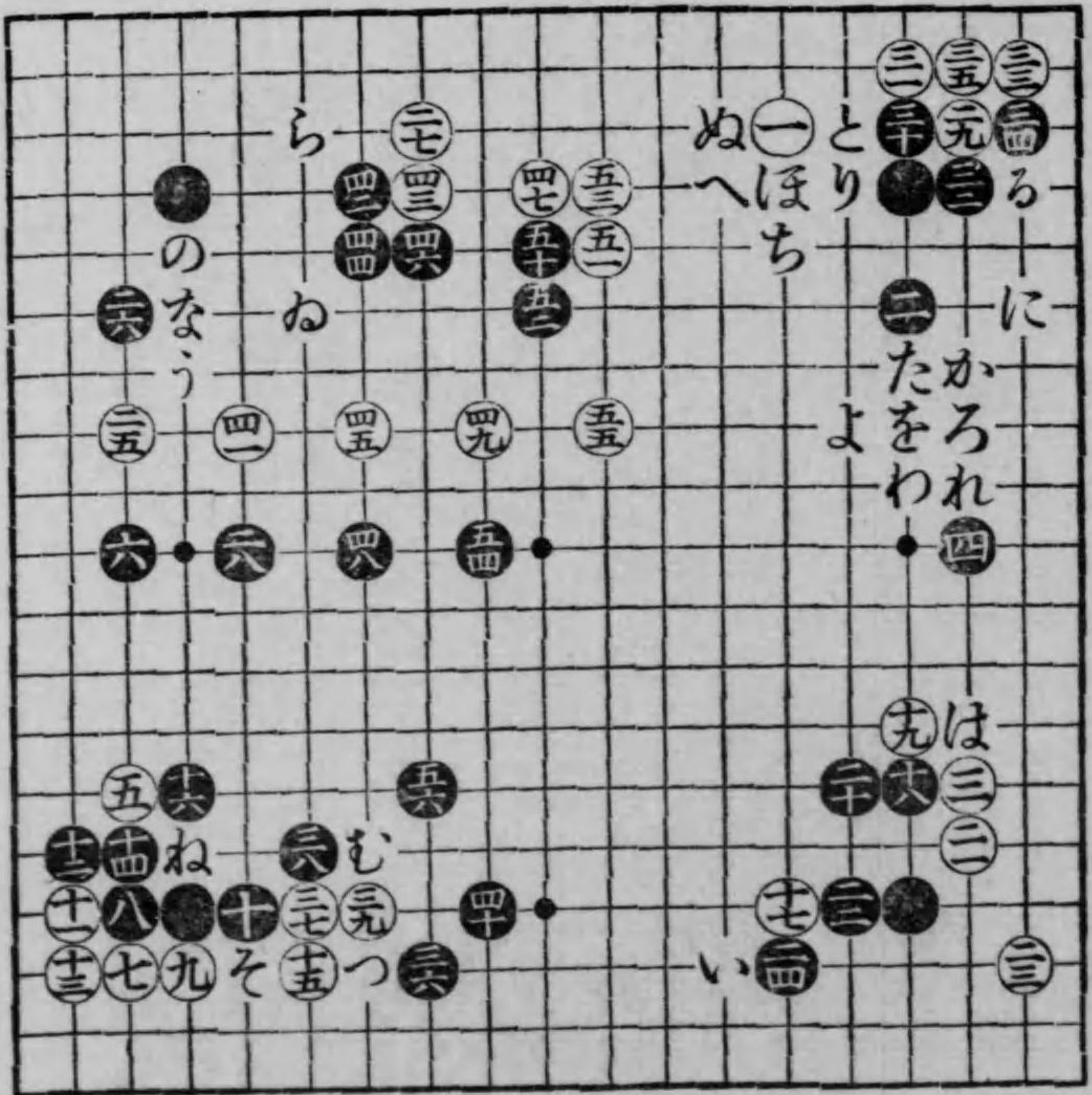
(第三十八局) 白十一の手を十五に勿ねると黒十一白(い)黒(ろ)白十七の時黒(は)と拓くことになる。斯くては白七が恰度黒から三間に夾撃される姿になつて面白くない。因て白十一、十三と行ひ黒十四に約へた時白十五に勿粘ぎ黒十八に粘ぎ白十九に立ち黒二十に頂け白二十一に引き黒二十二に引いた時白二十三に拓いて黒の夾撃に備へたのである。黒二十四は何時でも(に)と勿込んで眼を造る準備をしたので黒二十八は此場合逸すべからざる要點である。と記憶するがよい。

局八十三第



(第三十九局) 白一の小桂馬掛りに對し黒二と締るも亦一策である。白三に對して黒普通の如く(い)又は十七に應ずると白(ろ)と掛かられるは必定でさうなると右上隅の黒は恰度一(ろ)三と追手擲手兩面から迫られて居る姿になつて面白くない。因て黒四と詰めて白三を夾撃し且つ右下隅の陣容を整へつゝ白(ろ)の掛りを妨げたのである。若し然らば白三の手で直に(ろ)の點に攻め掛からは如何に應手すべきかと云ふに黒は此場合(は)と拓いて白の三の掛りを妨げつゝ白(ろ)に對して攻勢を取

局九十三第



るべきである。

此時白(に)と走らば黒(は)白(へ)黒(と)白(ち)黒(り)白(ぬ)の時黒(る)と締り若又白(に)と走らずして三一と來れば黒(を)白(わ)黒(か)白(よ)黒(た)白(れ)の時黒二九と尖んで治つて置くが良い。

備、白五と來た時黒六に詰めたのは趣向である。
白七の手で十五の點に兩掛りに打つ手段もあるが若し然らば黒三七に頂け白三九に刎ね黒三八に行び白(そ)と行んだ時黒九と約へるが良い。若又白(そ)の手で七と來れば黒(そ)白八黒(つ)で良い。茲に注意を要するは黒八の手で此手を九の點に約へるものあるは往々見受くる處であるが之は甚だ宜しくない。

何故かと云へば白八黒(ね)白十四白三六となつた時白に二六の邊に打たれることになつて黒六が治まらぬ姿になるからである。

故に黒は必ず八の側から約へ白九以下黒十六に刎ねて六の一子を益々働かせるが良い。
黒十八から二四までは定石で別に説明する程のこともない。白二五は黒(な)の締を妨げたので黒二六に詰めて打つが普通である。

白二七の手で敵壘近く(ら)と掛かると二五の一子と搦み撃ちに攻められぬとも限らぬ。加之一との間合が餘り廣きに過ぎて中間に打込まれる候がある。そこで白二七と遠巻に掛つて遙に二五の味方に勢援を與へた譯で黒は二八に立つて居るが確である。
白二九は此場合の大場で黒三十以下白三五となつて次に黒が三六の大場を占むる手順となるのである。

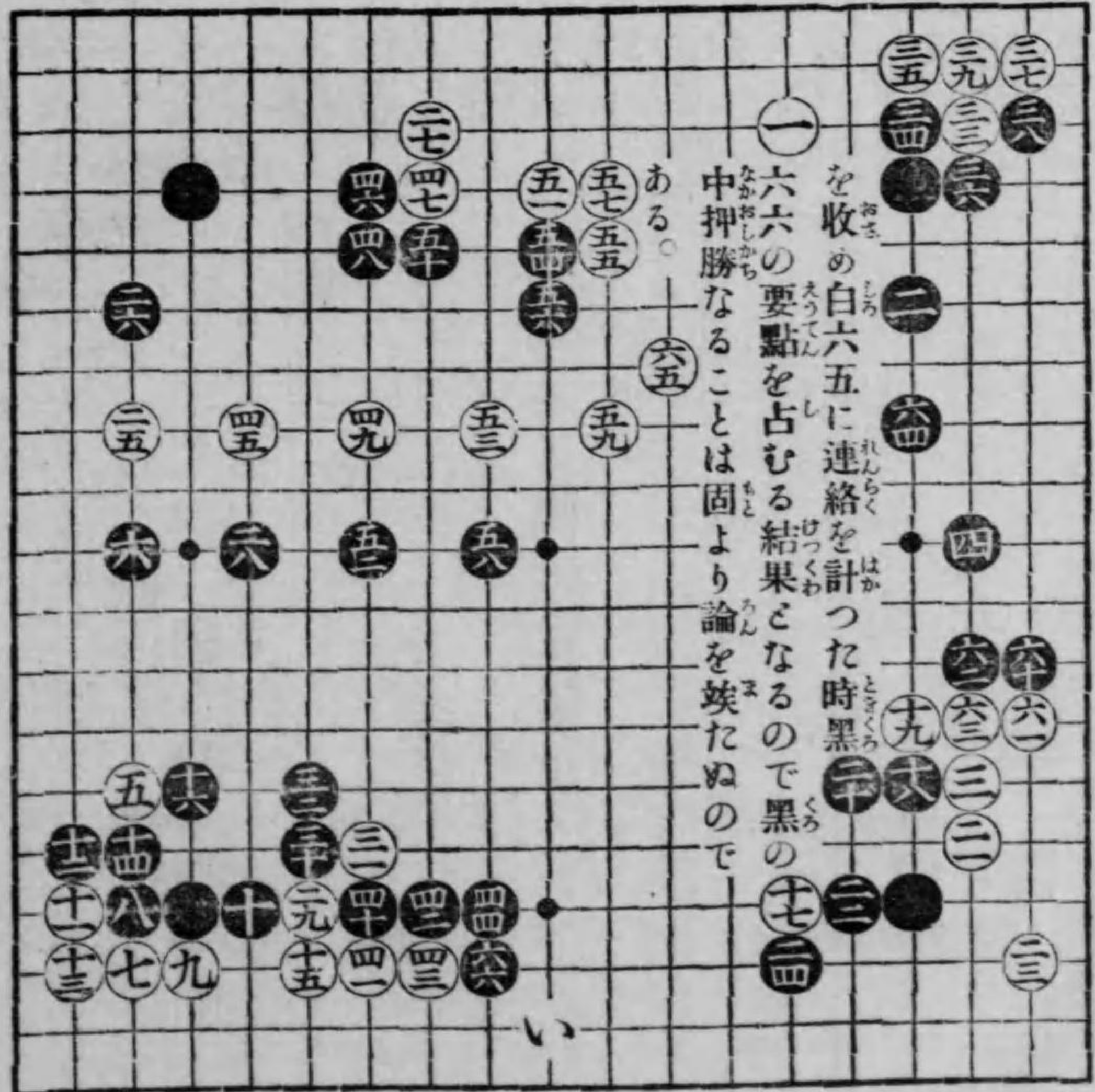
る。

白四一の手で今一手(む)の點に押し出したのは山々であるがさうして居ると黒に手を抜かれて四一の點に冠せられるは必定で若し然る時は白(う)と尖出しても黒(わ)白(な)黒(の)となつて逃る途はない。此處も亦随分大きい所であるから白四一に飛出したので然る上は黒は四二と打つて上下搦み攻めの戦法に出づるが良い。

白四三以下五五までは止むを得ざるの着手で結局黒が五六の要點を占むることになるのである。
黒軍の勝利歴然白に勝算なしと斷言して良い。

(第四十局) 本局は前局に於ける白二九の變化で白が此手で右上隅三三の點に打込むと黒に四三の要點を占められる結果になる。
 因て白先づ二九と押し黒三十の時三一に勿ね黒に三二に行びさせて三三の點に打込んだのである。黒三四以下白三九に粘いだ時黒四十に切り白四一以下黒四四に行んだ時白尙(い)と走つて右側の黒模様を消したいやうな氣がするがさうして居ると黒から四五の點にかぶせられるに極つて居る。
 脊に腹はかへられぬから白四五と飛出したので黒四六以下白五九までは前局説明の通りである。此時黒六十以下六四と着々實利

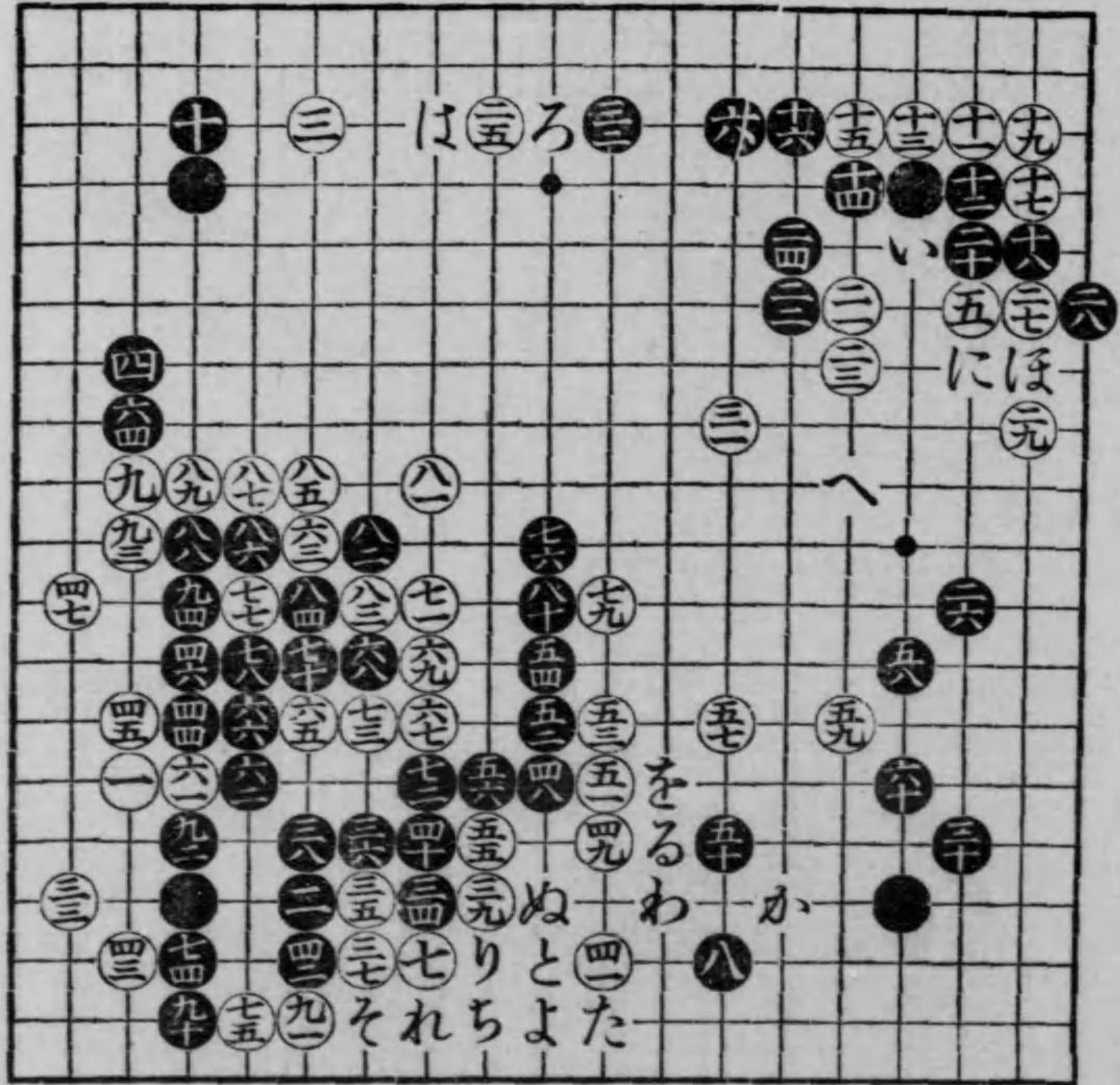
局十四第



打碁

(第一局) 黒十二の手で十三の側から約へ白十二に盤り黒(い)と行び白二十につながつた時黒(ろ)又は(は)の邊に白三を夾撃する手段もある。猶、黒(い)と行んだ時白二十に打たずして二五へ拆かば黒直に二十に突込み白十八に約へた時黒二七の點を切るが良い。此時白十七に粘れば黒(に)と抱へて外勢を張るべきで若又白十七に粘がずして(ほ)と約へなば黒十七に切り白二八に取つた時黒十九と行んで振替るが良い。
 黒三十は先づ三一の點に煽り白(へ)の邊に飛出した時三十の點

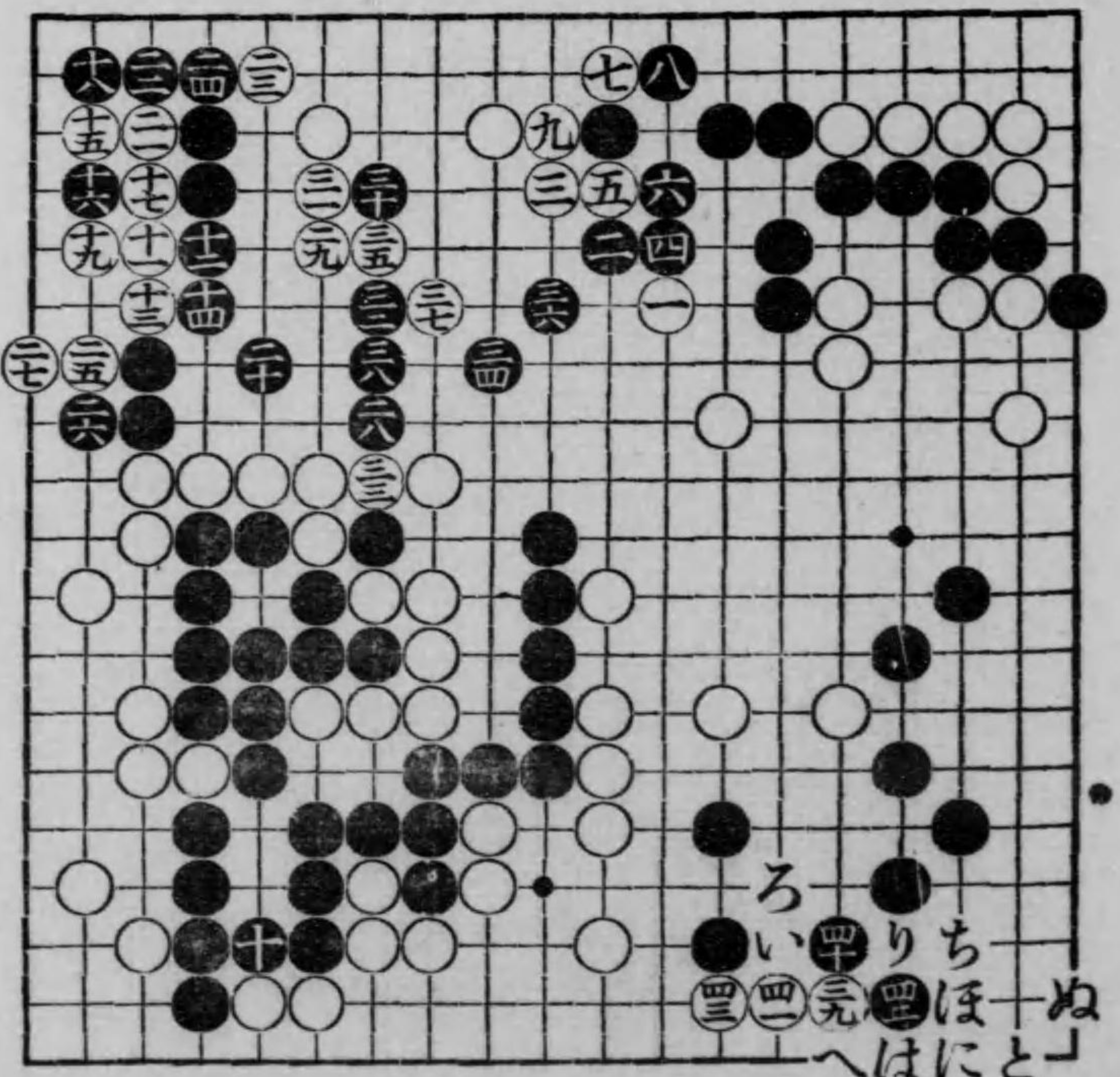
局一第



に縮るが順序である。
 黒三八は緩い。酷しく四二と約へ白三九と劬ね黒四十と粘ぎ白(と)と掛粘いだ時黒(ち)と覗き白(り)と粘いだ時黒六二と飛ぶか或は六一の點に頂け白四四と劬ねた時黒六二の點に引いて居るが良い。
 黒四八も亦緩い。此手で五五と約へ白(ぬ)と行んだ時黒五一の點に斜走し白(る)と飛出し黒(を)と押し白五十と行んだ時黒四九と曲り白(わ)と繋つた時黒(か)と縮るが良い。此時白手抜することもあらんか黒(よ)と置き白(た)と約へた朝黒(れ)と頂け白(そ)ならば黒(り)と切り白(り)ならば黒(そ)と盤りて敵の根據を奪ふ筋がある。斯くては白は大變であるから黒(か)の時白は尙一手此處に補つて置かなければならぬ。黒は尙先着の權利を持つることが出来るのである。
 黒六四は八三の點に應じて絶對に安全を期すべきである。
 然るに此一手を等閑に附して偏境六四の點に没交渉の石を下したる爲め白に六五、六七の急所を衝かれてさしもの大軍を危殆に陥らしめ遂に此一邊で大局の勝敗を決して仕舞つたのは黒の爲めに惜むべきである。

(次局) 白一は十の點に眼を奪つて飽くまで此の一隊を攻むるも差支はないが若し途中で生きられるやうなことがあつては、舞も蜂も取らぬことになつて仕舞ふから此方面は暫く中ブラリンにして置て此く一と打つて右上の黒軍を攻めつゝ不知不識の間に中ブラリン軍を包圍しやうと云ふ白の策略である。黒はこの中ぶらりん戦略に引掛つては大變であるから白九の時右上の味方を捨てる覺悟で十と生きざるを得ないのである。
 白十一も亦中ブラリン戦略である。右上のヒヨロ／＼石は今暫らく預り物として置て先づ十一

局 次

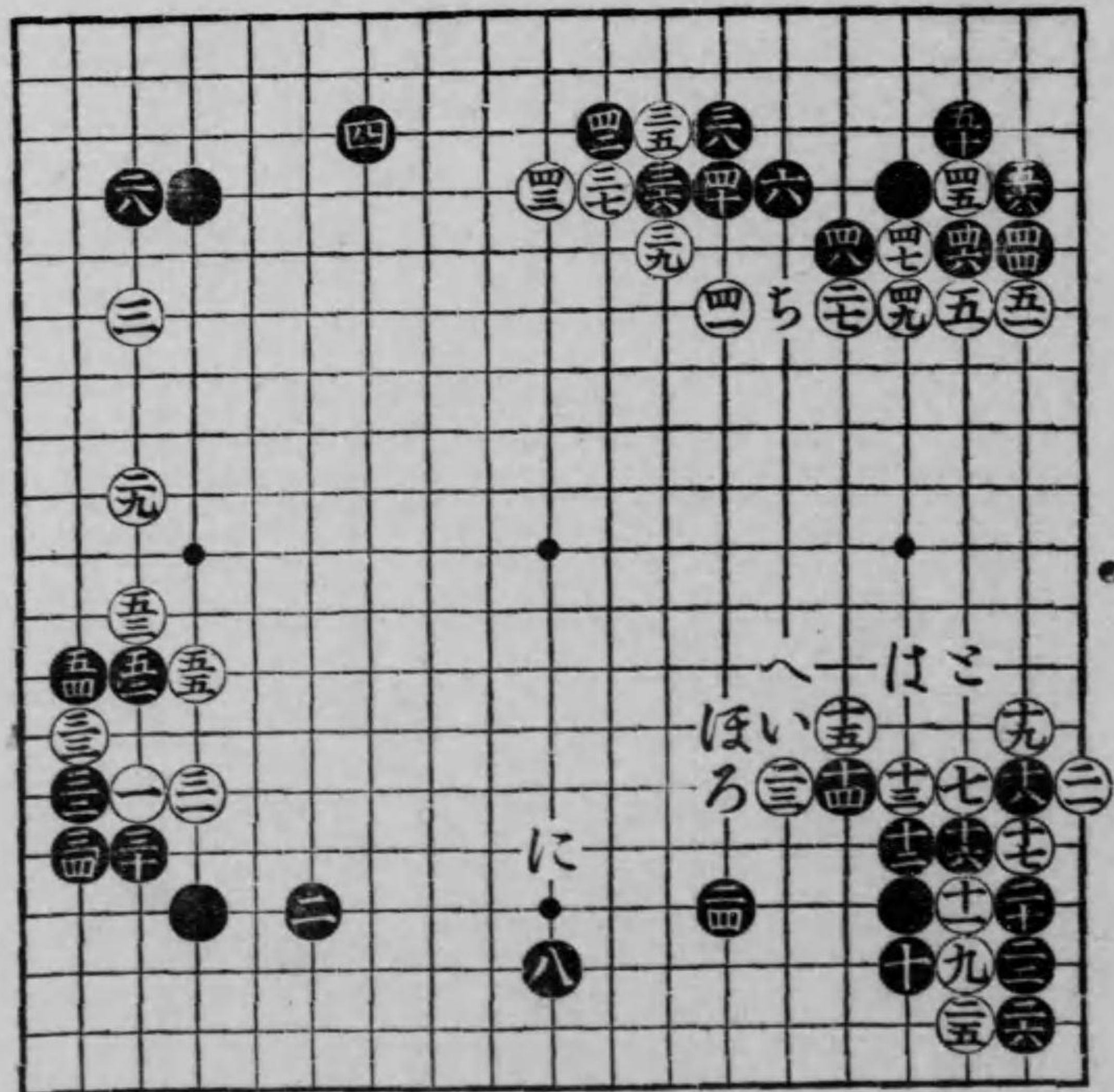


以下二七と下つて此隅の眼を奪つた後右上の預り物と搦み攻めに逢はさうと云ふ策戦に外ならぬのである。黒二八以下三八とやつと連絡し生くることは出来たが其惨澹たる悪戦苦闘の跡は實に眼も當てられぬ有様ではないか。抑も斯の如き結果を生じたのは本局黒六四の一手を誤つた爲めで此手を八三の點に應じてさへ置けば何等仔細はなかつたのである。

茲に初心者の注意を要するは右下隅白(い)と突込み黒(ろ)と約へ白(は)と勿ねた時黒(に)と約へると白(ほ)と切り黒(へ)と取り白(と)と約へ黒(は)と粘ぎ白(ち)と覗き黒(り)と粘いだ時白(ぬ)と生きる手段がある。故に白(は)と勿ねた時黒は辛棒して(ほ)の點に引くことを忘れてはならぬ。

(白中押勝)

局二第



(第二局) 黒十四は先づ十六に突込み白十七の時十八に切り白十九ならば黒二十白二十一黒二十二に飛んだ時黒は手を抜いて他を打つべきである。若又黒十八に切つた時白十九に約へずして二十の點に粘がば黒十四白十五黒二十三白(い)黒(ろ)白(は)の時黒(に)と單關するか或は(は)と押してゐても良い。然すれば後に黒(へ)と勿ね(と)と頂ける杯の味が残るから黒の方が有望である。

黒二四と地域を造る意は甚だ面白くない。先づ右上四六の點に尖み頂け白四九に立つた時黒(ち)と單關して右側の白地を削

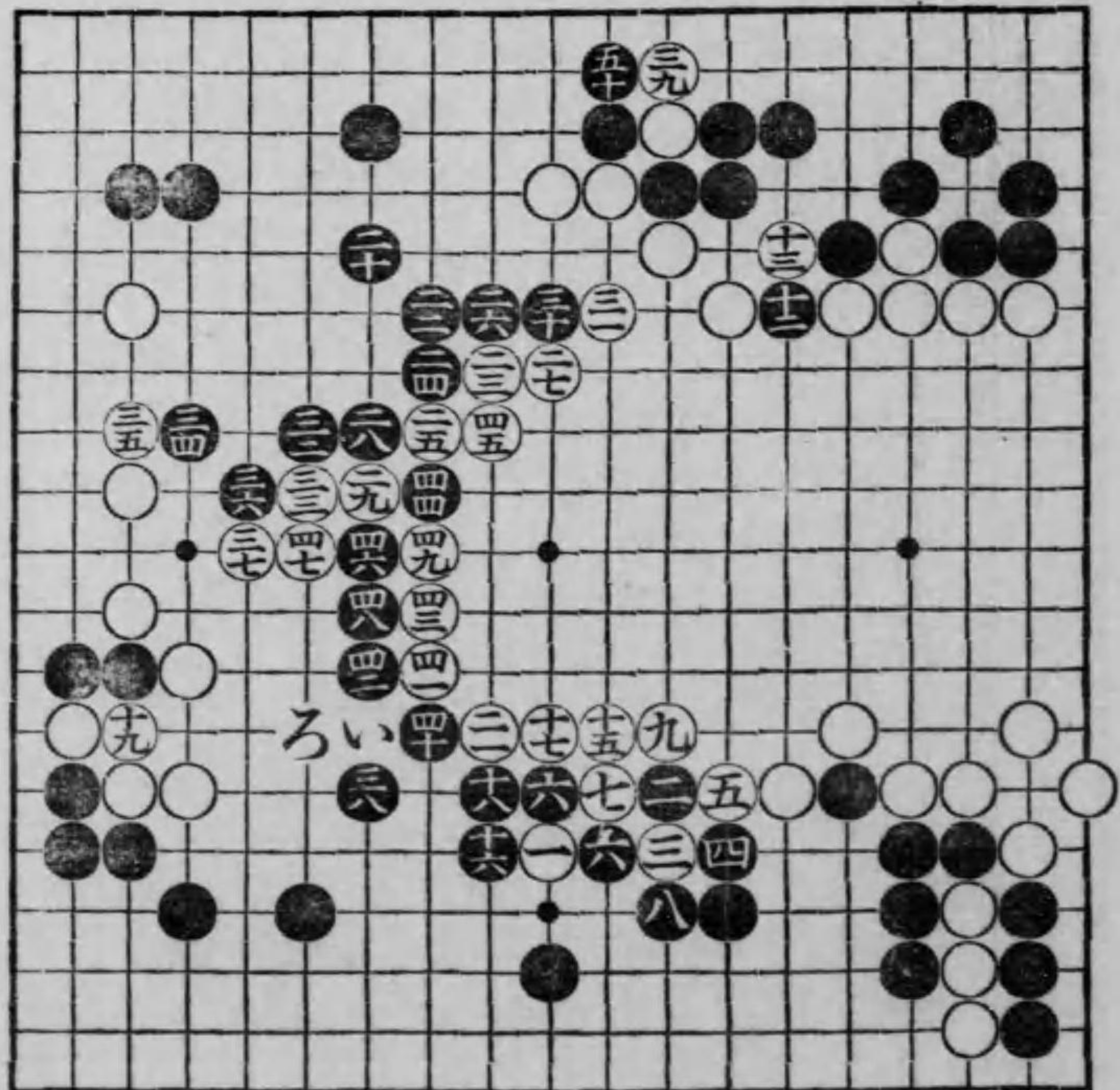
りつゝ上邊に大模様を張るべきである。
 黒三二は侵分の時機に打つべき着手で今は尙地域占領時代であるから此手を以て四六に尖み頂け白
 五一に下つた時四三の點に大地域を築すべきである。
 黒四四は悪い。斯く白から四五と頂けられ結局黒五六に取り白に先鞭を着けられる手順となつては
 黒の最大不利である。此手を以て單に四六に尖み頂け白五一に下つた時(に)と立つべき機會である
 黒五二五四は其意を解するに苦む。

(同次局) 白三九は(い)と頂け
 黒(ろ)と劔ねた時四二の點に引
 いて居る方が利益である。黒に
 四十以下四八まで先手で打廻さ
 れ結局五十に約へらるゝ手順と
 なつては白に勝算はない。

(黒十四目勝)

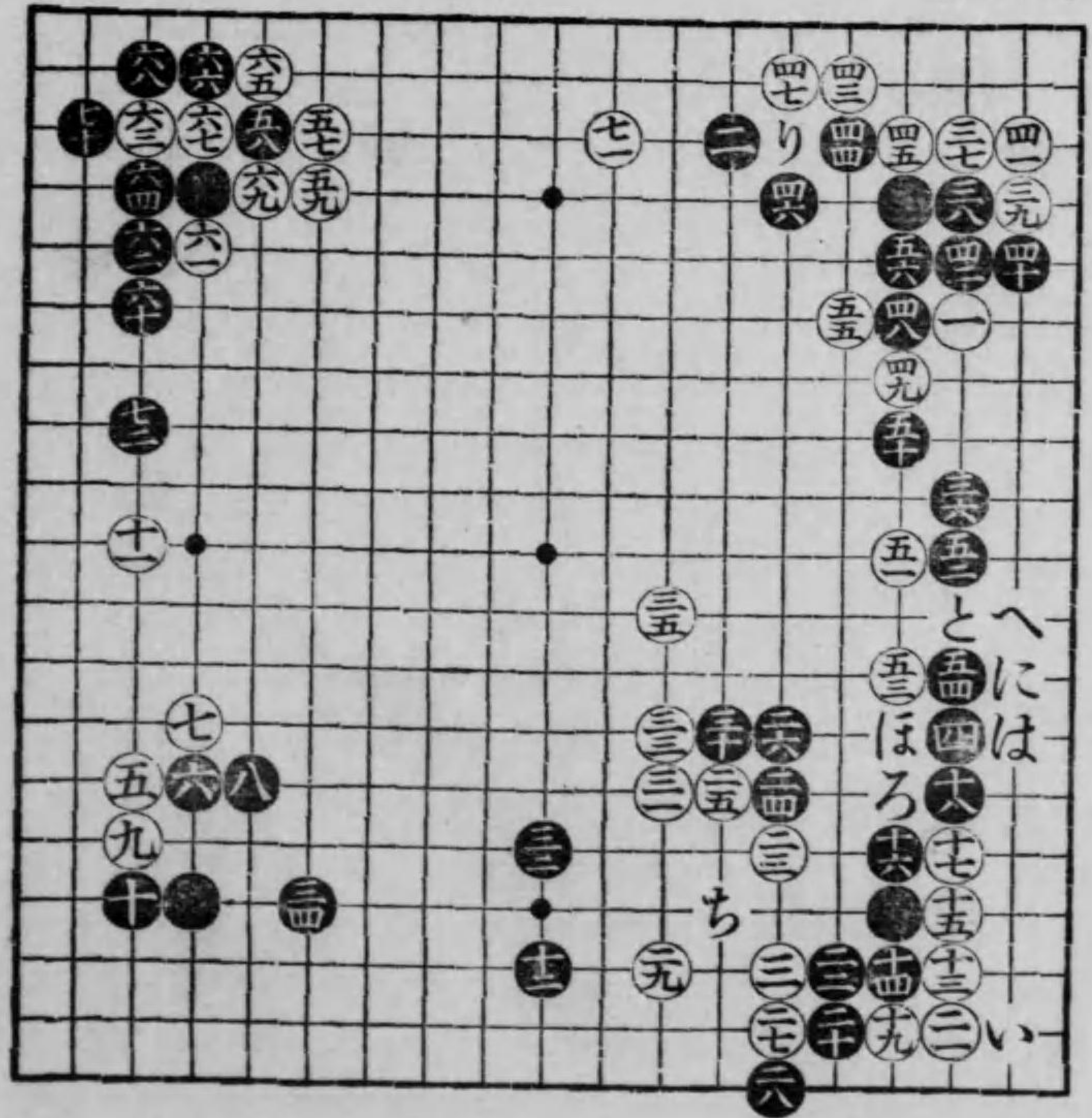
(十一劫とる)
 (十四同)

局次



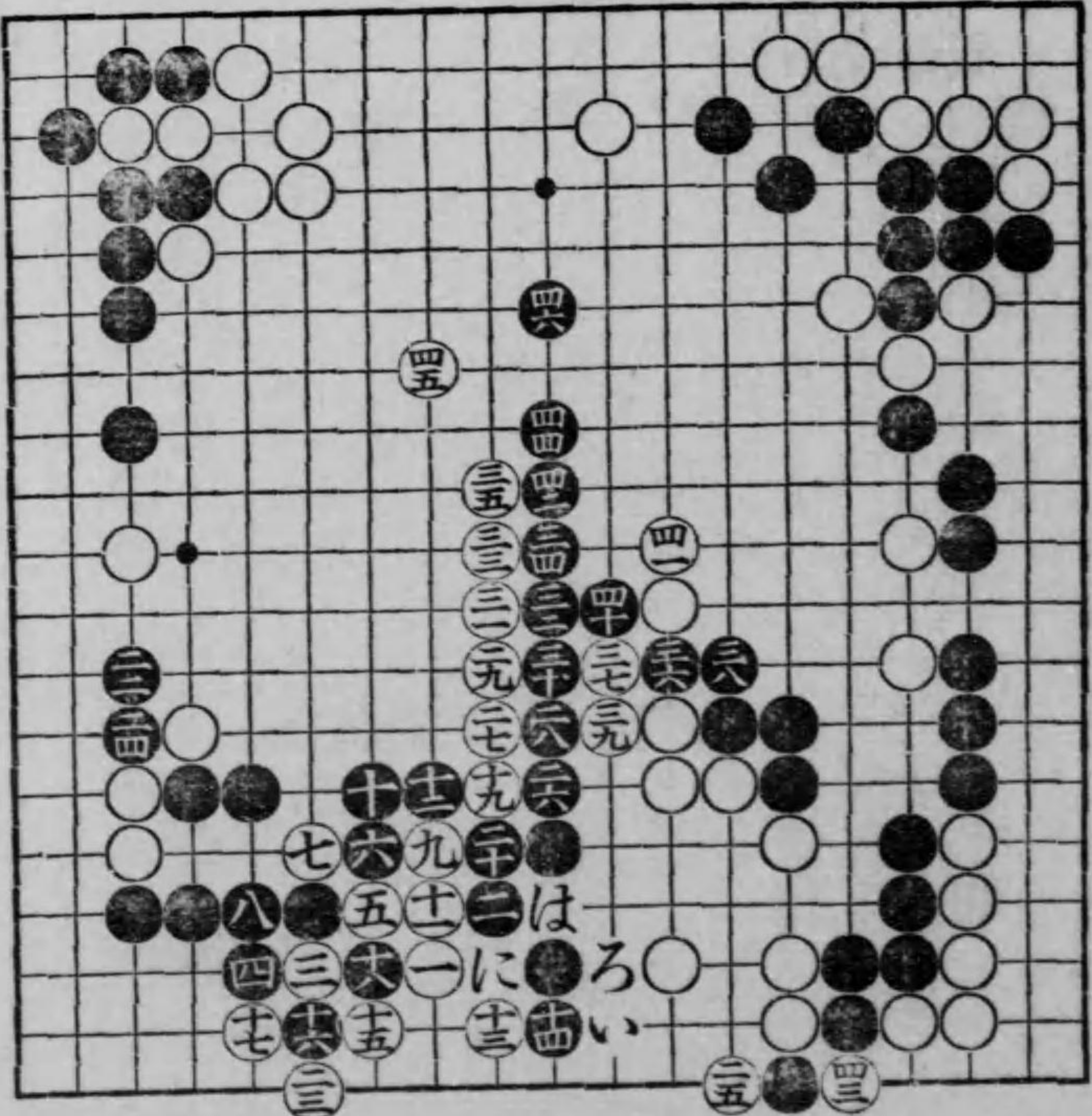
(第三局) 黒十六の手で二一の
 點に刎ね白(い)黒十九白十七黒
 十六白十八黒(ろ)白(は)黒(に)
 白五四黒(は)白(へ)黒五三白
 (と)の時黒(ち)と打つ手段もあ
 るが譜の如く打つのが普通であ
 る。
 黒三十は却て敵の陣形を整へし
 むる嫌ひがある。
 單に三四の點に締つて居るが良
 い。
 黒四六は卑屈である。普通の如
 く(り)と棒粘さすべきである。

局三第



(同次局) 黒二は九と帽子に冠
 せ白十四と頂けなば黒(い)白(ろ)
 黒十三白(は)黒(に)白二黒十一
 で仔細はない。
 白二五は無理である。黒から二
 六以下四六と飛ばると果結とな
 つては土臺問題にならぬ。
 (黒中押勝)
 (二劫とる)

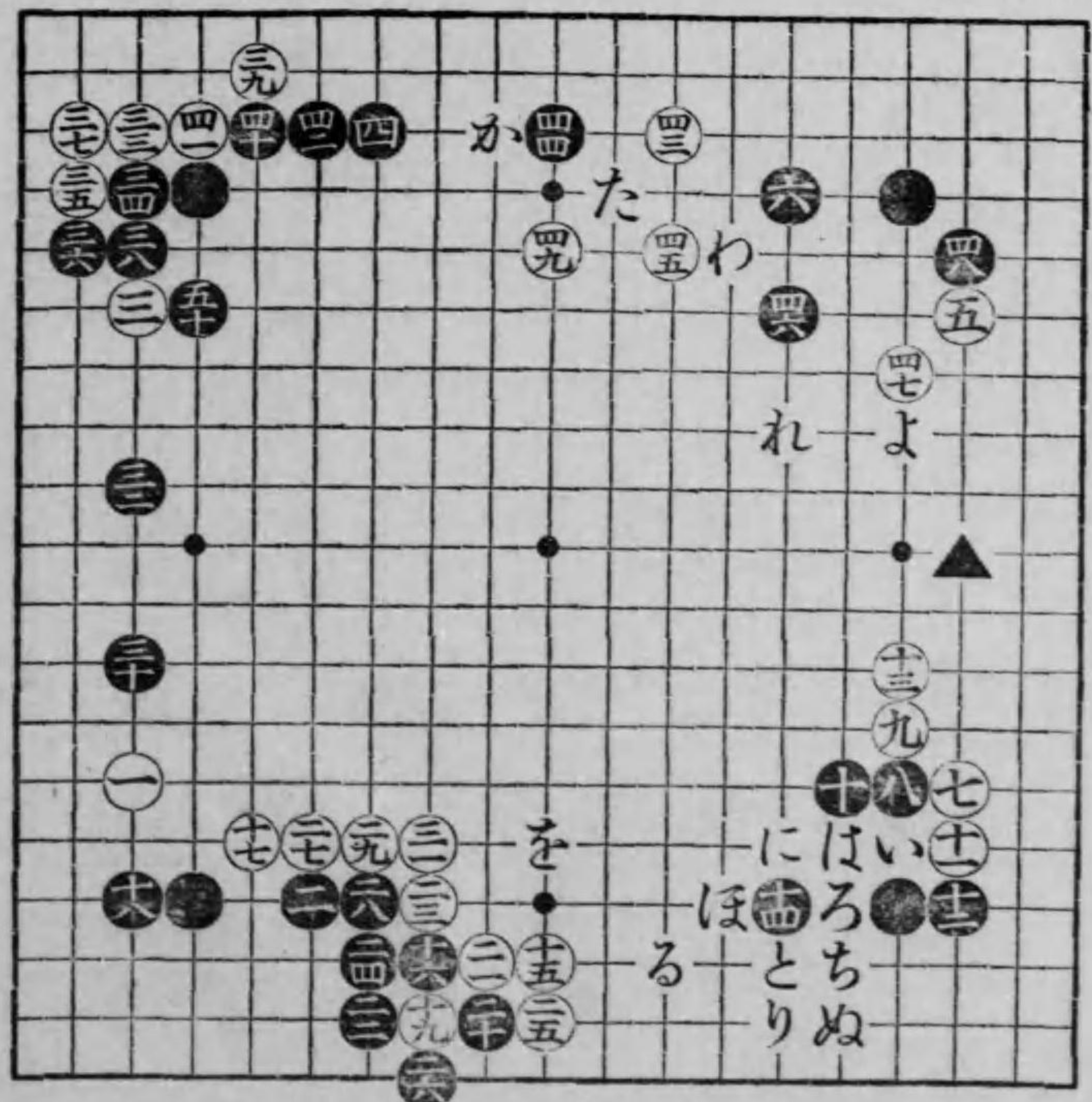
局次



(第四局) 黒十四は左下隅を高く二と布陣して在るから其釣合を取つて十五の點に拓くを定法とするのである。

此時白(い)と突出せば黒(ろ)白(は)黒十四白(に)黒(ほ)と行びるが良い。若し又白(い)と突出さずして(と)の點に打込まば黒(ち)と尖み頂け白十四へ立つた時黒(ろ)と粘いで仔細はない。猶、黒(ち)と尖み頂けた時白十四へ立たずして(ほ)と尖まば黒十四白(り)黒(ぬ)白(る)と掛粘いだ時黒(を)と立つが良い。白十五は兩隅に餘り響かぬから黒は十六の手で▲印に打込んで白の根據地を蹂躪すべきである

局四第



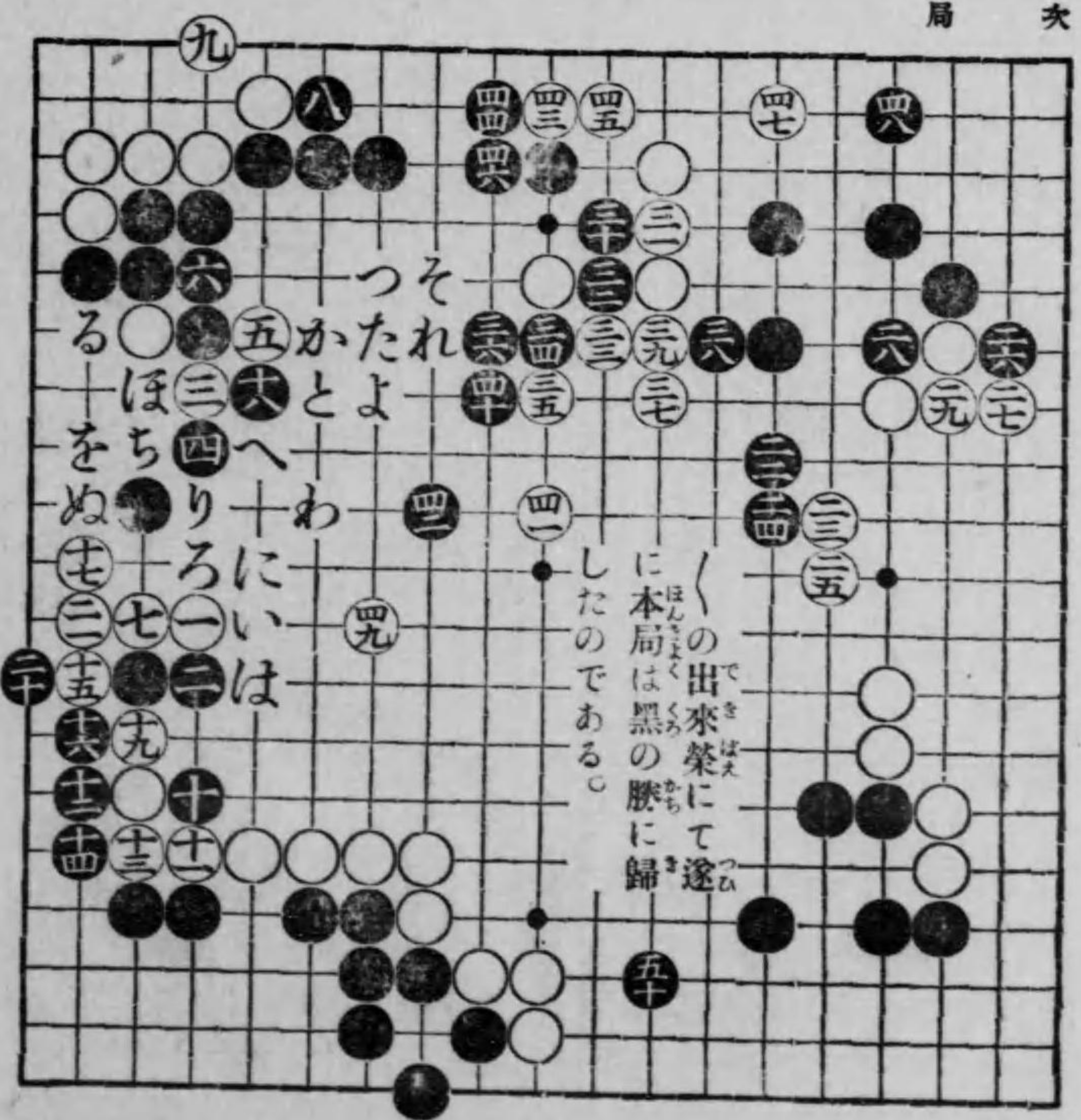
黒二六の手で二七の點に頂け出すべきなるに此く二六と小利を食りたる爲め白から二七二九と封鎖されたのは黒の大不利である。黒四四は此場合甚だ面白くない。先づ(わ)と尖んで白の應手を聞くべきである。白(か)と拓かば黒▲印に打込み白(か)と拓かずして(よ)と圍へば黒(た)と浴せ掛けて酷しく封じ込むが良い。而して白が活を打つた時黒(れ)と打つて中原方面に一大模様を策すべきである。

(同次局) 黒十は臆病である。此手で十五の點に下り白二一に約へた時黒(い)と勿ね白(ろ)と曲つた時黒(は)と粘ぎ白(に)に押出した時黒十の點に連絡を計るべきである。

黒十八も亦弱虫である。此手で二十の點に勿ね白二一に粘いだ時黒十九と粘いで仔細はない。此時白(は)と粘ぎも黒十八白(へ)黒(と)白(ち)黒(り)白(ぬ)黒(る)白(を)黒(わ)白(か)黒(よ)白(た)黒(れ)白(そ)の時黒(つ)と切る筋がある。

黒三八の覗きは打たぬ方がましである。黒が四十に押した時白に四一と一足先へ飛出されては黒の不利である。

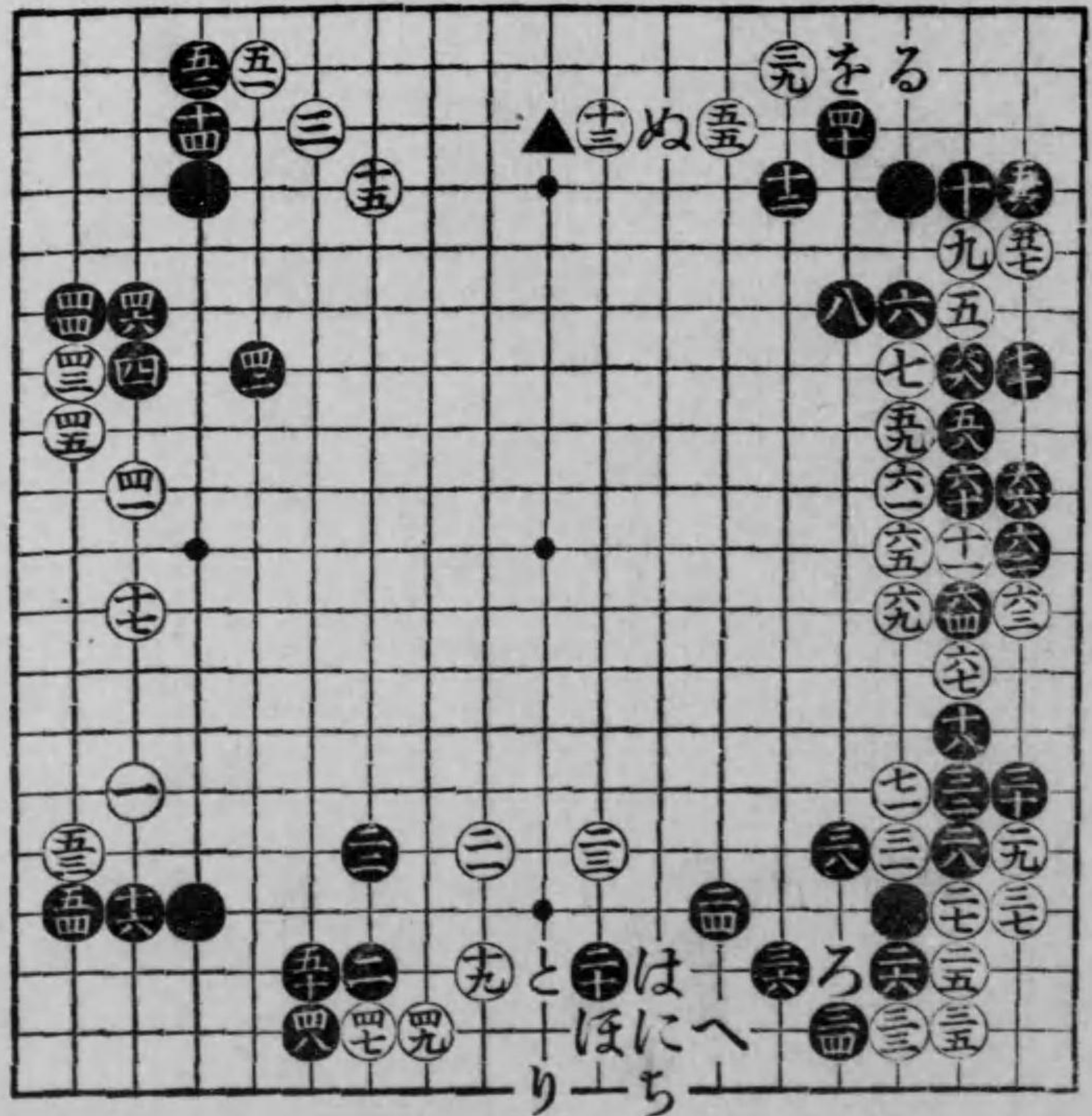
然るに黒四二以下五十までナカ



局五第

(第五局) 凡て著子は敵にも響き自己の護りにもなる手を擇まなければならぬ。此點に於て黒十二は少し緩い嫌ひがある。酷しく▲印に詰めて白三を攻めつゝ右方面に模様を張るべきである。

黒二四は普通ではあるが此場合甚だ面白くない。何故なれば次に白から二五と打込まれて黒三六となつた結果此の一子が無駄となつて遊んで仕舞ふからである。此手を以て(ろ)の點に尖んで隅地を護る方が利益である。假りに黒(ろ)と尖んだとして白(は)と來ても黒(に)と勿ねて連絡することが出來又白(に)と來

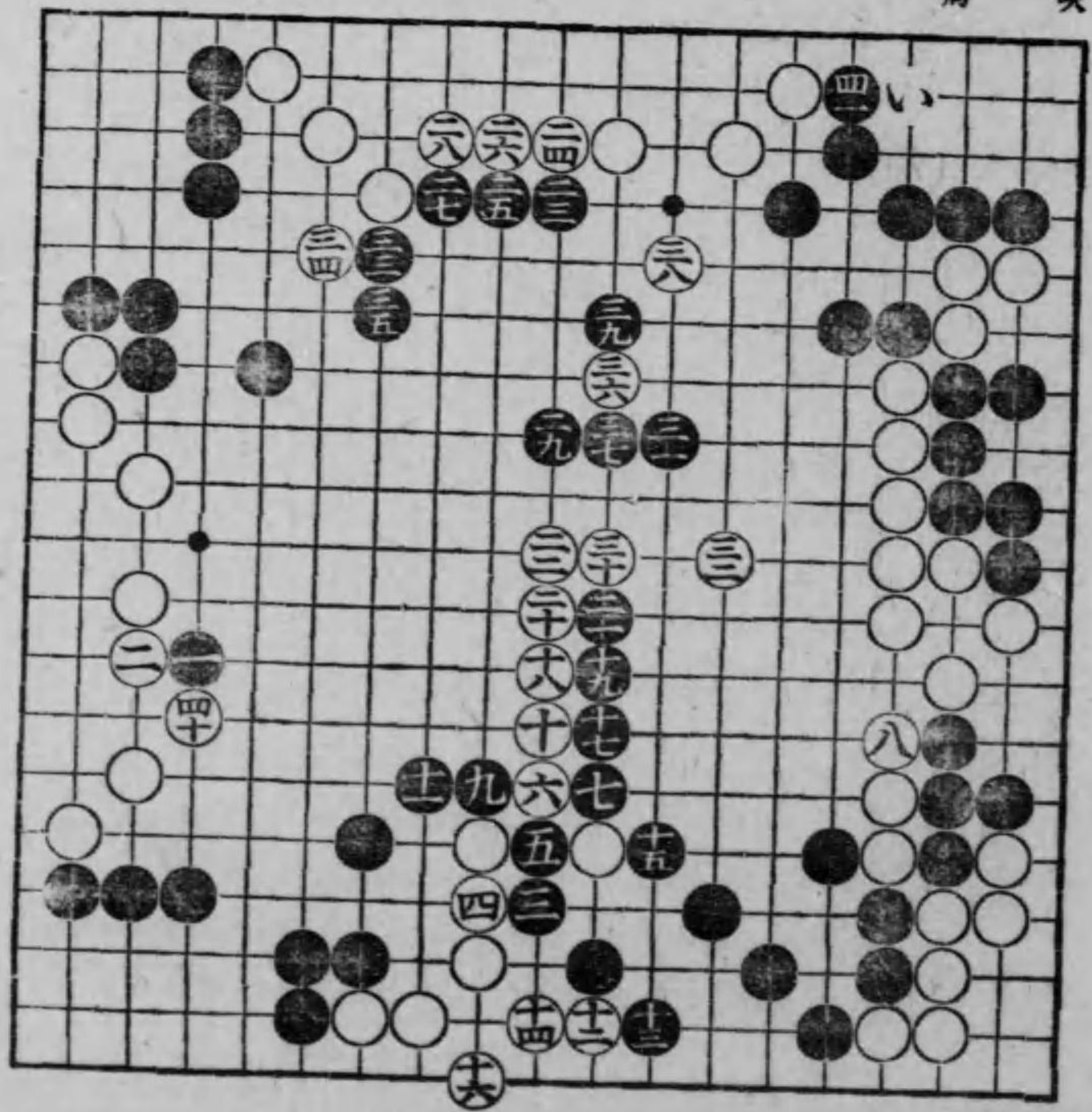


ても黒(は)白(は)黒(へ)白(と)黒(ち)白(り)となつて黒が先着權を占めることになるから尙更好い
 黒四十は白十三が一步(ぬ)の點に接近せる場合の應手で譜の如く大斜走に掛つて居る場合は白三九
 の走込みに對して黒(る)と備へるが普通である。
 其理は後ちに白から五五に尖まれた時黒(を)と約へて(る)の飛込みを防がねばならぬ。即ち白に五
 五の尖みを先手で利せらるゝことになるからである。
 黒五八の打込みは時機尙早である。先づ下邊十九以下の弱敵を攻めつゝ右側十八以下の缺陷を補ひ
 たる上のことである。黒七十と五以下の三子を捕へることは出来ても白に七一に行ひられて十八以
 下の四子を捕へられては格別黒の儲けにはならぬ。

(同次局) 黒二五は二七に頂け
 白二八の時二六に割込む方が利
 益である。
 白三二は無用の着手である。此
 手を以て(い)若しくは四十の點
 に打つて居れば細碁は細碁だが
 恐らく白の勝に歸したであらう

(黒五目勝)

局次

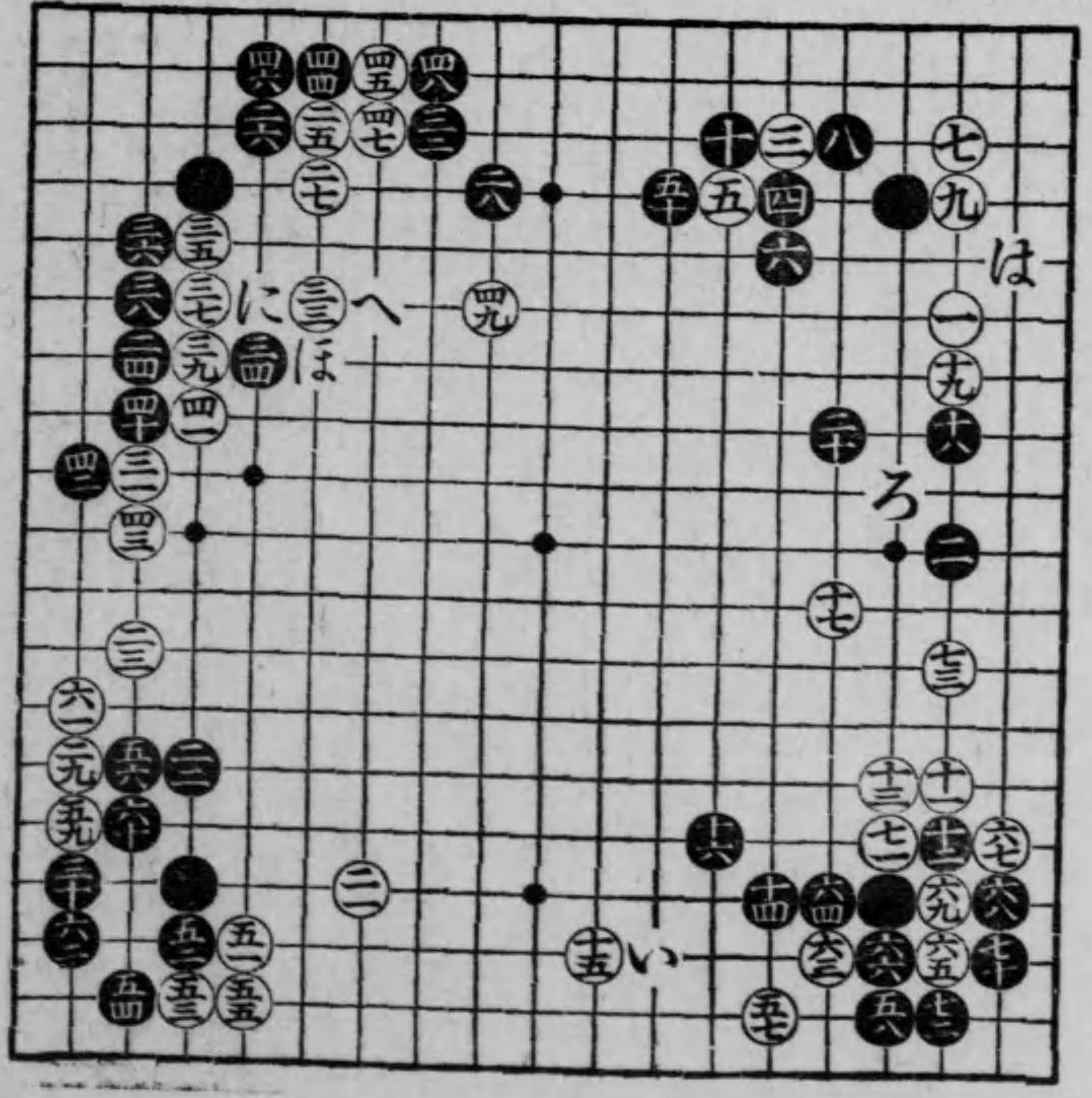


(第六局) 黒十六は白が十五の手で(い)と小斜走に掛つた場合に用ふる手段で譜の如く大斜走に掛つた場合は隅に少しも響かぬから寧ろ手を抜いて四三の大場を占むべき處である。

白十七は十一、十三の二子の凌ぎをなしつゝ(ろ)の掛けを狙つたのであるから黒十八へ拓いて(は)の覗きを狙ひ白十九に突當つて之を防いだ時黒二十へ飛出す手順となるのが普通である。

白三一に詰めた時黒三二に尖んだ趣向は此場合甚だ面白くない此手を以て(に)の點に兩斜走し白三三に頂けた時黒(は)と勿ね白(へ)と行んだ時黒四九の點に

局六第



單關するが良い。

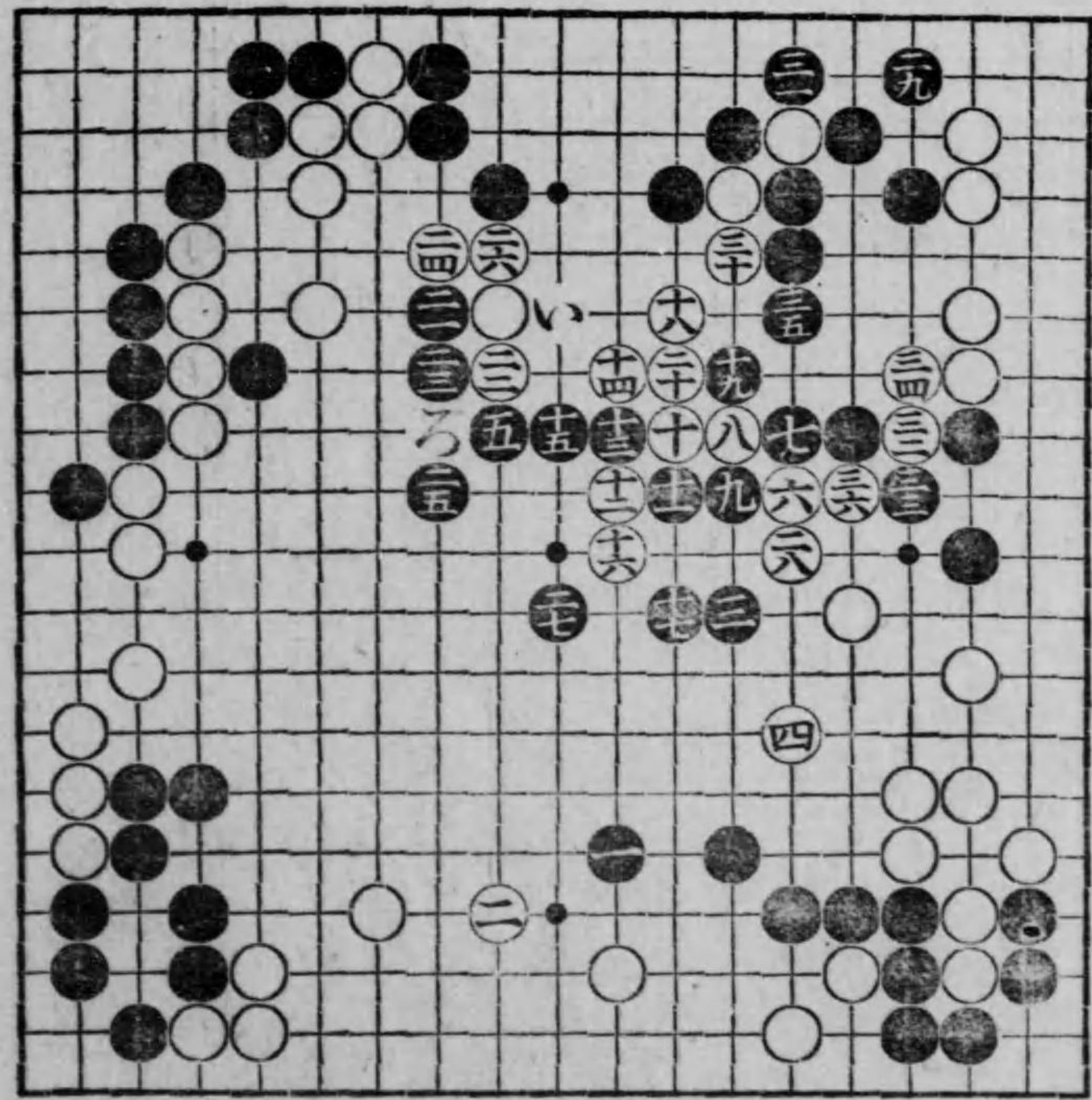
黒三四は三七に縮る外はない。白に三五以下四一に出切らるゝ結果となつては黒の大不利である。

黒四八は四九の點に單關して居る方が大きい。

白から五一以下七三まで着々實利を占められたのは初め黒が三二の閑手を下した崇りて茲に漸く黒の敗勢を露出したのは惜むべきである。

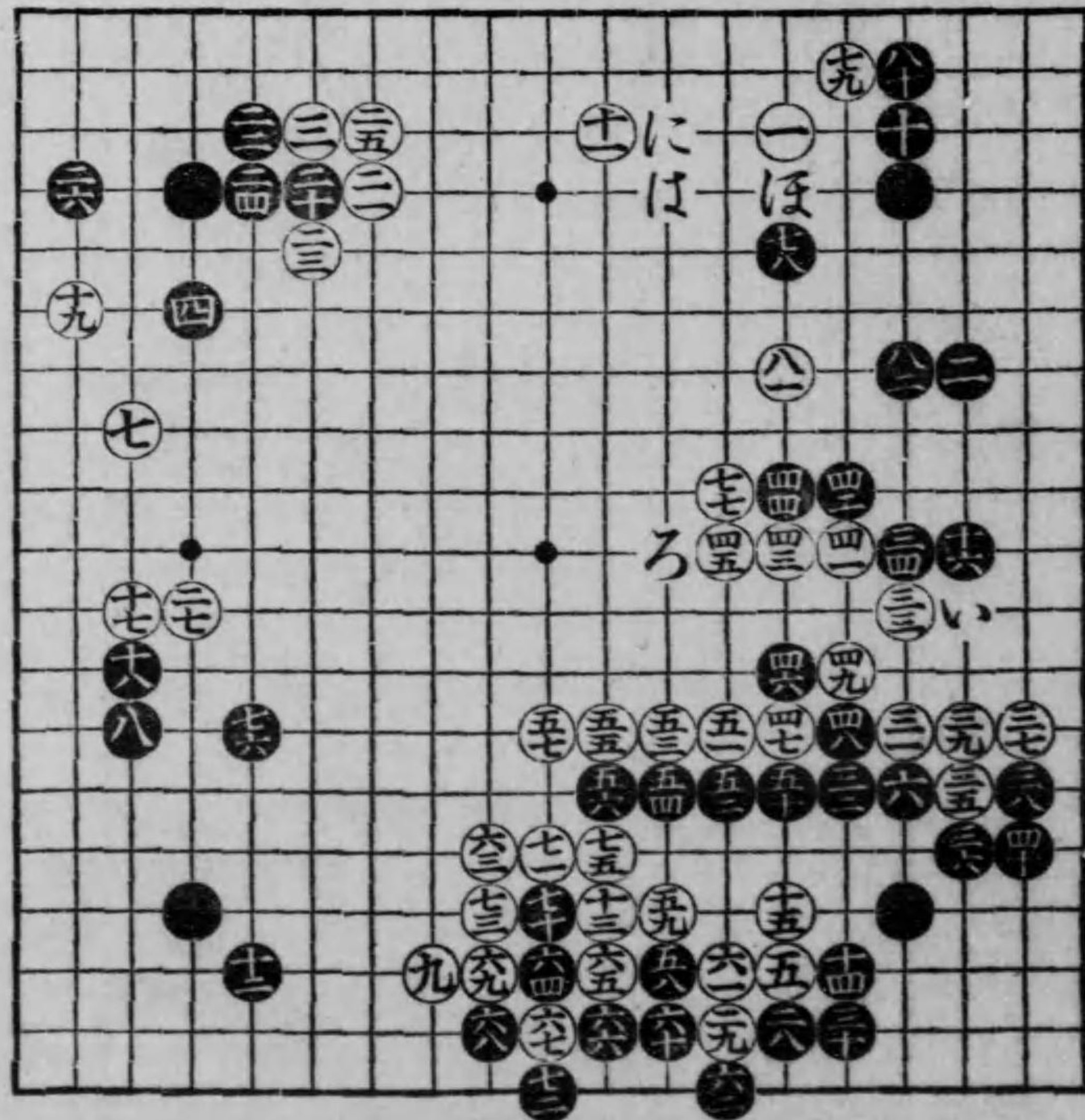
(同次局) 黒一より五までの趣向は賞識に値ひする。
 白十二は無理である。十三に行んで連絡を計る外はない。
 黒十三以下十九までの手段厳しくして良い。然るに白二十に粘いだ時黒二一と外から頂けたのは方角違ひである。
 此手を以て(い)と内側から頂けるに於ては八以下の一隊を捕虜とすることが出来るのである。
 白二四の手で(ろ)と切るが良い。白二八に引いた時黒三四の點に つながつて置けば黒の勝は歴然として争ふ餘地はなかつたのであるが斯く二九と偏境の利を貪りたる爲み白から三十以下三六と切られて右側の三子を捕へられたのは黒の敗因である(白勝)

局 次



(第七局) 黒十六は(い)の點に一步控へるのが普通で然すれば後ちに白から三一に頂けられる憂ひはなかつたのである。
 黒四六は極めて悪い。此手で尙七七の點に押し白(ろ)と行んだ時黒(は)と打ち白(に)と連絡した時黒(ほ)と頂けて大模様を策すべき機会なるに此迂濶に四六に覗きたる爲め白に四七、四九と切取られたのは黒の大不利と謂はなければならぬ。
 (七) 六七の所に粘ぐ。

局 七 第

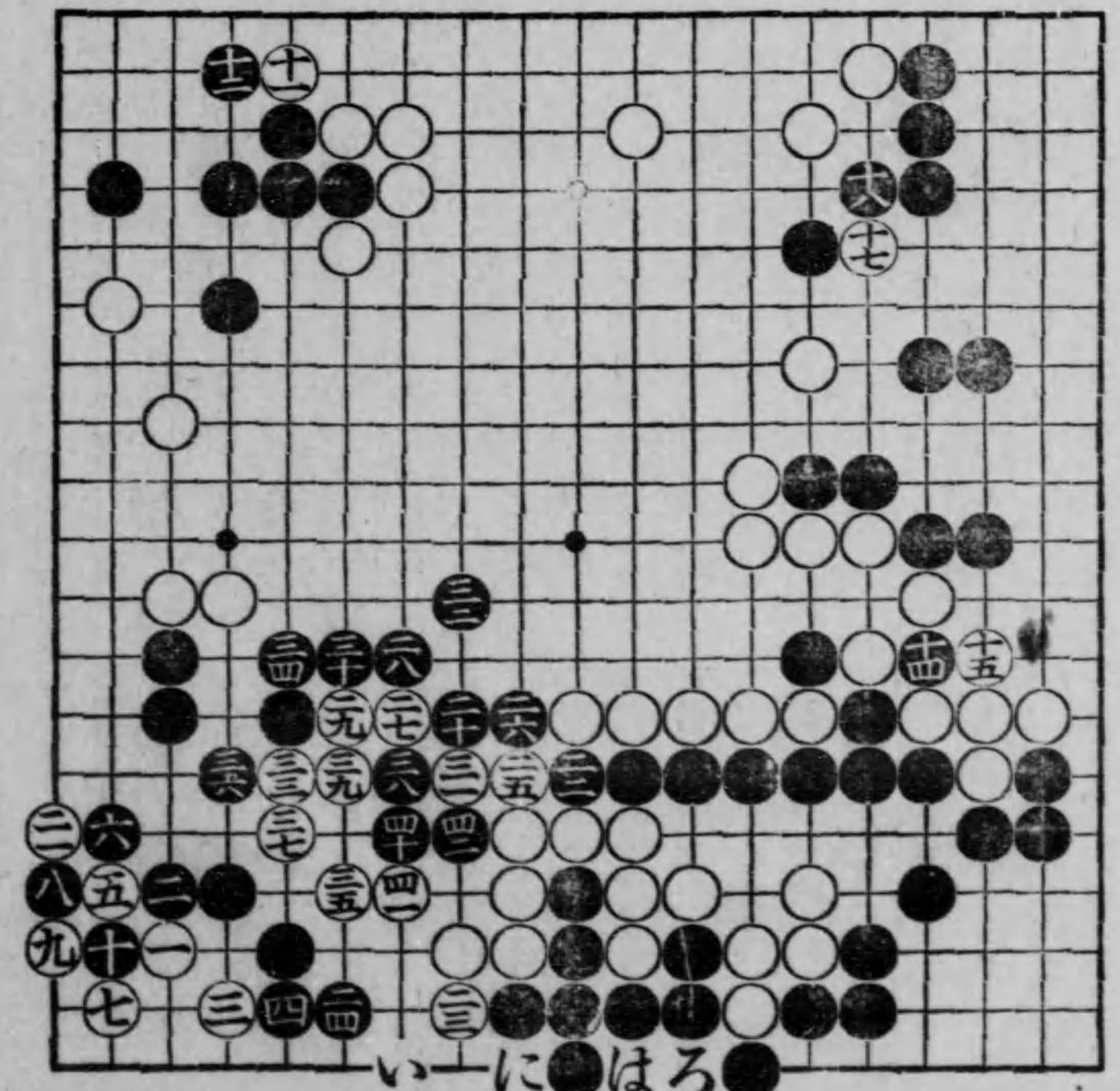


(同次局) 白三五は敗着である。単に三七へ行ひ黒三六に連絡した時白四一に生きて置かなければならぬ。

黒三八以下四二と曲つて二三以下の大軍を斃した腕前は儘に金鶏動章に値ひするのである。茲に初心者に婆心の注意を加へて置かねばならぬのは白二三に約へた時黒二四と曲つた意味であるが之は若し黒が手を抜くと白(い)と尖み黒二四に盤りを防いだ時白(ろ)と喰はし黒(は)と取つた時白(に)と投込んで劫にしやうと云ふ恐ろしい魂膽であるから黒は二四の手を等閑にする譯に行かないのである。

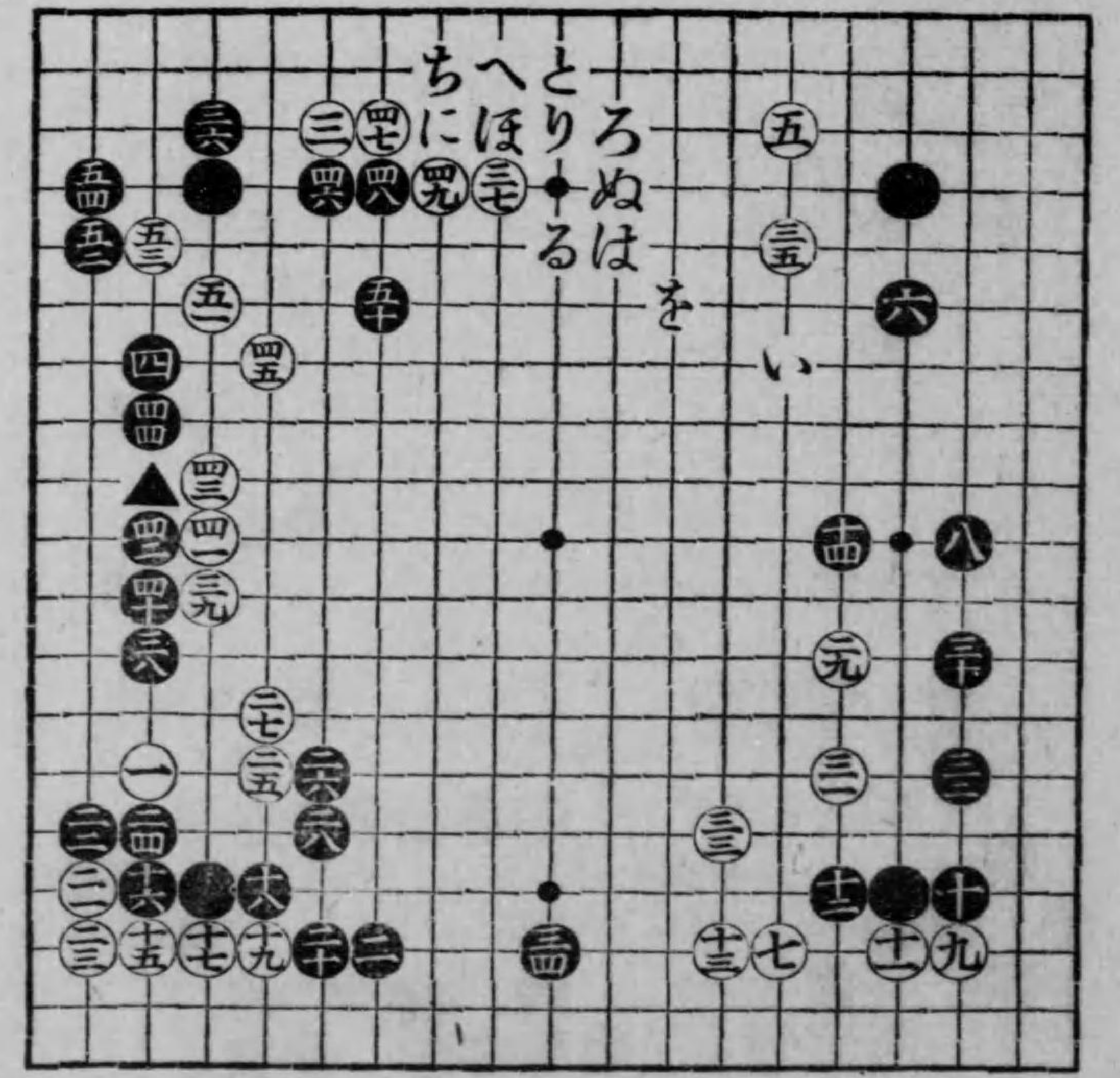
(十三)劫とる (十四)同 (十五)同 (黒中押勝)

局次



(第八局) 黒三八は急を要せぬ手である。何となれば此處は所謂裾開でよし白が▲印に詰めて來ても何程の地も出來ぬ。敵の地にもならぬ所へ打つても格別利益にはならぬのみならず白に三九以下四五と打たれて一以下の姿勢を整へられたのは却て草を叩いて蛇を出したことになるはせぬか。評者は三八の手で(い)と右側に模様を張りつ(ろ)の點に打込を狙ふべき處であると思ふのである。此際白▲印に詰めんか黒(ろ)と打込み白(は)と來れば黒(に)白(は)黒(へ)白(と)黒(ち)白(り)と粘いだ時黒四九と押し出すが良い。

局八第



若し又白(は)と冠せずして(り)と尖み頂けなば黒(ぬ)と立ち白(る)と尖まば黒(を)と打つが良い何れにしても黒から(ろ)の點に打込まれる結果は白の大不利に歸する外はない。故に白は尙一手(は)の邊に防備を施さなければならぬのである。

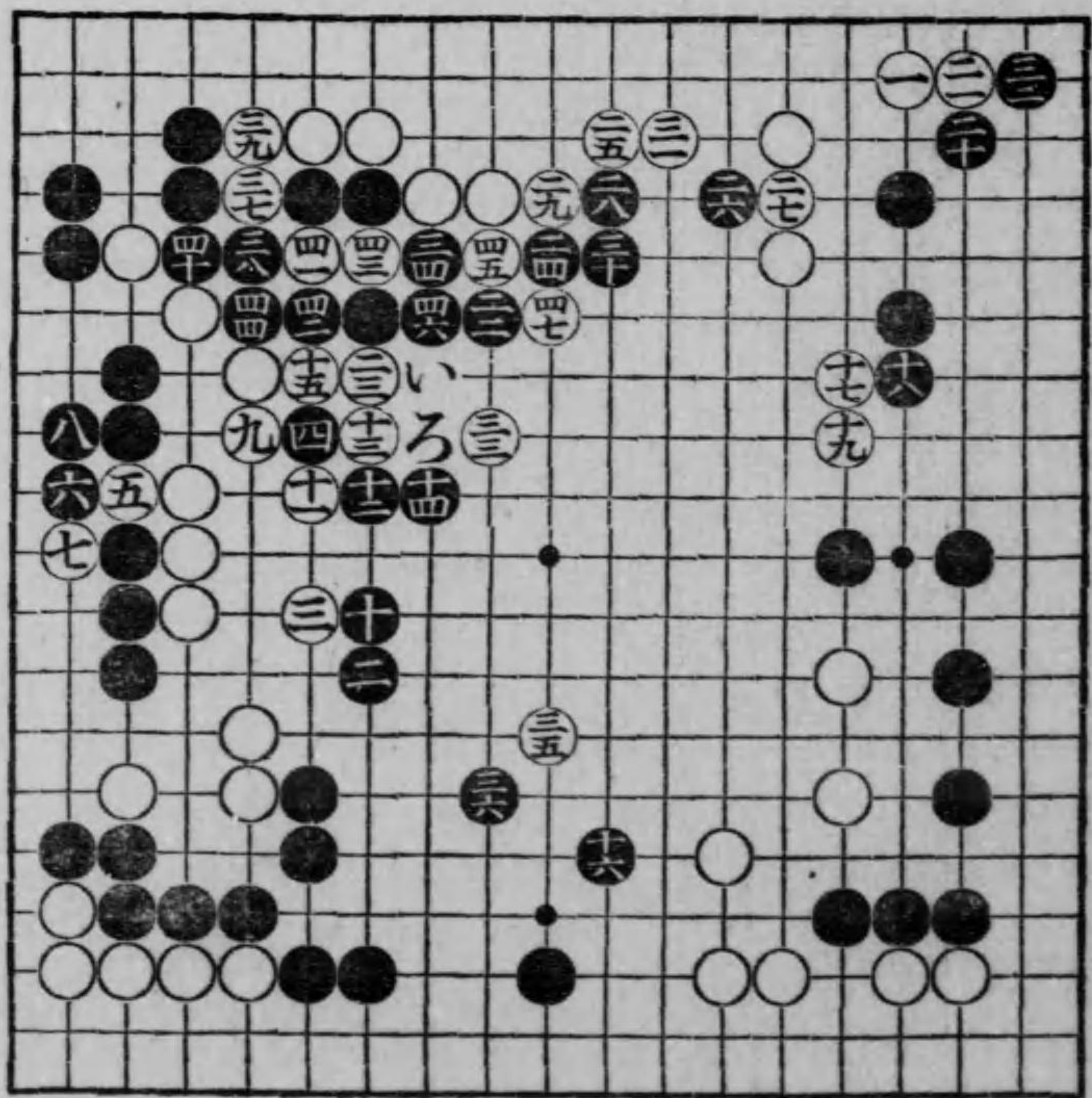
乃ち黒は鋒を轉じて四二の邊から一以下の一隊を攻めつゝ徐々に上下の陣形を整へるが良い、兎に角かうなつては白に勝算はない。

(同次局) 黒十六は二十の點に尖む方が利益である。

黒三四の手で(い)と覗き黒(ろ)と粘いだ時黒四二の點につながつて居れば儘に黒の勝であつたが此く三四と打ちたる爲め白に三七以下四七に切斷せらるゝ結果となつては黒に勝味はない。

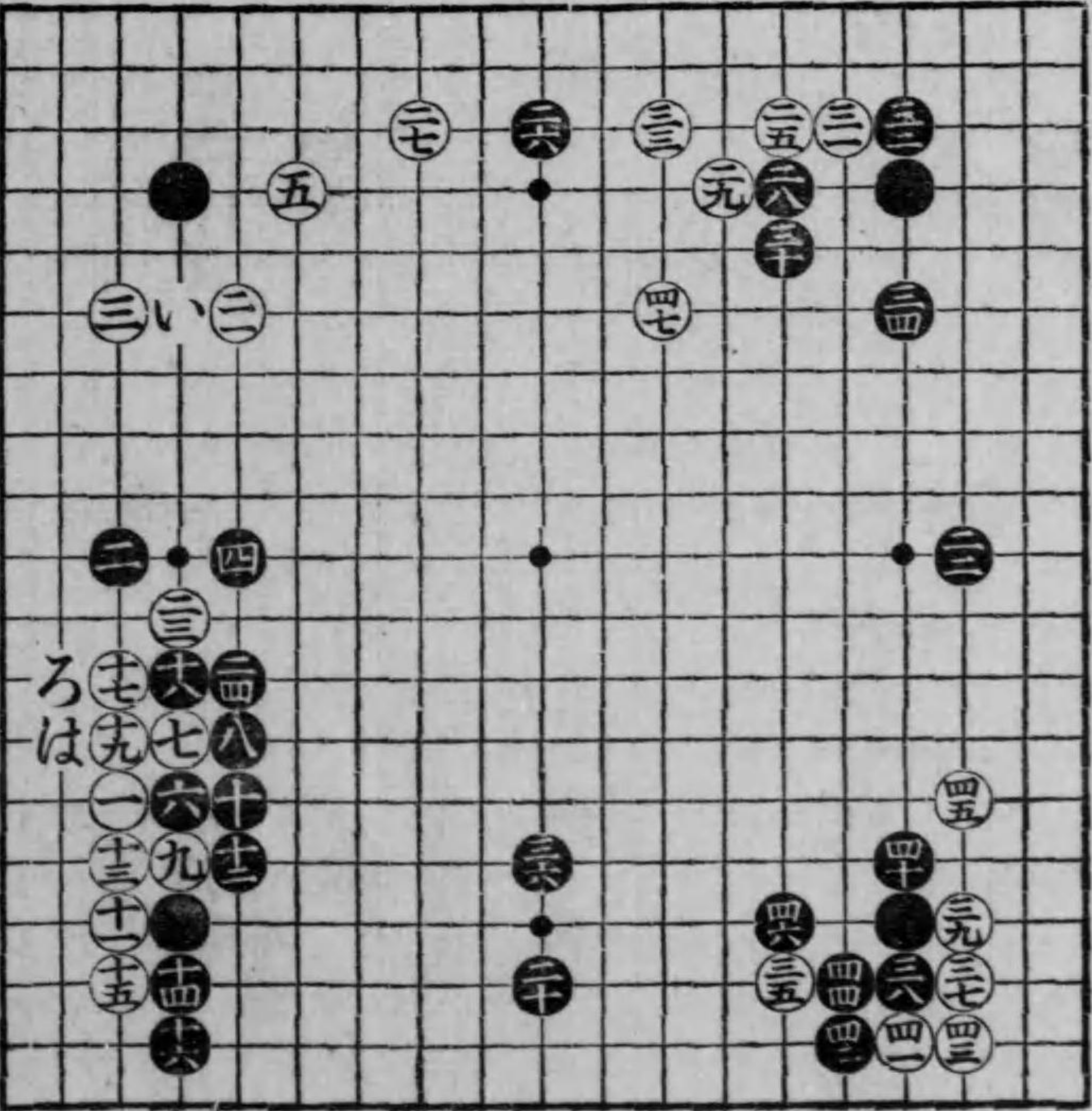
(白三目勝)

局次



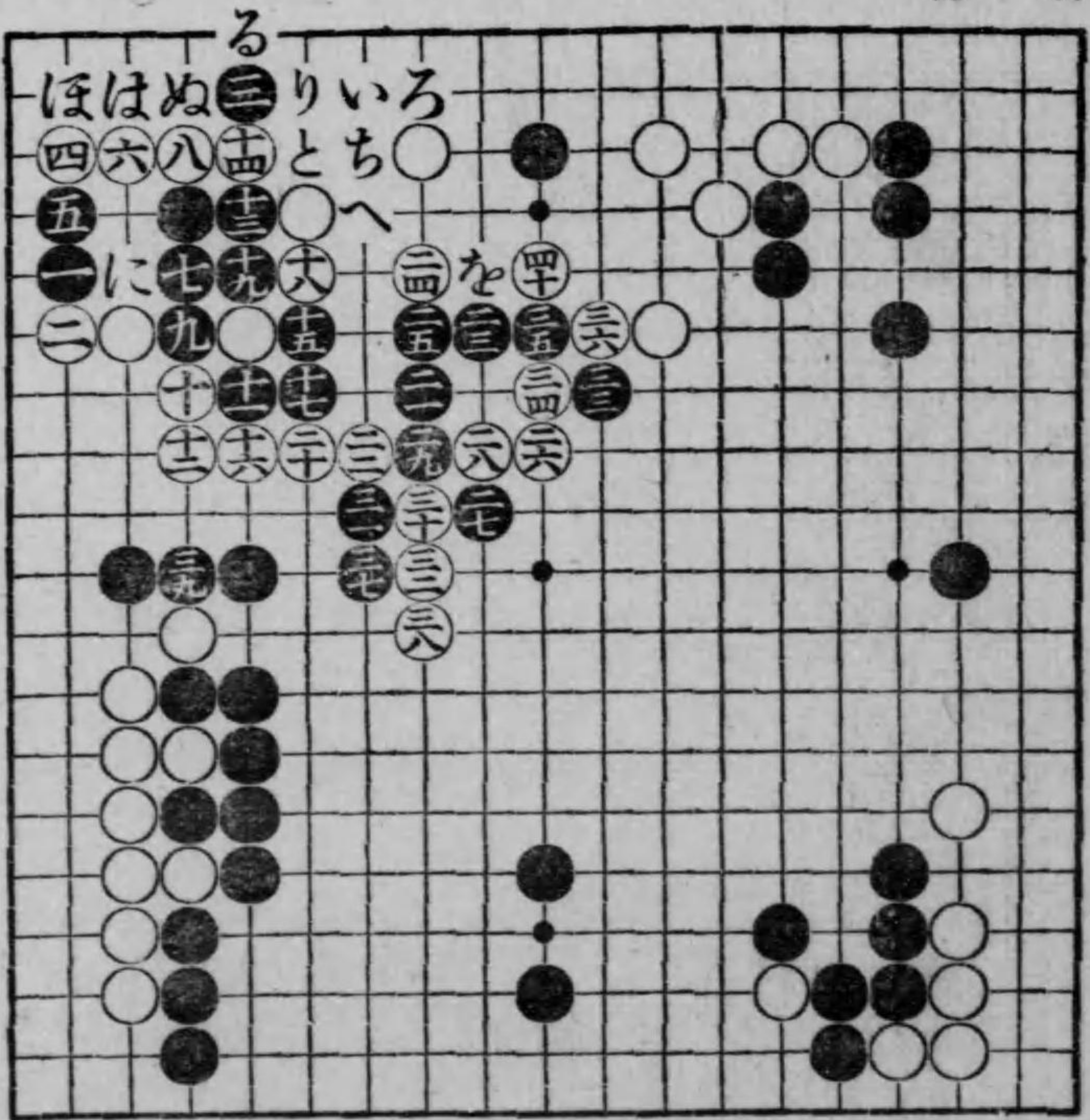
(第九局) 白三の時黒五と締るのが普通であるが若し然る時は白から四の點に冠せられて碁が大變面倒臭くなる。因て黒四と立つたのである。黒六は(い)と頂けて定石の規定せる手順に運んでも良いが此く六と頂け白七以下黒二十までの手順を運ぶも亦一策である。白十七の手で十八に行びると黒から(ろ)と走り込まれ白(は)と約へた時十七に視かれる筋があるからそれを嫌つて此く十七に掛粘いだのである。黒二以下四六までの着手は別に評言する程のこともない。

局九第



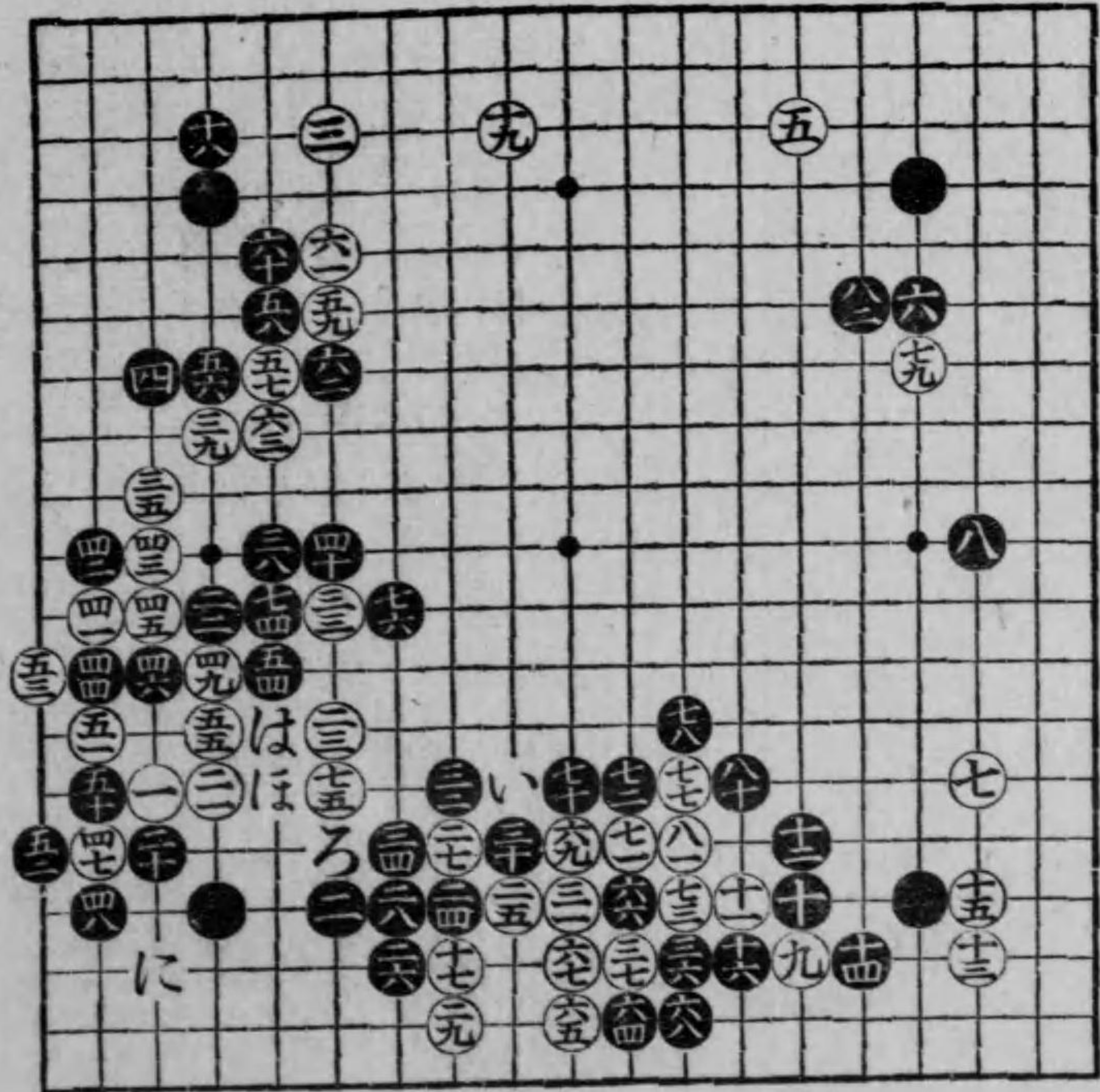
(同次局) 白四と打込んだ時黒五と突當つたのは良くない。此手で(い)と打ち黒(ろ)と約へた時黒(は)と打ち白六と行ひ黒八と約へ白(に)と打つた時黒(は)と約へて仔細はないのである。黒十三大敗の碁である此手を以て單に十五に約へ白十六に押し黒十四に約へ白十三に切り黒十九に取り白二に飛んだ時、黒(へ)白(と)黒(ち)白(り)黒(い)白(ぬ)黒十八白(る)の時黒(を)と打つて置けば十分に活があつたのである。然るに黒十三の一手を誤りたる爲め遂に白から十四以下四十に打たれて一以下の大軍を擒にせられたのは返へすべくも惜むべきである。

局次



(第十局) 黒三四は無用の着手である。此手で四六の點に尖んでゐたならば白は前途非常に打ち難き局面となるのであつた。假りに黒四六に尖んだとして白三四と行びるも黒七五白(一)黒(ろ)白六九に取つた時黒(は)と刎ねる筋がある。然るに此く三四と閑手を弄した爲め白から三五と打込まれて少なからぬ損失を招いたのは惜むべきである。黒四八は如何。初め黒が四二、四四、四六と打つたのは敵の勢力を兩断しやうと云ふ意に外ならぬ。然るに途中俄に其方針を一變して四八に約へ結局白に四四、四六の二子を無條件で與へ

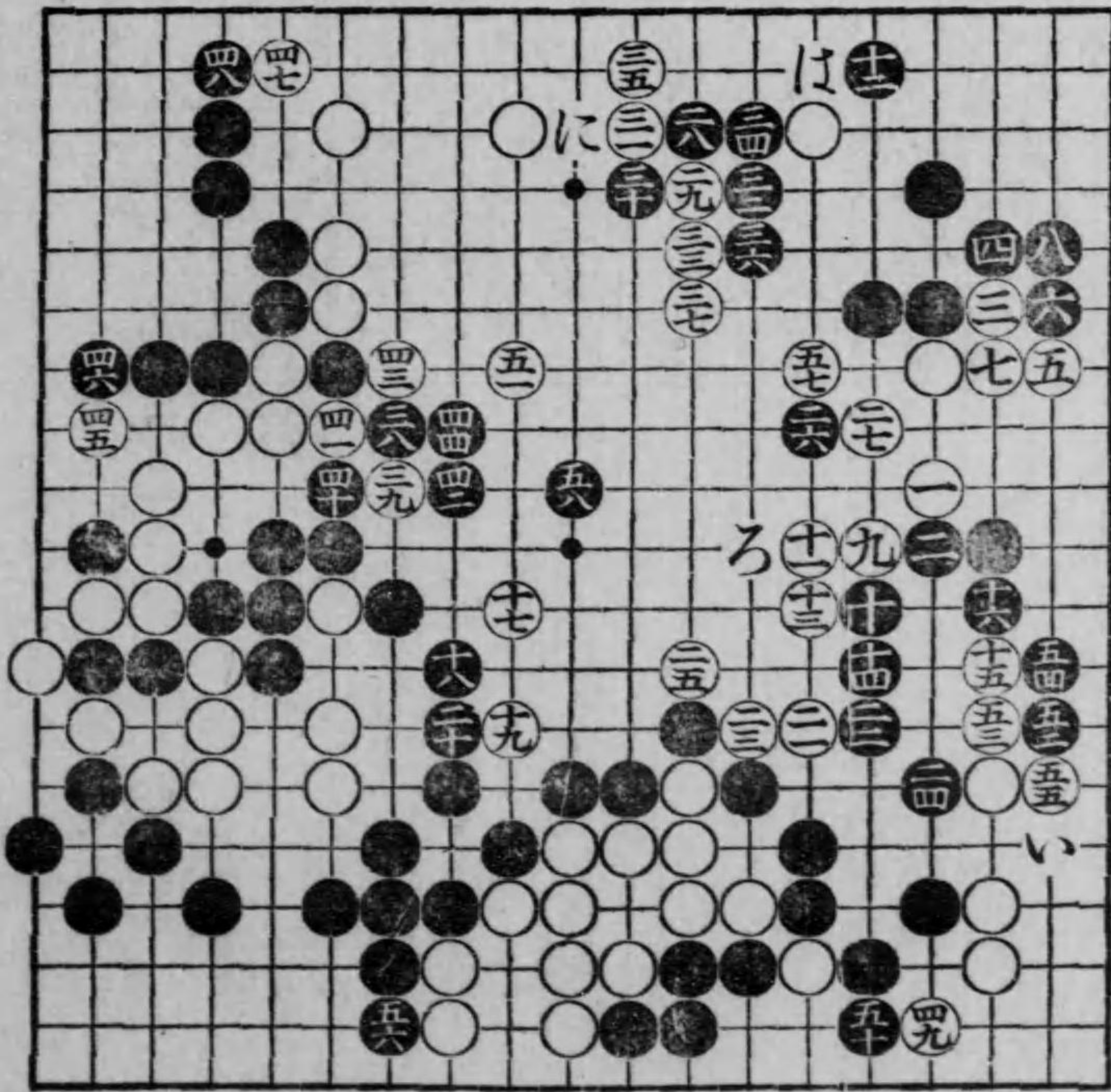
第十局



たのは抑も如何なる考へであるか。其意の有る處を解するに苦むのである。然らば如何に打つべきかと云ふに白四八の時黒は初め四二と頂け越した意志を繼いで五五の點に尖み頂け白(一)と打込んだ時黒(は)と遮断すべきで白は尙隅に一手を費さなければならぬから黒は其機會に左側三五以下の一隊と下邊十七以下の一隊とを揃み攻めつゝ中原方面に大模様を策するの趣向に出づべきである。黒七四は單に七六に刎ねて居る方が利益である。

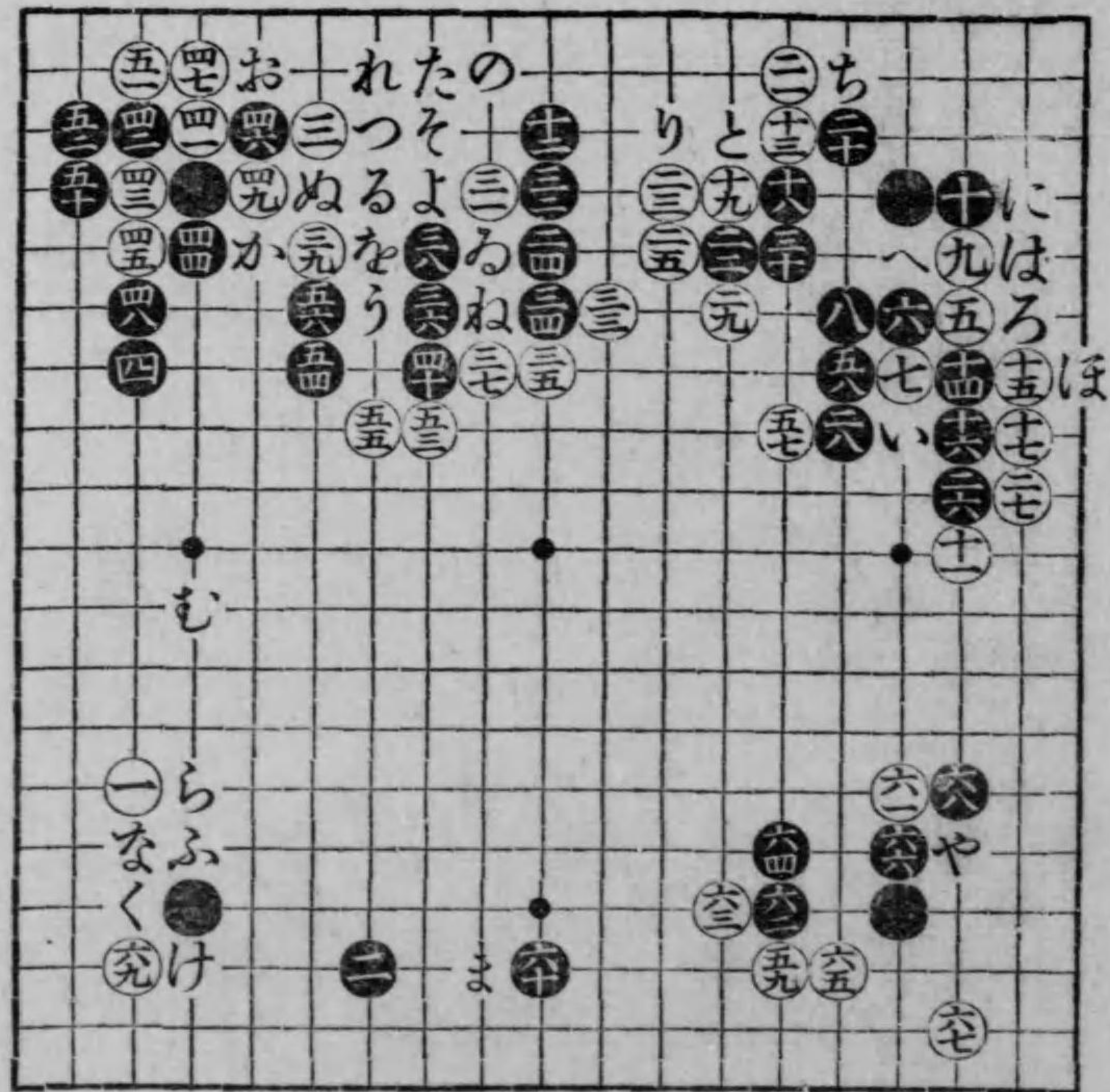
(同次局) 黒十二は先づ十五と拆いて(い)の覗きを狙ひ白十五に突當つて之を防いだ時黒尙十三に押し白(ろ)と行んだ時黒十二に縮るが手順である。譜の如く白から十三、十五の二手を先手で利かされた上十七、十九の急所を衝かるゝ手順となつては黒の損失は却々軽くないのである。白二一の手で(は)の點に約へて置けば白數子の勝を獲る處であつたが此く二一以下二五と小利を貪りたる爲め遂に黒から二八の好點に打たれて結局白十一目の負となつたのである白三十一に切り違へた時黒先づ三五と勿ね白(に)と粘いだ時黒三二、三四と打つ方が利益である。

局次



(第十一局) 白十三に打込んだ時黒十四に切つたのは白が若し十六に約へることもあらば黒十五と行び白十七に約へ黒五八に押し白(い)と粘ぎ黒(ろ)と行び白(は)と曲り黒(に)と約へ白に(は)と勿ねさせて先づ(へ)の出切りを防ぎ次で黒十八に頂け白十九へ勿ね上げた時黒(と)と切つて左側に利を占めやうと云ふ膽魂であつたが白から十五と下から受けられた爲め黒の謀は茲に根底から破壊されて仕舞つた次に黒が十八に頂けても白十九黒二十となる外はない。然らば白十三の打込に對して黒は如何に應手すべきかと云ふに單に十

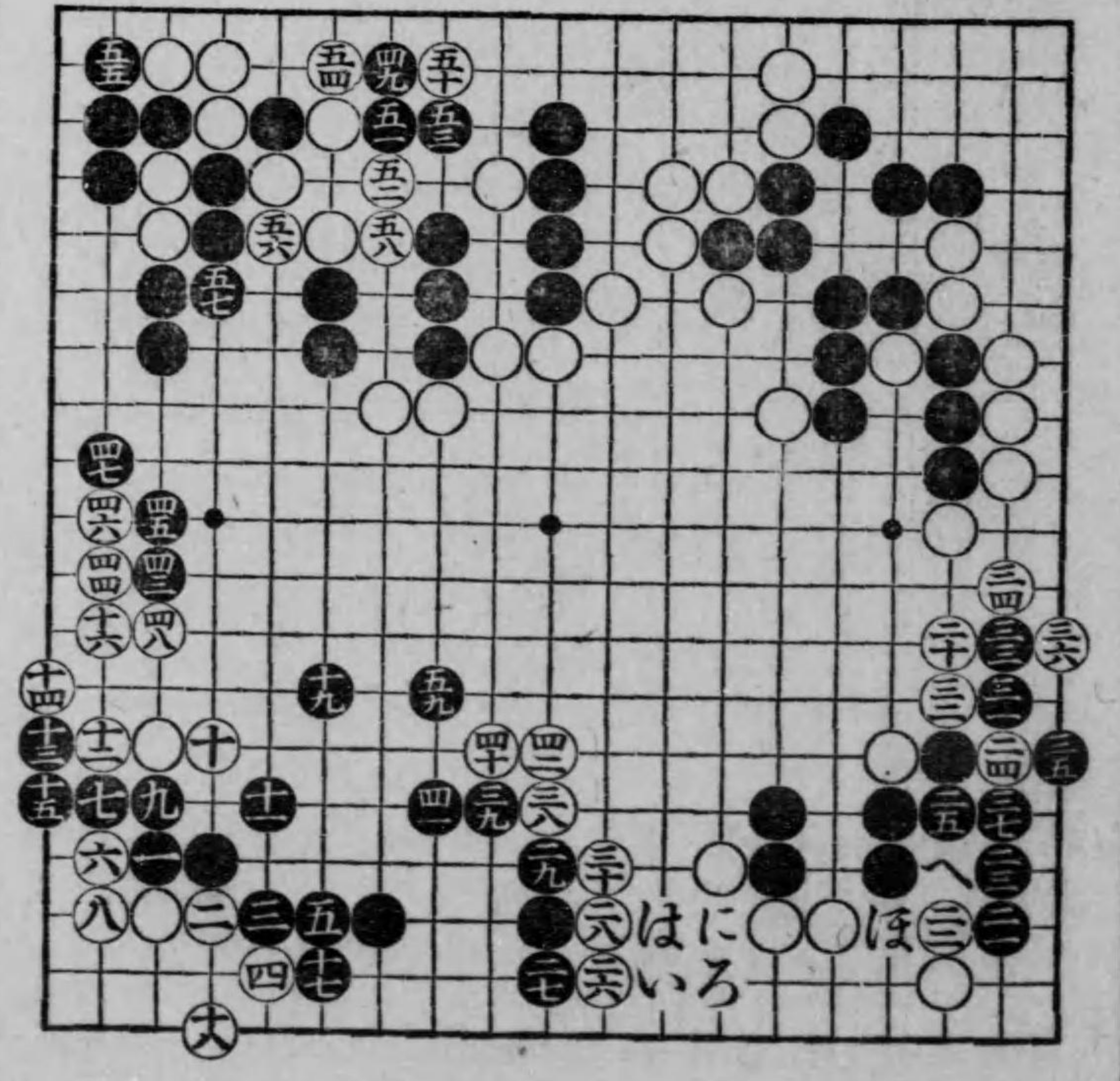
局一十第



八に頂け白十九に勿ね上げた時黒二十に約へ白二一へ下つた時黒二四に立つか或は(ち)と隅を固め
 白(り)と掛粘いだ時黒二四へ單關して居るが良い。黒二二と勿ねて白を二三へ行びさせて勢力を加
 へしめたのは良くない。單に二四へ飛んで居る方が利益である。黒三十は小事である。此手を以て
 (ぬ)と頂け白(る)と勿ね黒(を)と二段に勿ね白四九と粘り込み黒三九と粘り白四一と膨れ黒(か)と
 約へ白四六に粘り黒四三へ行び白四二と約へ黒五十一へ行び白(よ)と行び黒(た)と走り白(れ)と約へ
 黒(そ)と覗き白(つ)と粘り黒(ね)と尖み白五二と生きた時黒左下隅(な)と尖み頂け白(ら)と立つた
 時黒(む)と夾んで一(ら)の白を攻めつゝ大模様を策すべきである。若し又黒(を)と二段に勿ねた時
 白四九と勿ね込まずして三九の點を切らば黒四九と粘り白三八と勿ね黒(う)と行び白(そ)と掛粘り
 黒三六と約へ白四七へ斜走し黒五一に頂け白四一へ立ち黒四二と約へ白(れ)と眼を持ち黒(る)と當
 て白(よ)と粘り黒(の)と覗き白(た)と活きた時黒(な)と尖み頂けて前述の通りに運ぶが良い。
 然るに黒輕卒にも三十の點に粘りたる爲め白から三一以下三五三七と酷しく壓迫されたのは黒の大
 不利である。白四五は無理である。五一の點に勿ね黒五二へ行んだ時白(お)と掛粘り外はない。黒
 四八の手で(お)と約へ白五一へ曲つた時黒(ぬ)と勿ねむに於ては恐らく白は應手に苦まん。黒六十
 は敗着である。寧ろ(く)と隅を締る方が利益である。白から六一と兩掛りに打たれ結局黒六八と勿
 ねた時白から六九に打込まれる手順となつては最早挽回の途はない。黒六十の手で六五と尖み頂け
 白六二と立つた時黒六八若しくは(や)と堅固に構へるが普通である。此時白(ま)と拆かば黒(く)と
 締り白(ま)と拆かずして六九と打込まば黒(け)と約へ白(く)と盤り黒(ふ)と行び白(な)と粘いだ時
 黒六十の點に拆いて敵の根據を奪ふべきである。

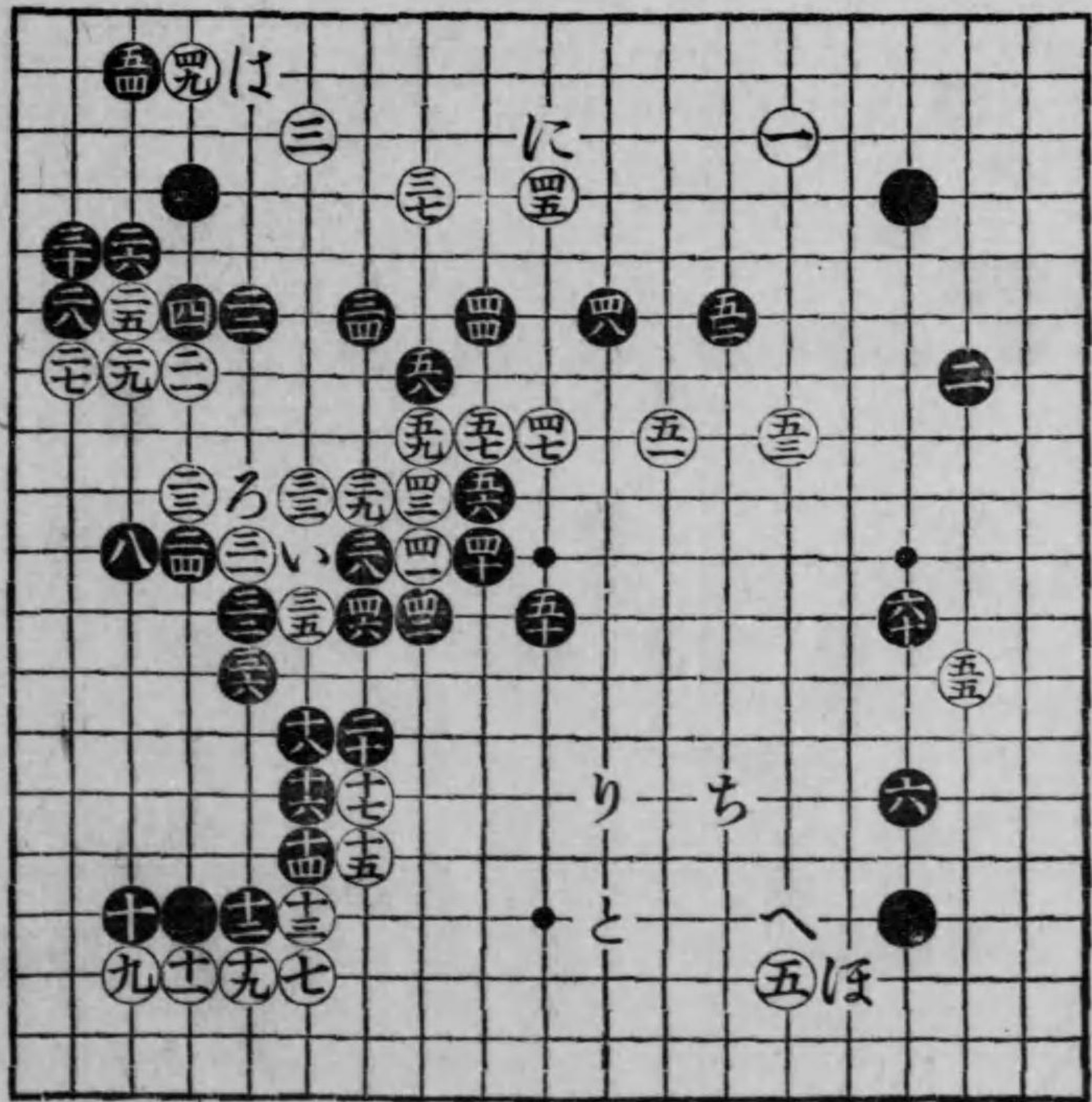
(同次局) 黒二一は甚だ宜しく
 ない。此手で三二の點に突當る
 が普通であるが強ひて隅を治ま
 らうと思へば先づ(い)と走り白
 (ろ)と約へ黒(は)と覗き白(に)
 と粘いだ時黒二二と尖み頂け白
 二二と勿ね黒二三と約へ白(ほ)
 と當てた時黒(へ)と粘いで居る
 が良い。本局は黒終局に至つて
 奮闘努力したが遂に四目の敗に
 終つたのは氣の毒である。

局次



(第十二局) 黒二十は三一の點に單關する方が確實である。黒三四は(い)と當て白(ろ)と粘いだ時三八の點に行ふべきである。黒三八は急激に過ぎる嫌ひがある。此手で(は)と實利を占めつゝ(に)の點の打込を狙ひ白四五の邊に圍ふた時黒右下隅(は)と尖み頂け白(へ)と立つた時黒と打ち白(ち)と飛んだ時黒(り)と立つて上下の白を弱み撃ちに攻むべき機會である。二一以下の戦備が未だ整つてゐないのに白五五と打つたのは無理である。黒六十は常には餘り好まぬ手であるが此場合は至極面白い。

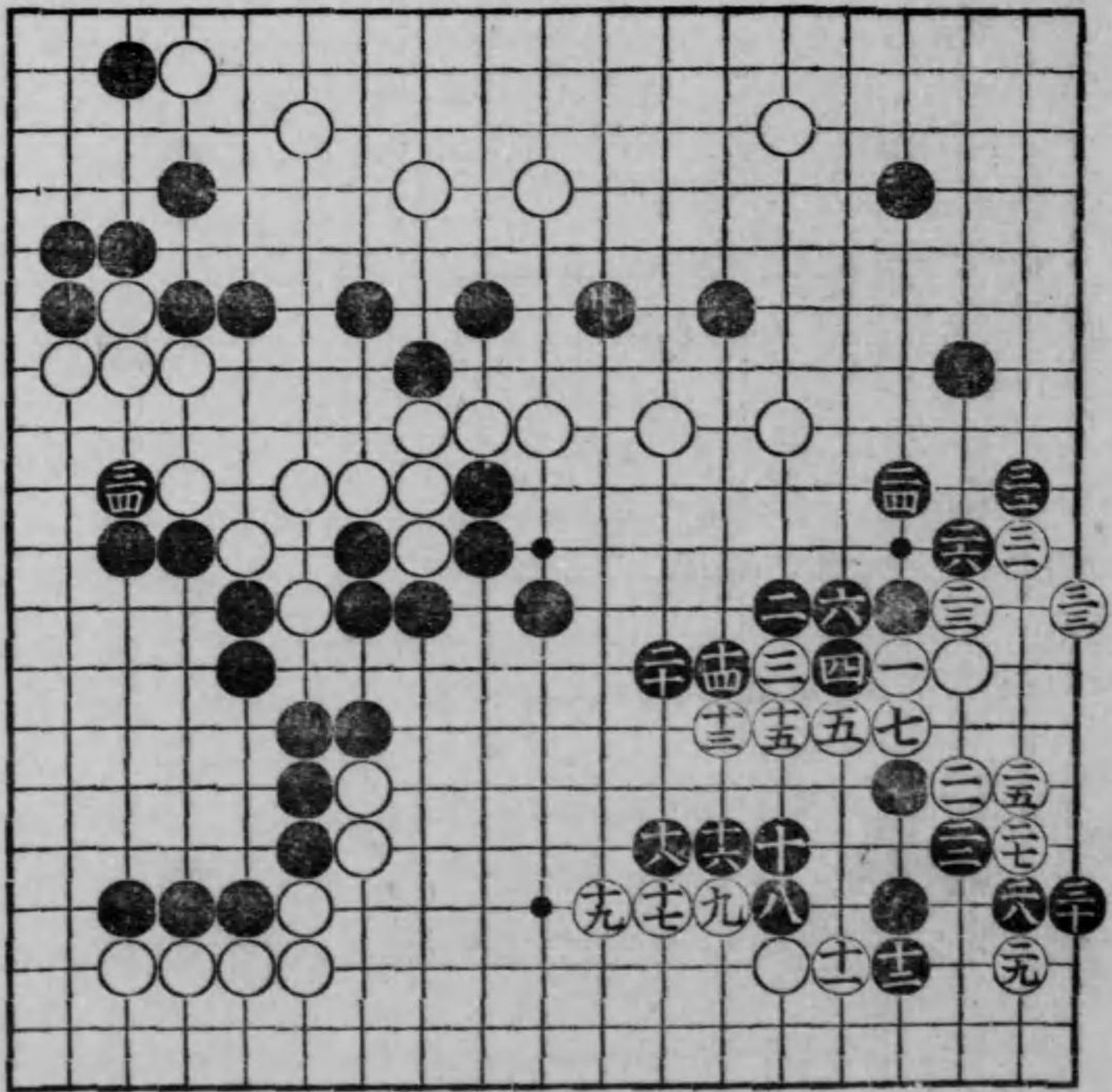
局二十第



(同次局) 白三の手で軽く二五の邊に飛んで活を計る外はないのである。然るに此く三と頂けたる爲め黒に四以下二十と行ひられて累を中央の大軍に及ぼしたのは白の大失策であると謂はなければならぬ。

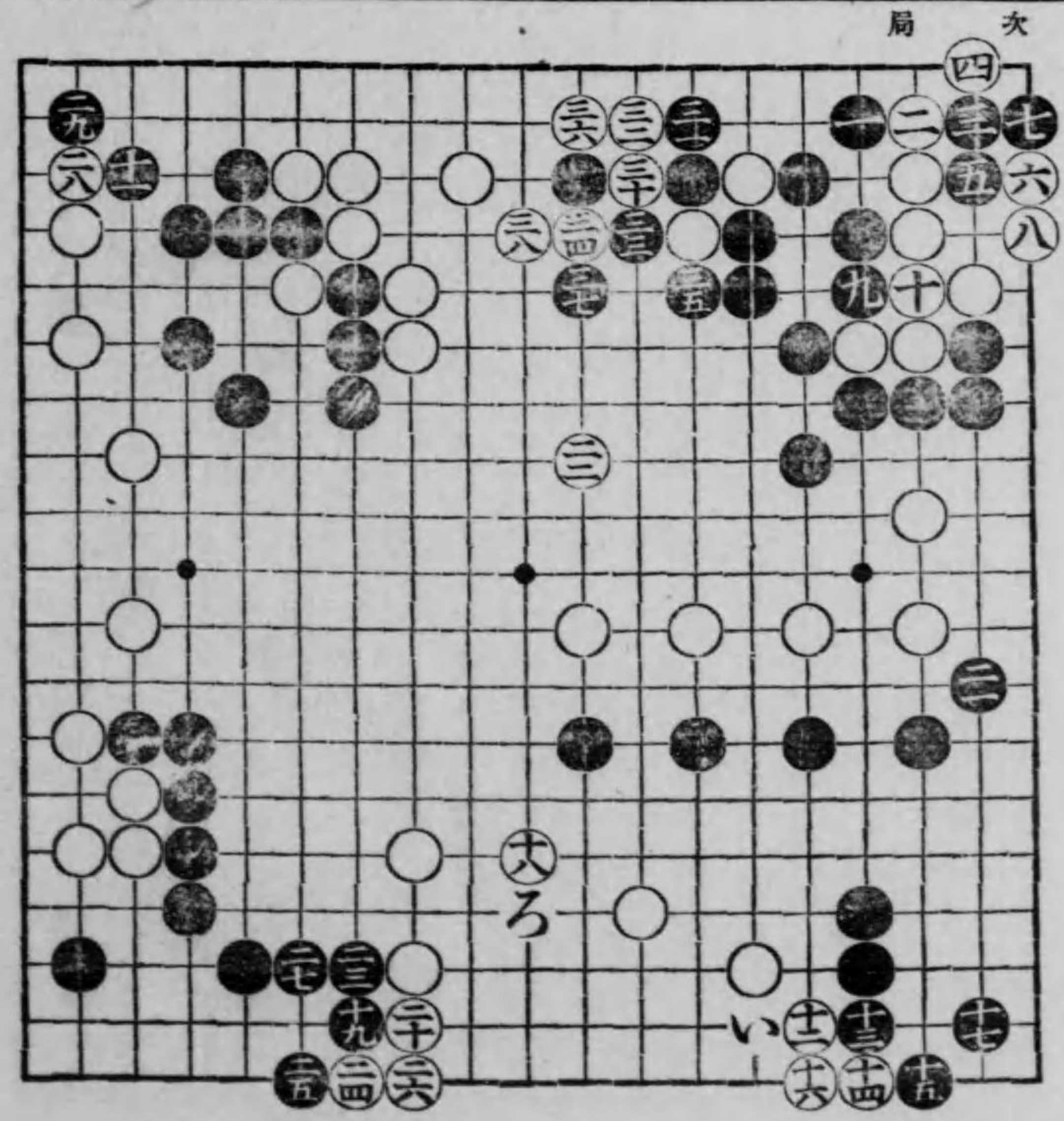
黒三四と敵の大軍を斃した手腕は儘に敬服に値ひるのである

局次



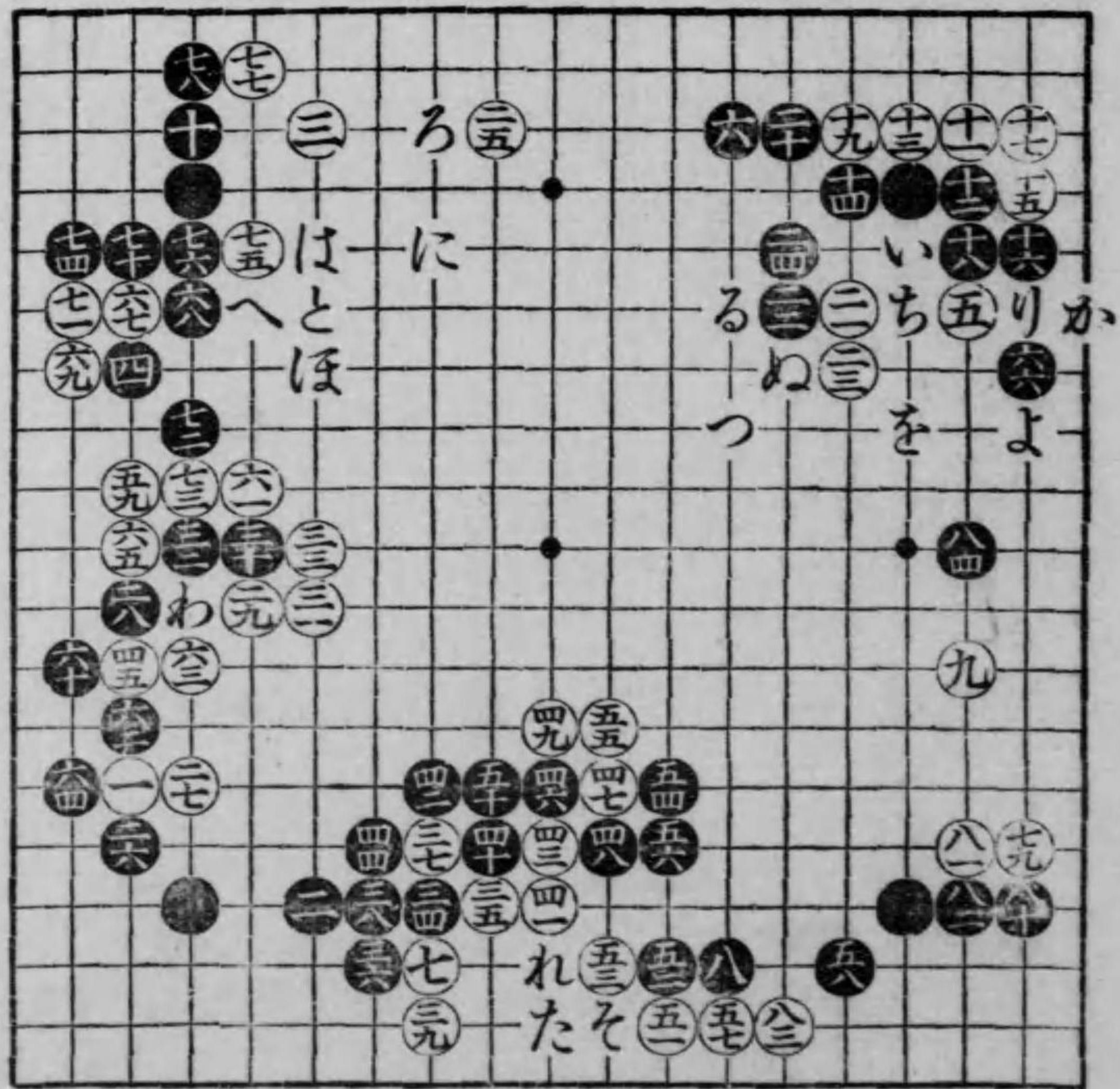
(同次局) 黒十一は先づ十二の
點に尖み白(い)と約へた時黒十
八の點に打ち白(ろ)と受けた時
黒十一に尖む手順に運ぶ方が利
益である。黒二三は三三の點を
擇むべきである。

(白一目勝)



第十四局

(第十四局) 黒十二は普通では
あるが此場合は十三の側から約
へ白十二に盤つた時黒(い)と行
び白十八に粘いだ時黒(ろ)と夾
み白(は)と立ち黒(に)と立ち白
(ほ)と立つた時黒(へ)と覗き白
(と)と粘いだ時黒二三の點に斜
走して大模様を張るべきである
若し又黒(い)と行んだ時白十八
の點に粘がずして(ち)と並ばば
黒十八白十六黒(り)白十五黒二
一白二三黒二二白(ぬ)黒(る)白
(を)と掛粘いだ時黒(ろ)と夾ん
で前述の通りに運ぶが良い。黒
二八は高く(わ)の點に夾む方が
激しくて良い。黒四六は六十の
點に挨拶して置かなければなら

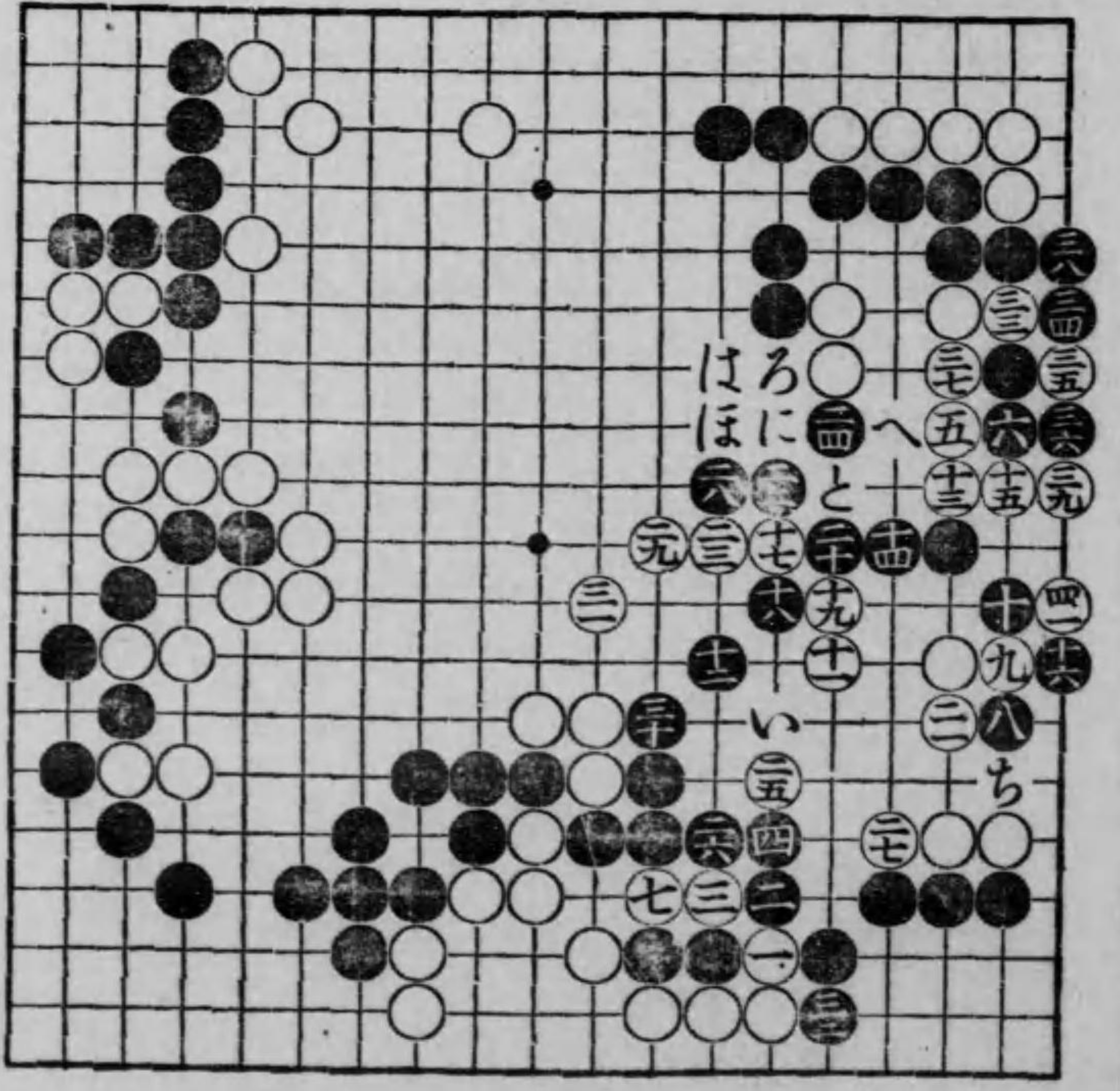


ぬ。然る時は白は六三と引いて居る外はない。此時黒八一の點に尖んで八四の打込を狙ひ、白(り)と約へ黒(か)と刎ね白(よ)と外した時黒(た)と走り白(れ)と頂け黒(そ)と引き白四九の點に飛出した時黒(つ)と飛んで右側の白地を削りつゝ遂に、七以下の一隊は一以下の一隊とを兩睨みに打つべきである。

(同次局) 黒八の手で(い)と打ち白十一に飛出した時黒二十の點に飛出して上下搦み攻めの戦略に出づべきである。白三七に約へた時黒三八の粘面白からず此手で四一の點に粘ぎ白(ろ)黒(は)白(に)黒(は)白(へ)黒(と)白三九と生きた時黒(ち)と行んで九以下の一隊を殺戮すべきである。然るに斯く三八と粘ぎたる爲め白に三九、四一と投り込まれて劫争となつては黒に勝算はない。(白勝)

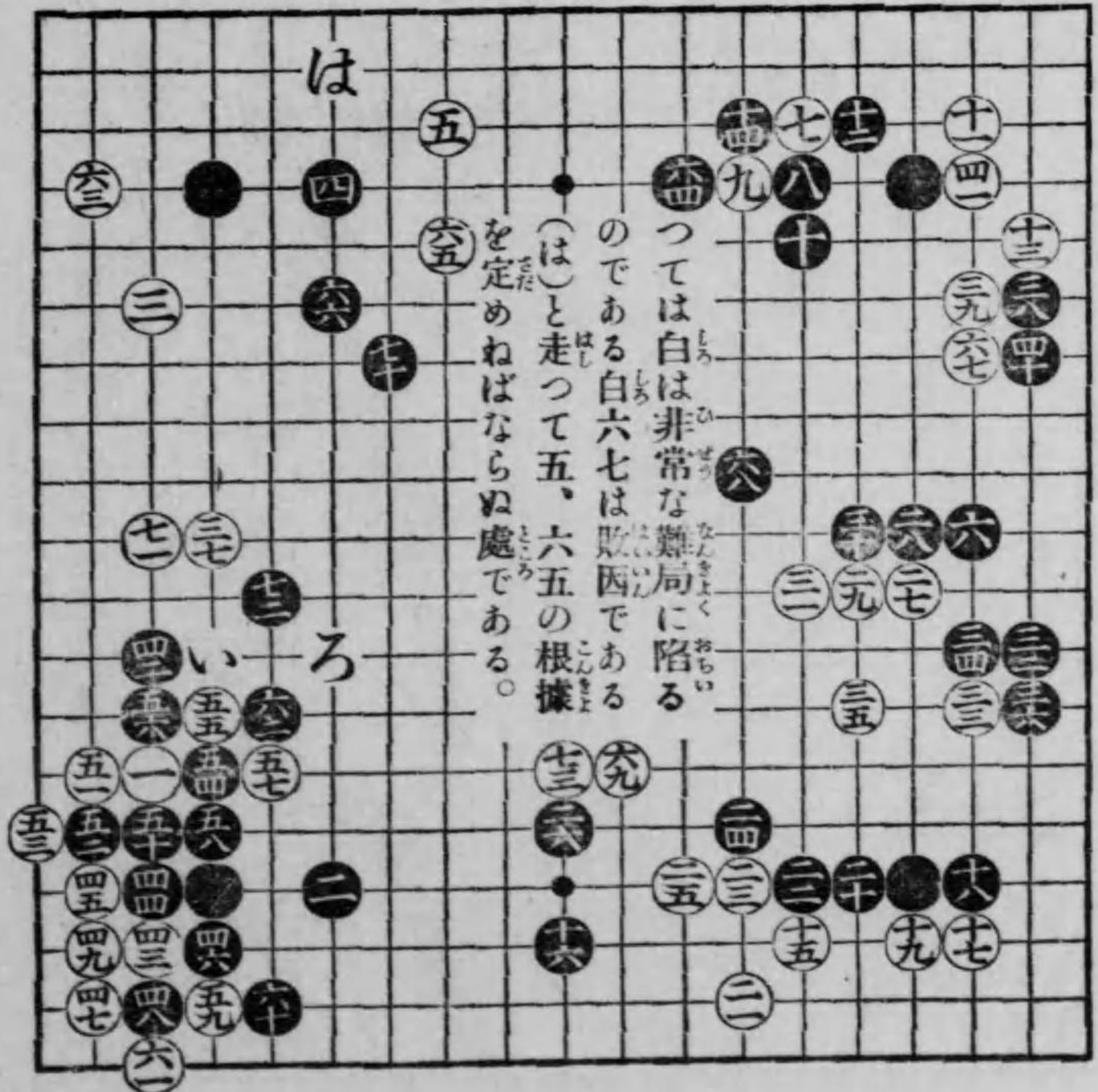
④ 三五の處に粘ぐ

局次



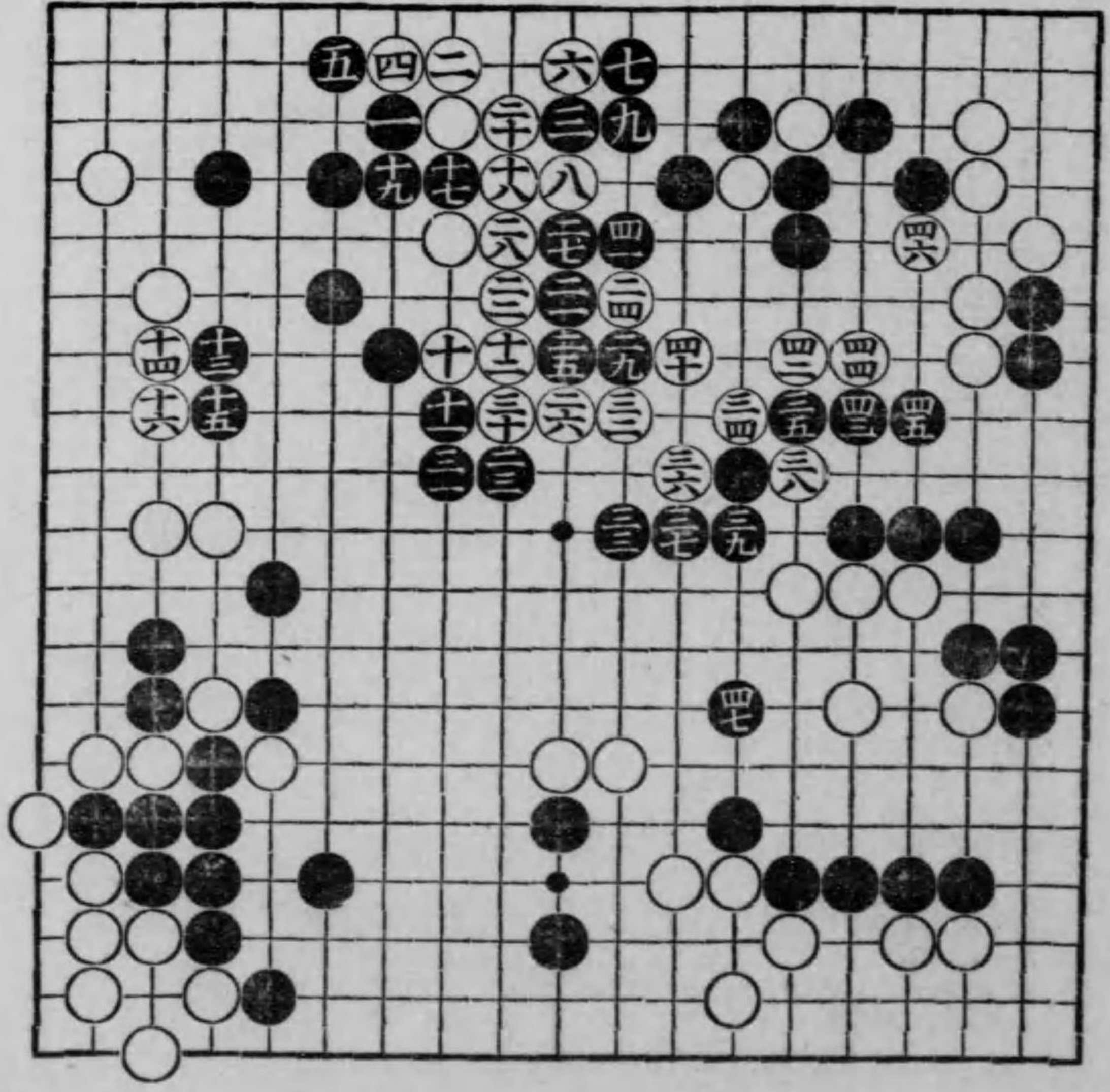
(第十五局) 黒六は敢て悪いと云ふではないが白五の掛りに對して黒十四へ拓くのが普通である。黒二二は軽く二四の點に斜走し白二五へ飛出した時黒二六に單關するが良い。黒三八は時機が早い。直に四二の點へ打込むべきである。黒五十は五九の點に粘りて仔細はない。假りに黒五九に粘りだとして白五七に飛出せば黒五四に割込み白五五に約へた時黒五一に夾む筋があるから浮つかり五七杯に飛出す譯に行かぬ。そこで白は餘り好まぬ手であるが五六に突當つて黒が(い)と立つた時五七に飛出す外はない。然る上は黒も亦(ろ)と飛出すが良い。かうな

局五十第



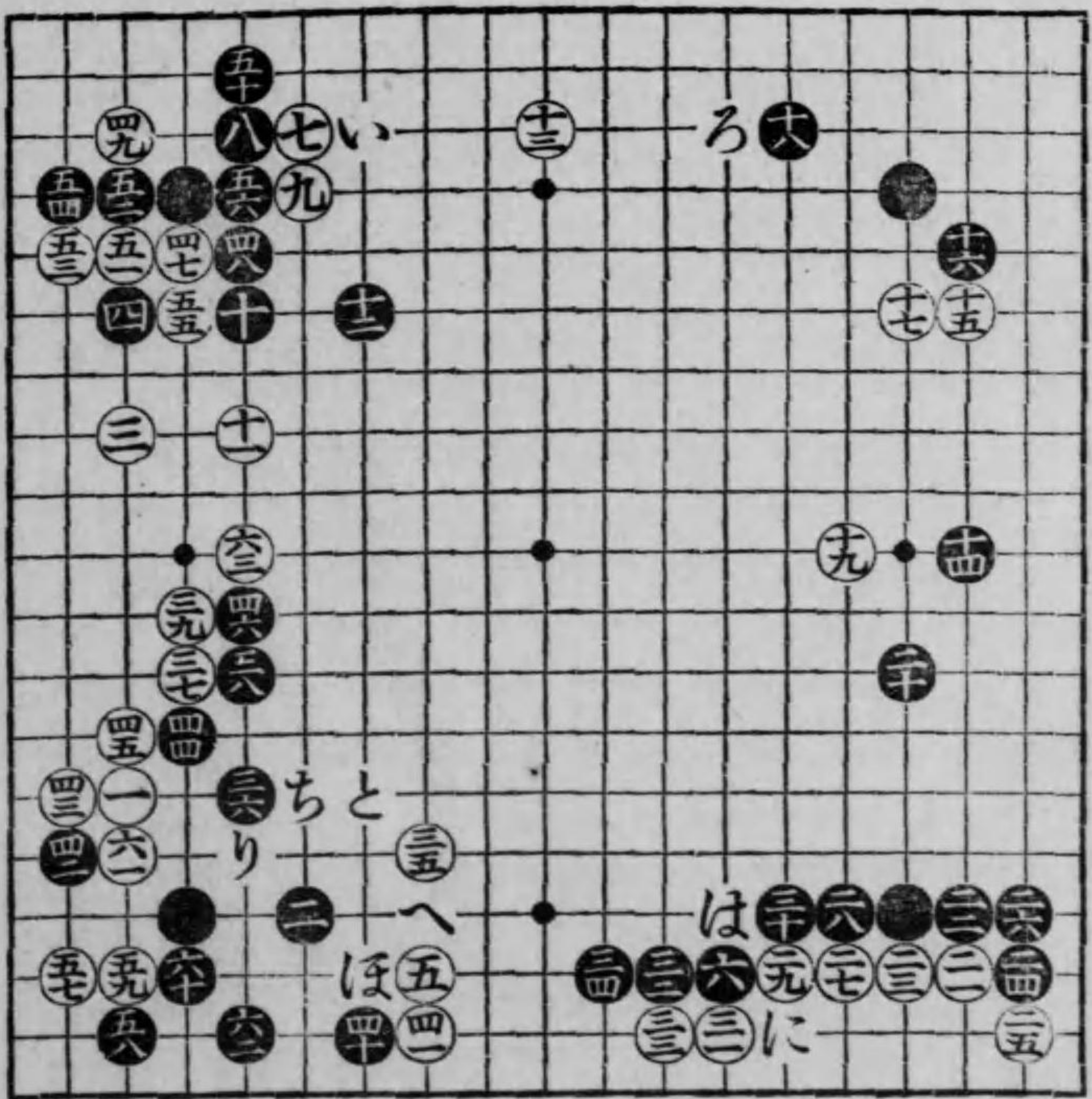
(同次局) 黒一以下四七と白の五子を擒にした手腕は賞するに値ひするのである。(黒中押勝)

局次



(第十六局) 白が三と来て居る
 窄い方へ黒が四と詰めたのは如何。何も好んで窮屈な想ひをする道理はない。(い)若しくは九の點に拓くべきである。白十五と掛つた時黒普通の如く(ろ)杯に大斜走すると白に三三の所に打込まれて生きられて仕舞ふ。さうなると白十三の詰ある丈それ丈黒は酷い目に窘められなければならぬ。そこで此く十六に尖み頂けて先づ三々の打込を防いで置いて白が十七に立つた時黒十八と堅固に構へたのである。黒二四の手で二六と下り白二七に行んだ時黒二八と約へ白二九と突當つた時黒(は)と立ち白二

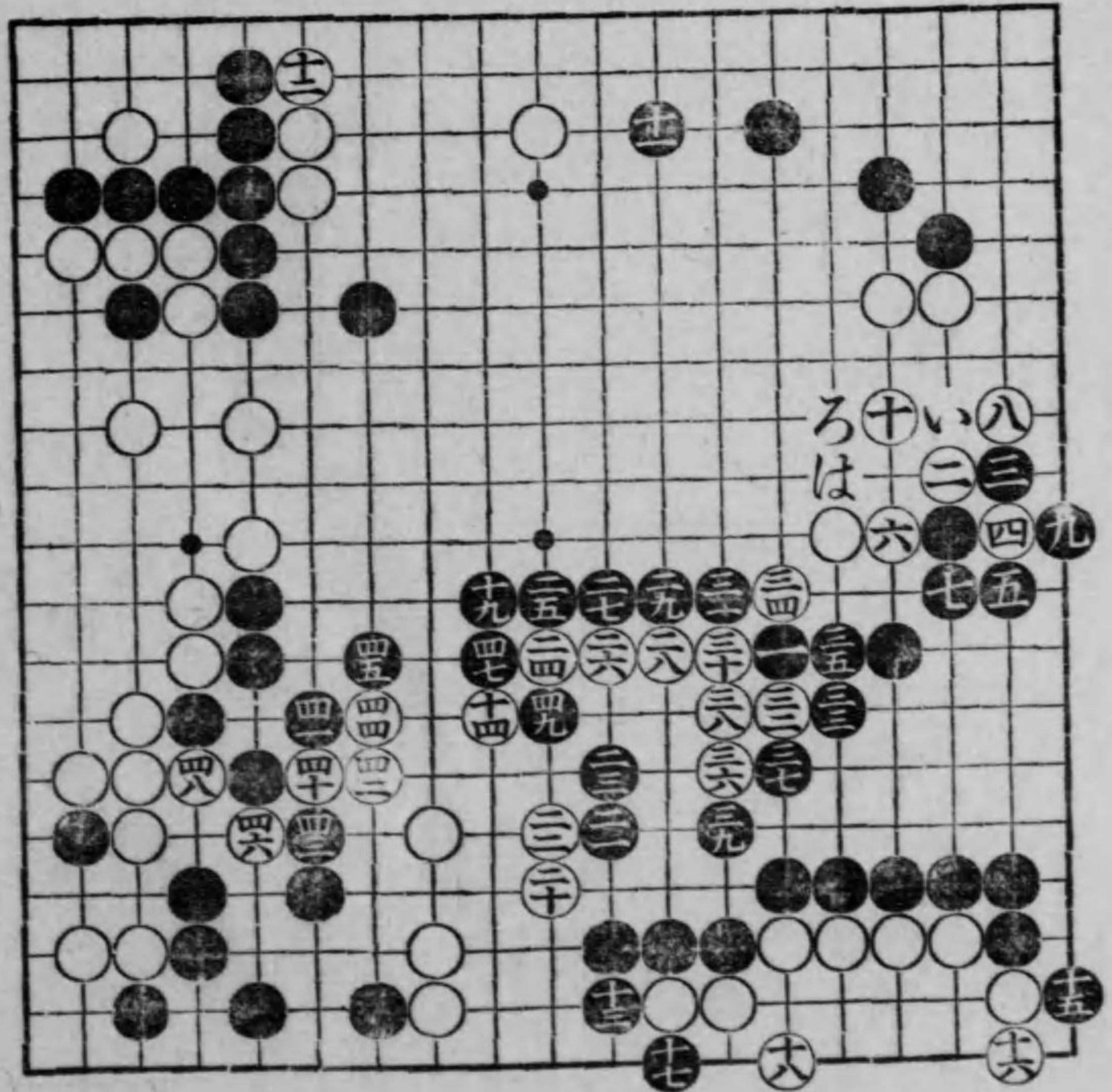
局六十第



四と約へた時黒三一と下り白(に)と活きた時黒(は)と尖頂け白(へ)と立つ時黒(と)と煽つて五(へ)の二子を睨みつゝ三七の點に打込を狙ふべきである。黒三六は(ち)と單關し白四四と身構へた時黒六一の點に尖み頂けて(り)の眼を防ぐを本手とするのである。黒四十、四二の鎖國根性は良くない。何とか他に工夫はないか。黒四八以下五六までの應接振は立派に型に稽つて居る。黒に五十、五六と鐵壁を築かれて、七以下の三子を薄弱ならしめたのは白の不覺である。

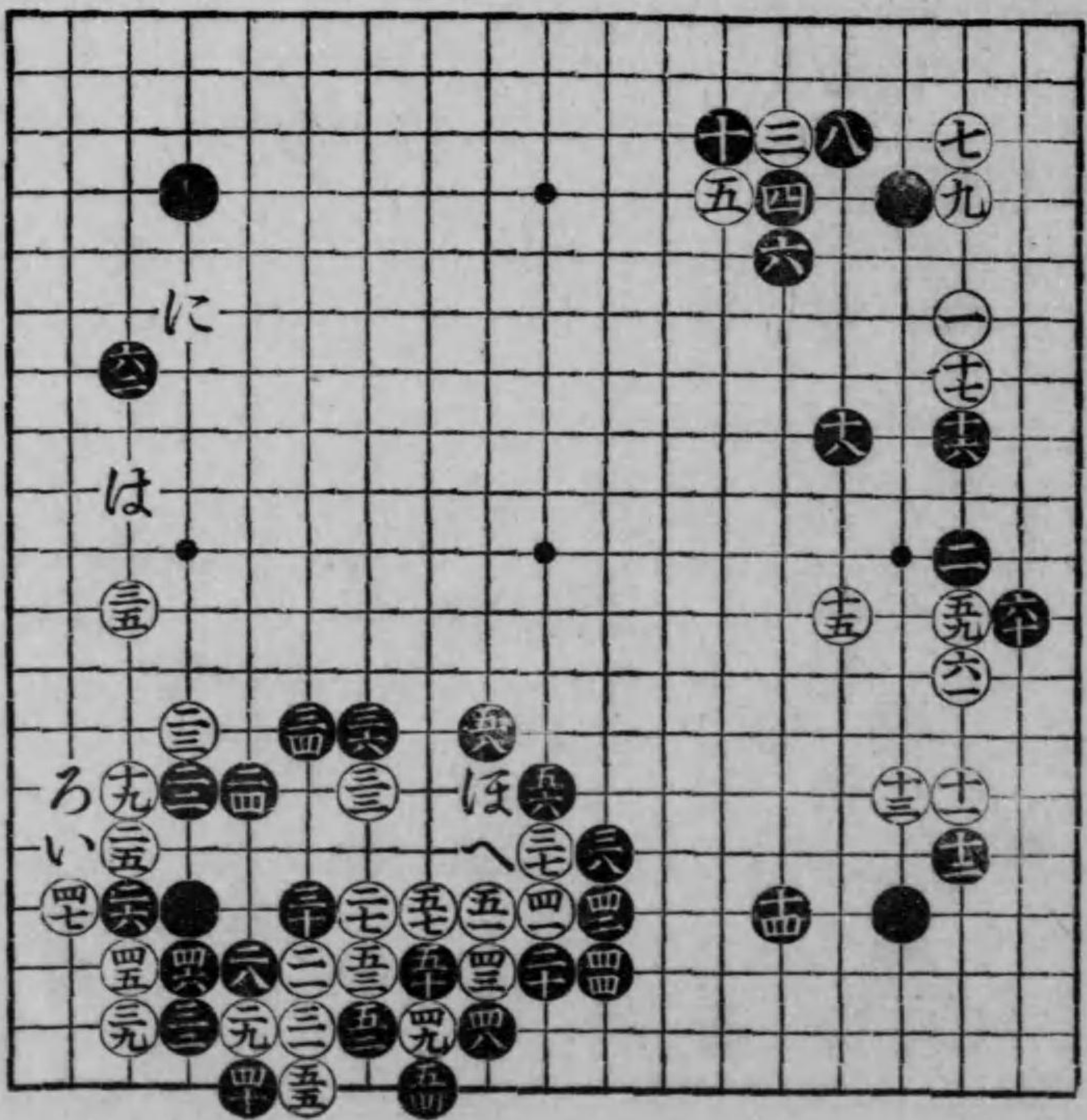
(同次局) 黒一は先づ(い)と拆
 き白(ろ)と連絡した時黒十一と
 詰め白十二と約へた時黒一と立
 つ手順に運ぶべきである。或は
 一の手で劇しく(は)の點に頂け
 て打つ手段もある。
 譜の如く白に二以下十と陣形を
 整へられて仕舞つたのは黒の不
 利である。黒十九以下四九まで
 の奮闘振は却々悔り難い手腕で
 ある。白は深く甲を脱いで降参
 したのである。

局次



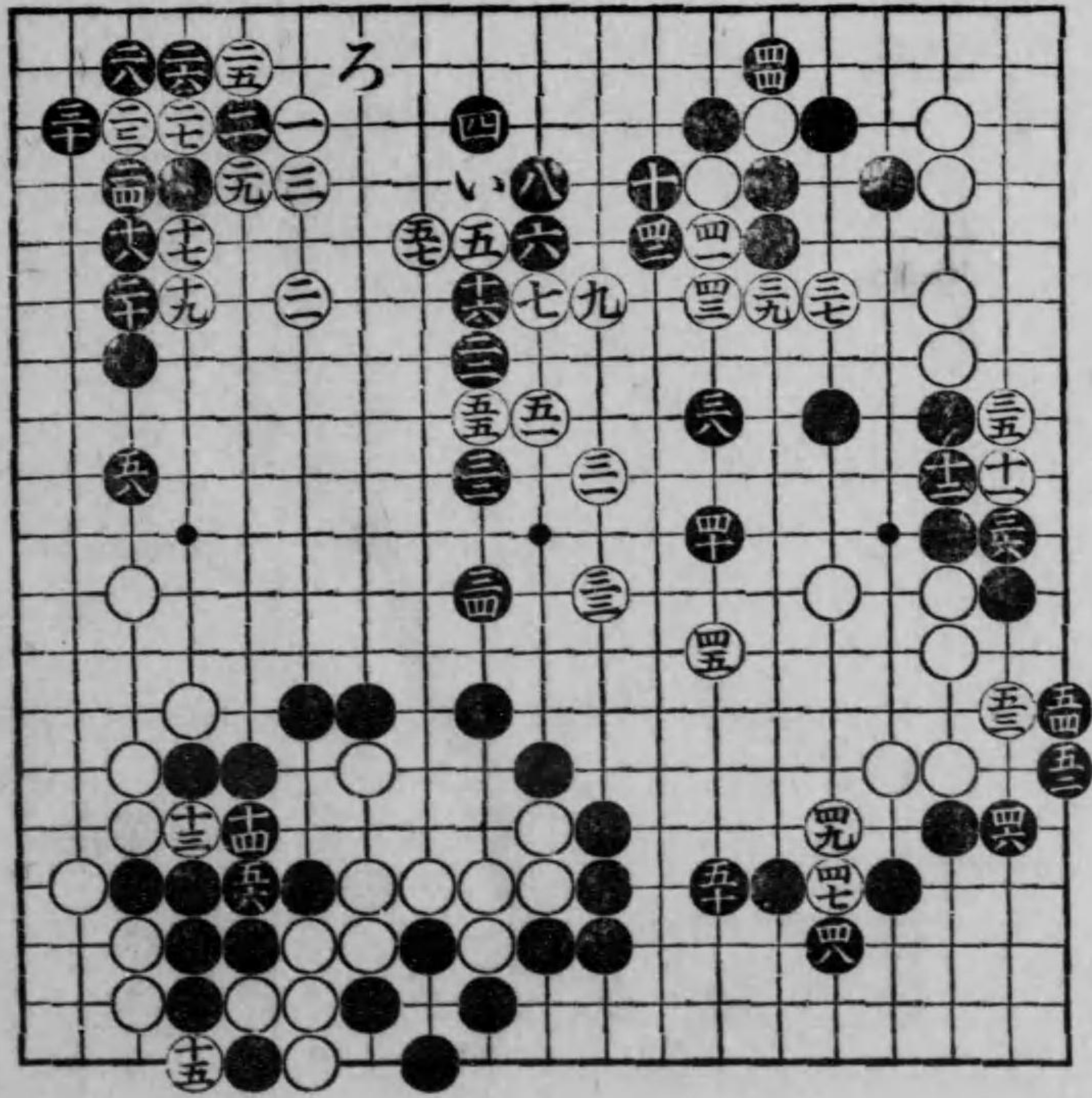
局七十第

(第十七局) 黒三六は(い)と劔
 ねて確實に活きて置くが良い。
 然すれば次に白から(ろ)と約へ
 て来ても最早三九に頂ける手は
 ないから安心して他を打つべき
 で若し又白(ろ)と約へずして他
 を打てば黒は透さず(は)と詰め
 白(ろ)と約へた時黒(に)と締つ
 て儲けることが出来る。故に黒
 (い)の劔ねは他の大場に譲らざ
 る大きい手であると心得て置く
 が良い。黒五十の手で五と切
 り白五十に粘いだ時、黒五六白
 (へ)黒(は)となる方が厚い。



(同其二) 黒四は毎度云ふ通り高く(い)の點に打つ方がよい。黒三八は先づ四六の點に下るのが手順である。黒四十も同然、黒五二は此場合五三の點に打つ方が敵の眼の關係上面白いではないか。黒五六の手で五七に約へ白五六に取つた時黒(ろ)と斜走する方が利益である。

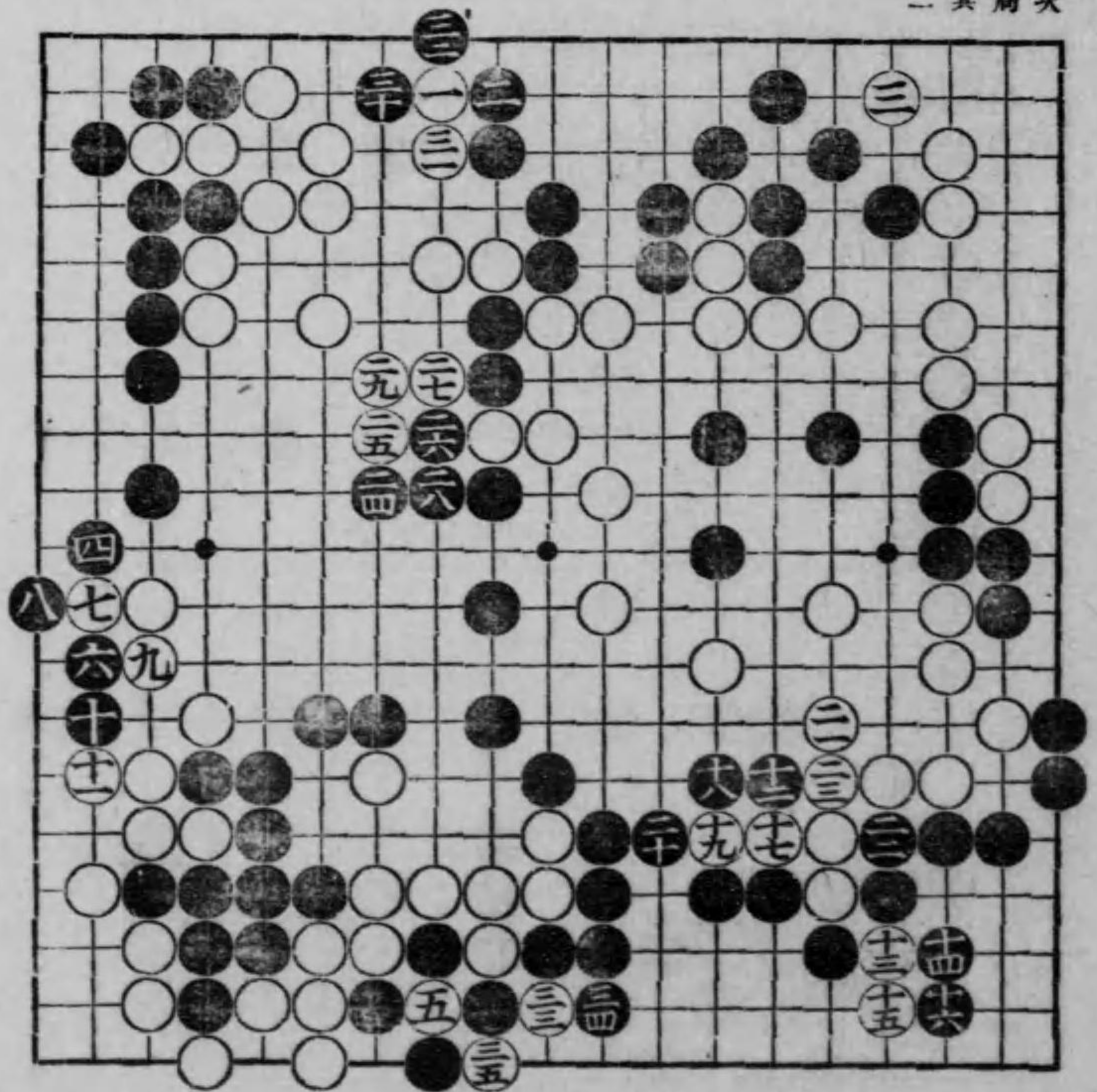
一其局次



(同其二)

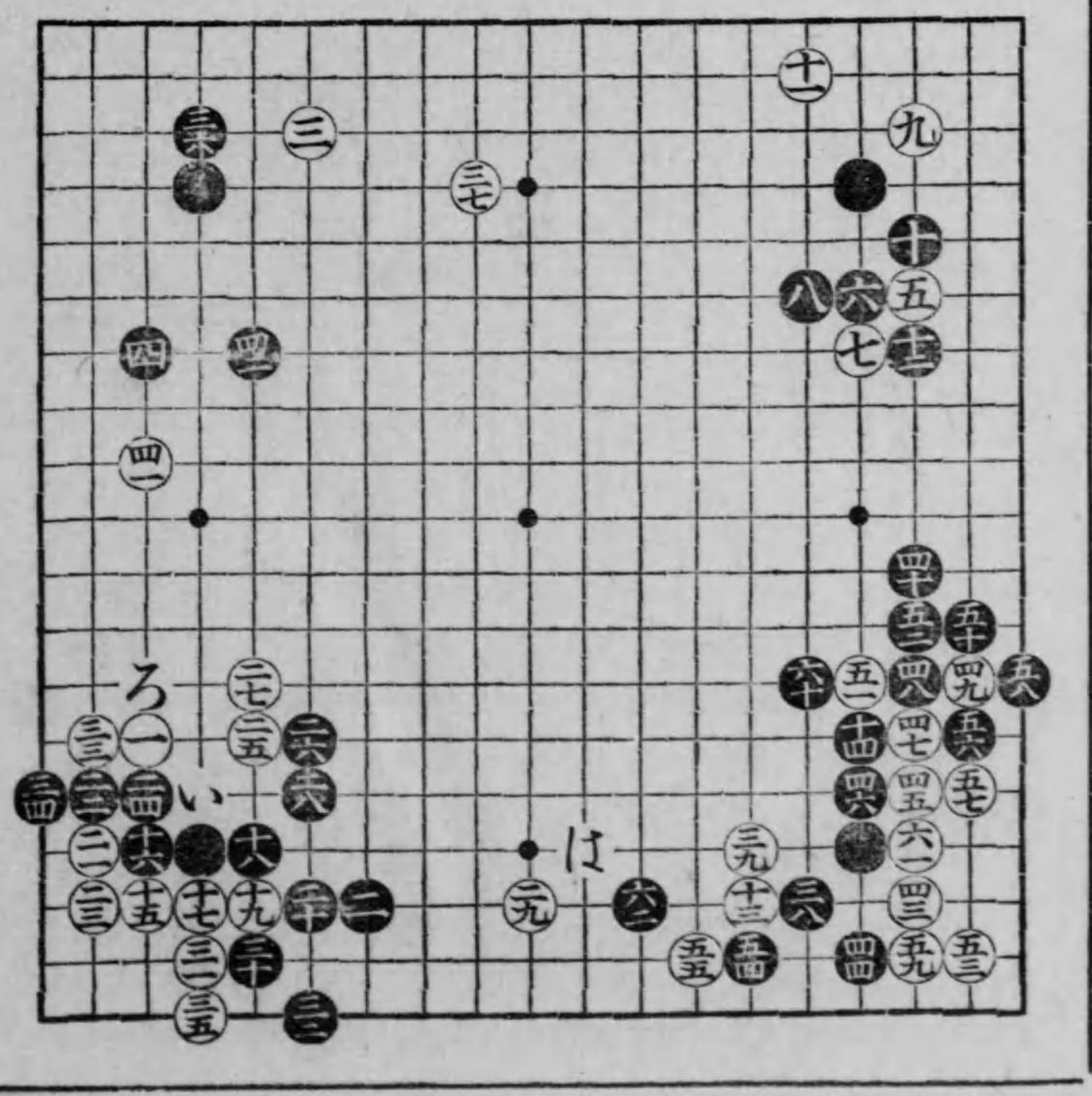
(黒七目勝)

二其局次



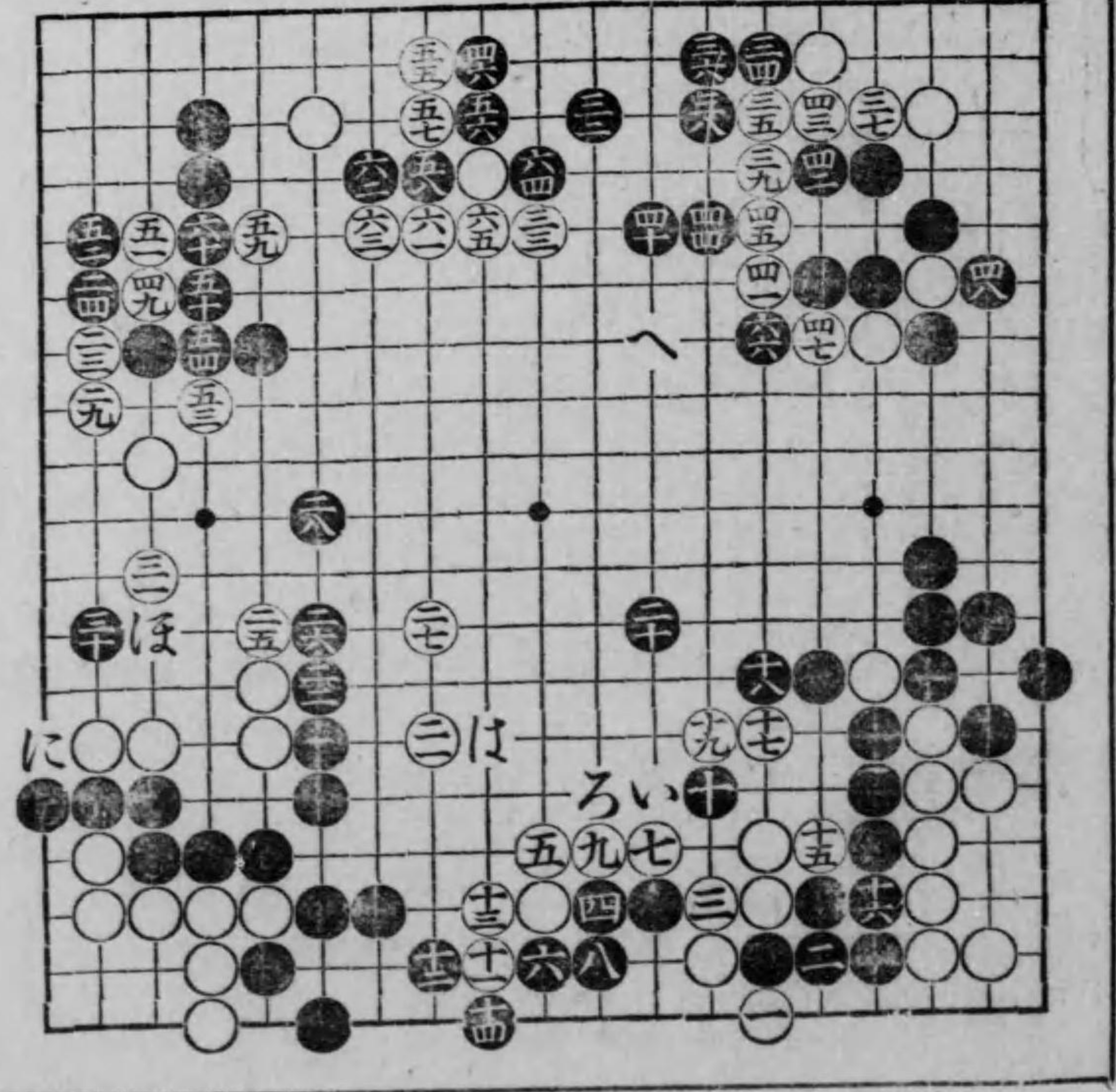
(第十八局) 黒十六は十七の點に約へ白十六に盤り黒(い)と行び白二四若しくは(ろ)と打つた時黒三八と尖み頂け白三九と立つた時黒(は)と打つて十三、三九の白を攻めつゝ左右の陣形を整へるが良い。黒三十は悪手である。爲めに白から三三と約へられて一以下の陣形を整へられは黒の不利である。黒三八も亦悪い。白に三九と立たれて六二の打込を失つたのは惜むべきである。

局八十第



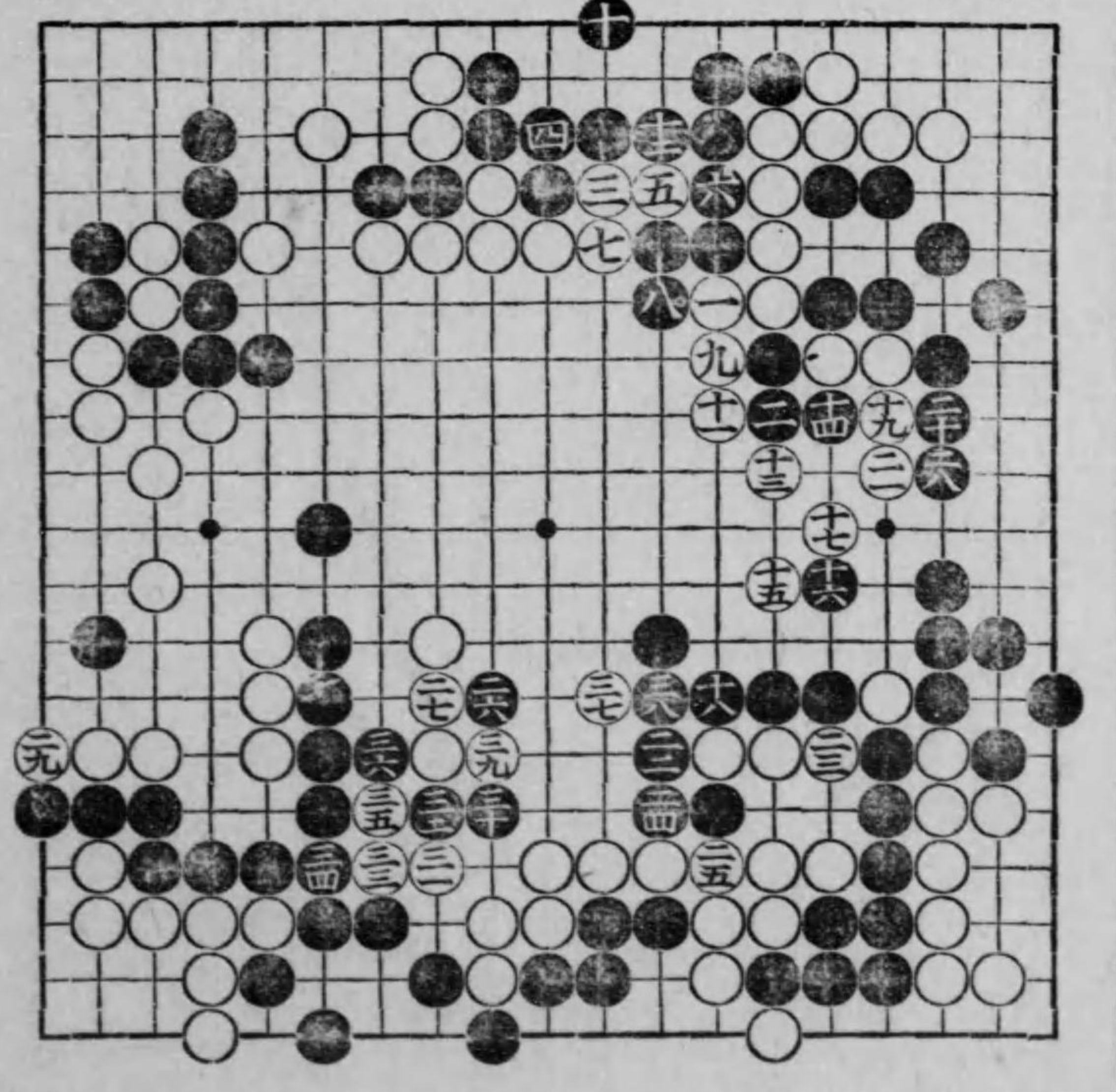
(同其一) 黒六の手で(い)と飛出し白八の時(ろ)と並び白十一の時(は)と斜走するに於ては白は實際弱るのである。白三一の時黒先づ(に)と盤り白(は)の邊に活を計つた時黒三二の點に打込むべきである。黒四二、四四は俱に宜しくない。單に(へ)と飛出すが良い。白五三に覗いた時黒は何故六十の點に粘がなかつたのか。然すれば白から五五と頂けられ五九と覗かれる筋は茲に消滅して仕舞ふので従て三二以下の一隊の安全を期するこ

一其局次



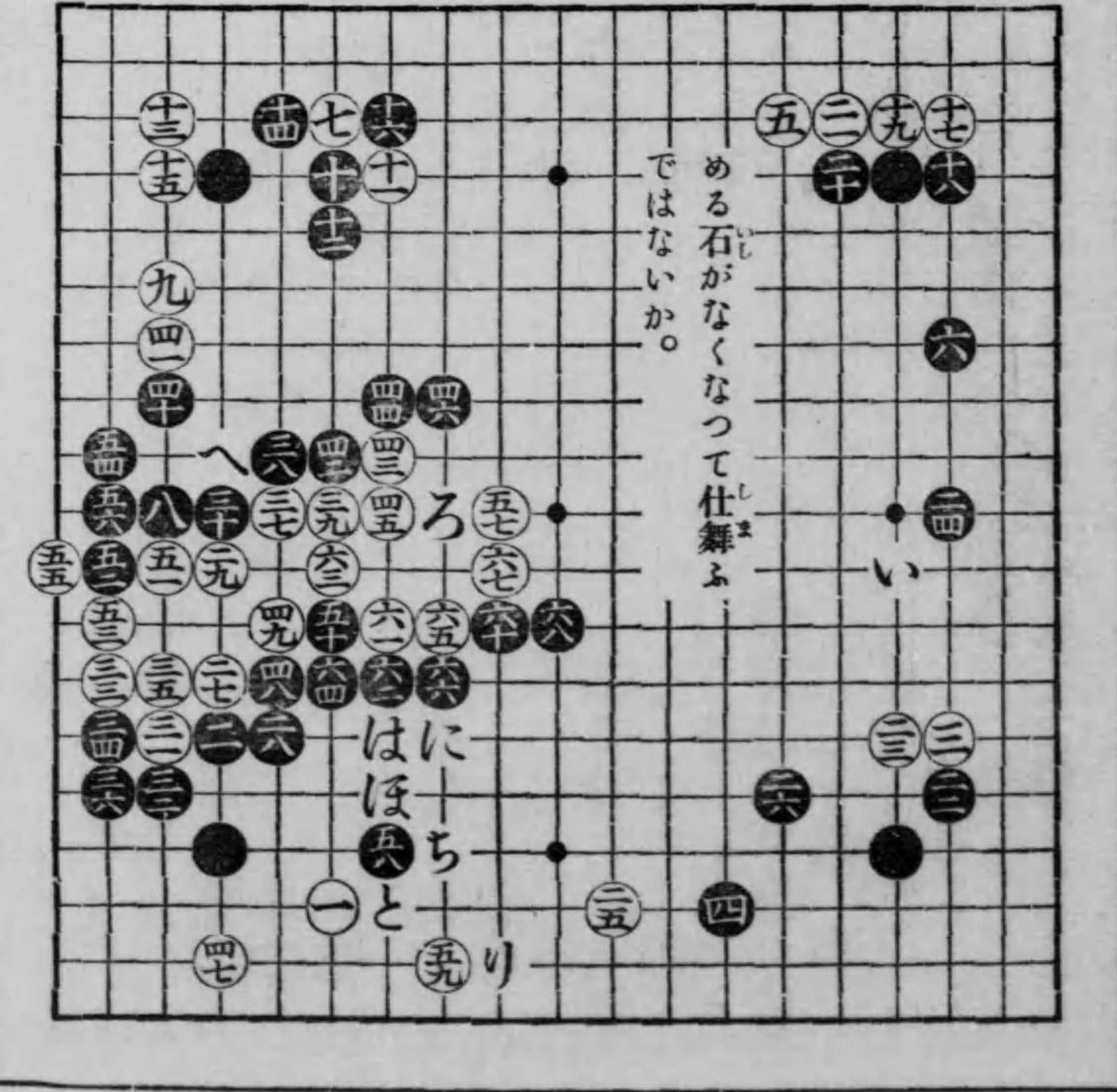
(同其二) 黒十四は二一の點に打つ外はない。黒三十以下三十六までの手段は無理である。白から三九と一目を刺さるゝに至つては最早挽回の途はない。
(白拾目勝)

二其局次



(第十九局) 黒二四は矢張(い)の點に打つ方がよい。黒四四は甚だ緩い。激しく四五の點に切り白五十に備へた時黒(ろ)と行(に)と刎ねた時黒(ほ)と行んで上下搦み攻めの趣向に出づべきである。白五三は兎も角(へ)の點を切つて黒の應手を聞くべきである。斯く五三と約へた爲め黒に五四と掛粘がれて良形を備へられたのは白の失着である。白五九は(と)と約へ黒(ち)と行んだ時(り)と斜走するが普通である。黒六十は六五の點に飛んで飽くまで眼を造らせないやうに打つがよい。白に六一以下六七と先手で活きられては黒の攻

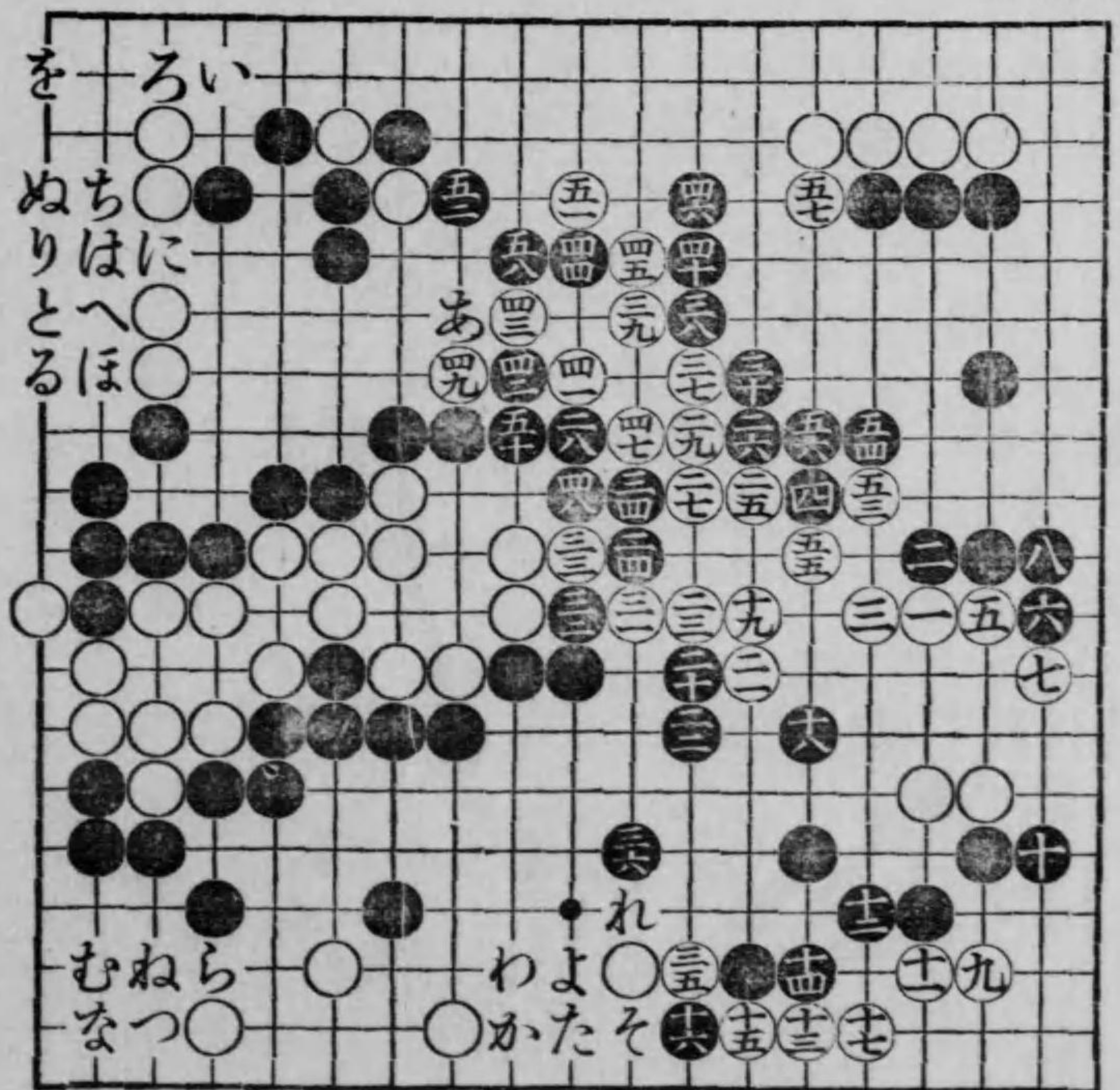
局九十第



める石がなくなつて仕舞ふではないか。

(同其二) 一以下の陣容が未だ整つてゐないのに白が九と打込んだのは無理である。黒十八は十九の點から攻むるが本手であるが強ひて敵を攻めなくとも退いて三五の點に粘いで居れば黒の勝である。黒四四は打過ぎである。此手を以て(あ)と勿ね白四五と行ひ黒四六と行ひ白五八と活きた時黒(い)と尖み白(ろ)と約へ黒(は)と覗き白(に)と粘ぎ黒(ほ)と勿ね白(へ)と突込み黒(と)と盤り白(ち)と約へ、黒(り)と粘ぎ白(ぬ)と當て黒(る)と粘ぎ白(を)と活きた時黒(わ)と打ち白(か)と約へ黒(よ)と行ひ白(た)と盤り黒(れ)と極めつ

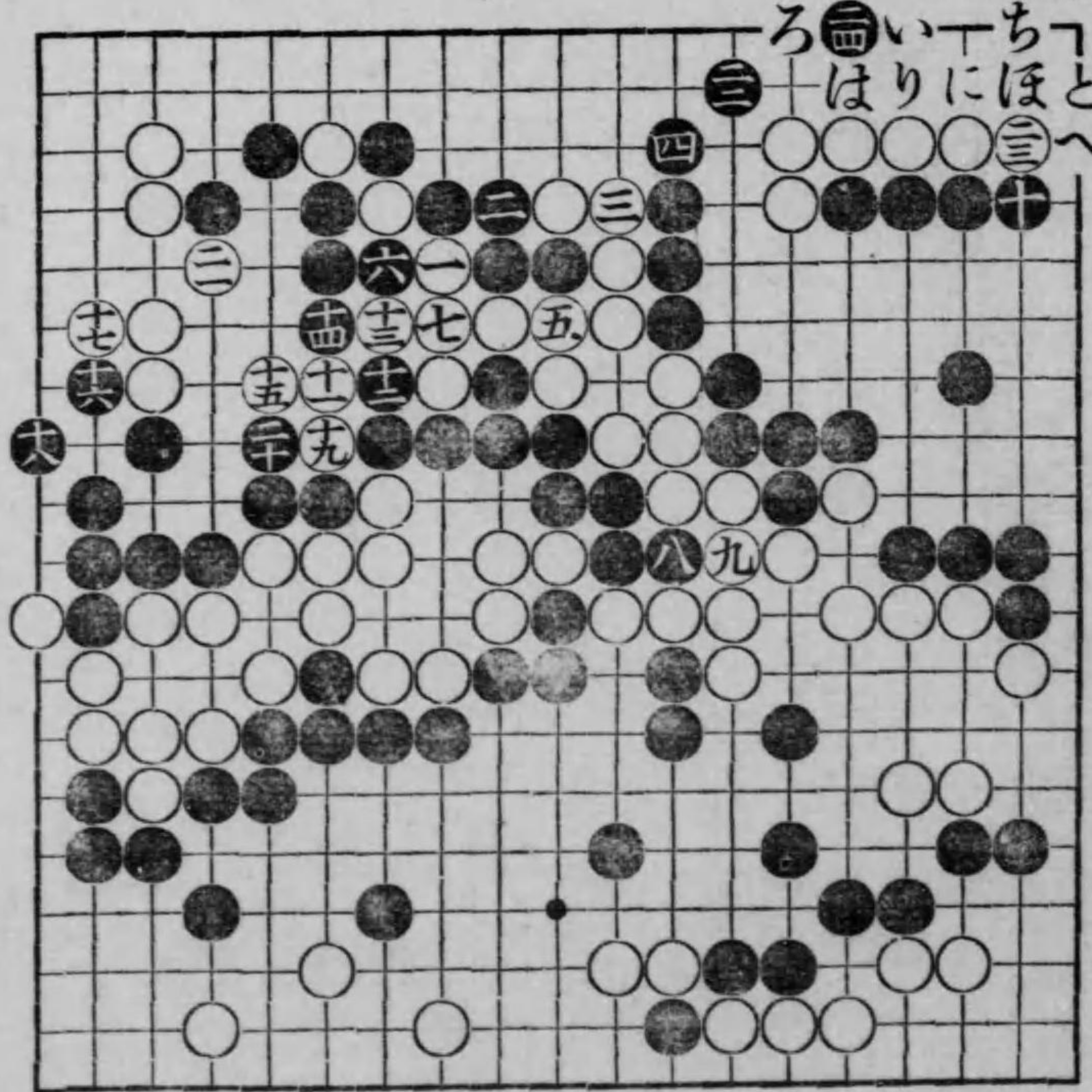
一其局次



け白(そ)と粘いだ時黒(つ)と頂け白(ね)と勿ね黒(な)と行ひ白(ら)と粘いだ時黒(む)と盤つて居れば細碁は細碁だが黒の勝利は固より争はれないのである。白五七は五八の點に活を計る外はない。

(同其二) 黒十の手で十一の點に尖んで居れば中央の大軍を擒にすることが出来たのである。黒二四の時白(い)と來れば黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)黒(へ)白(と)黒(ち)で死、又、黒(ろ)の時白(ち)と打たば、黒(と)白(へ)黒(り)で、矢張死。(黒中押勝)

二其局次



11
3/0

圍碁研究之一大權威

布石攻合新法	置碁布石新法	互先定石新法	置碁定石新法	圍碁初心の手引	方圓社阿部龜治郎著	置碁實戰詳解	互先布石と侵撃法	置碁布石攻合と打碁法	互先打方と逆撃法	置碁打方續妙手百番	置碁打方妙手百番	互先定石と打碁	置碁定石と打碁	初段宇野積雄	本因坊中根鳳次郎
--------	--------	--------	--------	---------	-----------	--------	----------	------------	----------	-----------	----------	---------	---------	--------	----------

定價各册六錢拾郵稅各册六錢

大正八年三月廿九日印刷
大正八年三月廿九日發行
〔定價金六拾錢〕

著者權所有

著者 中根鳳次郎 宇野積雄
 發行者 博多 久吉
 印刷者 磯野利木松
 印刷所 大阪市南區大寶寺町西之町二十二番地
 紅野次郎

發賣所

大阪市南區大寶寺町佐野屋橋筋西へ入南側
博多成象堂
 電話南區七三七番
 振替大阪七三三番

終

